

祭神は菅原道真を祀る舊社領は一石二千四百坪社地二百四十六坪除地  
四三段八畝二十坪現境は東西十五間三尺南北十二間四尺面積百九  
十五坪境内に稲葉秋葉大神全り此等神祠を祭る文政天保頃境  
内に由學館なる學會を設けたりし際學徒の崇敬及象徴の崇拜心非  
常に賑かでありしは當時の思想より推して宣なりしことと考察せら  
る

三熊野神社(本郡塚)

祭神は伊弉諾命伊弉冉命にして元本郡塚と北郡塚の土神であつた然  
るに御手洗川の氾濫によりて本郡塚は南に北郡塚は北になつて遂に  
西河内ニヶ村分たれ今本郡塚のものを北に北郡塚は北になつた舊時  
は社領二斗六升現境内は東西八間南北十八間一尺面積百四十六坪も  
此所は石塚であつたが平にして祠を立つ時は現伊藤氏淨泉寺の祖先  
たる伊藤淳鼎氏特に四隣に腕力に於いて他にまさるなく膂力真に勝  
りて斧を用ひずして皆自己の力にてこれ共々うち合はして石をつむ  
故に其處に金を用ひて割つた痕跡の如きものなきといふ  
境内社殿の東北隅に道祖神の祠あり左に蜂城先生の由緒書を掲げん  
仰々當所道祖神の濫觴と申すは昔時人皇百有餘代の帝後陽成院第八

之宮良純法親王と申し奉るは寛永廿年當國に御左遷の御身と成らせ  
られ續翠村に御座し給ふ折節は所々御遊覽被爲在或時竊に一之宮  
明神へ御参詣ありせられ候御通行の御當邑の名を御尋有之候得ば都  
塚と奉申上候へば其の時に塚にても有之哉と御尋ねにつき當時氏神  
の社地則塚の由奉申上候へば立寄可休息旨被仰則當氏神の社地にて  
石に御腰を被爲懸御休息御腰を掛けさせられ候石其の後此石  
に腰掛或は上り候もの必ず煩か又怪我いたすもの有之に付隣家のも  
の此石賞ひ請け屋敷の鎮守として祭り候由申傳へ今に有之側にか  
石の出たのを御高覽有之此石常の石にはあらじ堀りて見よと居合は  
七候郷民に被仰候則塚候所二つの石堀出し高覽に備へけ水は之は  
稀有なる石是は大田神なるべく大田神とは道祖神のことなり此神は  
壽福をちたへる神なり此神出現せるは正しく郷中繁榮の基なるべし  
是を尊崇して祈願せしむるに利益あらざといふことなし必ず心正  
しく直にして祈る時は壽福を得ること疑あるべからずと宣し候より  
以末福の神の道祖神と申傳へ侍りき  
又此道祖神と申奉る御神は猿田彦命と申して千早振る神代の昔天照  
大神の御孫天津彦火瓊杵尊天降らせ給ふ時天の八街に待請ひ奉り  
て道開きし給ひて日向の高千穂の楳觸の嶽に御案内申しそれより自  
分は伊勢の狭長田五十鈴の川上に鎮り給ふ其時皇孫勅にて天細女命

と御夫婦とならせ給ふ御神なり依て始めて道啓きし給ふに於て、  
ちの親の神とは奉申なり、道は暫くもはなれず、かからぬなり、  
にありず、在界の道も人聞一生の道もはなれず、かからぬなり、  
道をよく守るものば深く神も悦び給ひて自然に福徳を與へ給ふ  
此御神も日の神の道を懐敬ひ地君となり給ひ候國成命と名のり給  
ふ不親不聞不言の混純のほじり守り給ふが故に世間の道祖神の  
石は其混純の往昔を守護し給ふ故なるべく當村道祖神の御形は大小  
二つは陰陽を表はし、石の堅きは神州の道を堅く守り給ふ事を表して  
神體となす石の圓きは人の心とかく角ありて上の平なるはただ圓  
かりにては家内も治らざる事ある故に角ありて平なるはただ圓  
したるものなるべし、殊にこの尊石神體の軽重座すこと御神徳の炳然  
證顯まことに恭恐すべし、然れは敬神禮拝懇誠なるときは感  
應利益あらざといふことなれ、依つてこの度清淨地に御殿を建遷座し  
奉り、諸人に令拜所なり、此神形瞻仰するに付ては衆人能く道を守る  
こと家内の和合專一に心懸別て夫婦の陰陽和合を悦び給ふ然る時は  
良子を産み孫相續繁榮の基、慈じて道を守り給ふ神故に道祖神と  
書いて道のおやの神と讀むことなり、將又人先天地の恩徳を有知し

天地の恩に報ずべし、天地の恩に報せんと思はば、父母に孝行を盡すべ  
し、又此の在を去る父母ならは跡ねん、ごろにとむらふべし、父母は別天  
地なれば、父母に存行なる企は別て、道祖神の御心に叶ひ、ふかく悦び給  
ひて福徳を與へ、自然と外より来る災難を除き、家内より起る騷擾なく  
幸ひし給ふ、邪曲なる心起らば、神直日大直日守らせ給ひ、正しく直なる  
身に在し、幸ありせ給へ、と祈年七しめん、人々に於ては必ず、其の業に  
幸を得別ては、養蚕を身り給ひ、満作せしめ、子孫に於ては、無病長久、奴婢  
牛馬に至る迄、災にして、五穀は豊満せしむること疑ひあるべからず、  
依て衆人にかく、尊信し奉るべき也、

嘉永三度戌年

十天神社(末木)  
祭神菅原道真を祀る、黒印神領二斗三升二合、社地若干、鹽渚宗長昌寺兼  
帯存りし所

一 天神社(東原)  
祭神菅原道真を祀る、御朱印神領一石三斗余、社地若干、但し御朱印は橋  
立明神上一紙にて神領社地は本村の浪人名間佐次右衛門の道遠であ  
つた

十二諏訪明神(大塚)  
 祭神建御名方命社地縦十五間横十三間除地なりといふ上萬力村神主  
 兼帯なりし所

十三伊勢神社(北都塚)  
 堂帳には大日靈女命を祀るとあり

十四金山權現(金田)  
 祭神金山彦命御朱印神領壹石二斗余社地縦十九間横十二間橋立明神  
 と一紙の御朱印なり上萬力村神主の兼帯なりし所

十五中村御嶽社(坪井)  
 祭神大己貴命少彦名命素戔鳴尊を奉祀す社殿間口壹間奥行一間半土  
 藏造とす境内及別荘拾七歩あり

十六橋立權現(東原)  
 祭神天津日子根及中川六郎守運を祀る社の東北隅に在る小祠は  
 中川家累代の勲功者及分家存る中川祐仙を祀り配祀せるなり

第十九章 佛閣一般

一宮村佛閣一般

山號	寺名	宗派	所在地	本尊	本山
一 日光山	淨光寺	曹洞宗	一、宮正	千手觀音	中山廣嚴院
二 瑞光山	長昌寺	臨濟宗	末三	正觀音	京都妙心寺
三 金剛山	慈眼寺	真言宗	同上	千手觀音	醍醐報恩院
四 望光山	真光寺	同上	同上	同上	同上
五 護國山	國分寺	臨濟宗	同上	同上	同上
六 宗前山	長壽院	臨濟宗	同上	同上	同上
七 高雲山	長徳寺	臨濟宗	同上	同上	同上
八 助給山	泉正寺	臨濟宗	同上	同上	同上
九 青野山	小玉寺	臨濟宗	同上	同上	同上
一〇 正覺山	品念寺	曹洞宗	同上	同上	同上
一一 禪陀山	清願寺	曹洞宗	同上	同上	同上
一二 大悲山	普明寺	真言宗	同上	同上	同上
一三 金勝山	喜雲院	臨濟宗	同上	同上	同上

西中村山淨光寺	日蓮宗	坪井正	十段受茶羅	身延久遠寺
三萬年山光久寺	曹洞宗	同中正	十一面觀音	十山廣嚴院
天竺金山瑞蓮寺	淨土宗	同中正	阿彌陀佛	東御智恩院
又一行山春福寺	同上	下天作正	觀音	田中瑞蓮寺
八春日山春光寺	臨濟宗	小城區	地藏尊	松尾惠林寺
九支戸山王泉寺	同上	北郡塚	阿彌陀佛	同京都本願寺
一淨山極法寺	同上	同郡塚	同上	同東増上寺
三智王山淨泉寺	同上	同郡塚	同上	同三寶院
三金永山西邊寺	同上	同郡塚	同上	同瑞泉寺
三全山吉野寺	同上	同郡塚	同上	
三正覺山春蓮寺	同上	同郡塚	同上	

寺院十宗別  
曹洞宗 三 臨濟宗 七  
日蓮宗 一 淨土宗 七  
淨土真宗 三

六月光山 清光院 (一、宮正曹洞宗)  
本尊は千手観音菩薩牙百八粒御心元天皇元乙卯開年。創立は同  
山は中山廣嚴院第十一世乾山石真禪師の遺蹟に傳つてある。所在地は七石七十九番地なり

たり一三宮神宮寺は二十四番の札所にしし観音は今本寺に安置せり  
一三宮開之尋之来之見れば森の木かやに神をすむらん。

二端光山 長壽寺 (末木已臨濟宗)  
本尊は正觀音菩薩御朱印七石五斗余ありたり。開山は佛徳大通禪師開基  
は美開大杖師の二應永の始め草創せしものなり。ありてある禪師より入世安置  
西邊に在りては鎌倉長壽寺派なりしに如世大禪師の法脈を承けしに西山直木  
郡細川村法華別格地法泉寺第四世天州文窟の法脈を承けしに本山直木  
口邊に爾來法地としし續きたり。現境内三及八畝十四歩あり。往昔長徳院  
東泉院對面院壽徳院福壽院の六處ありしに今は撤滅せり  
甲斐國誌に曰く十世大輪塔中より修繕中石函を得たり。大般若經七一七  
卷、打座せり。十五世朴堂之の改寫せり。  
大般若經六百卷  
其の二百五十卷に甲州山梨郡一宮莊蓮田所奉木村居位奉三寶弟子源  
朝臣兩名家國譜書皇大般若經全經新撰品以此覆檢一門依能法  
界群生同円産智者也。明應六年龍集丁巳夏。如竟吉日敬誌焉。  
二百六十卷與書曰人  
日本甲斐一宮莊蓮田所奉木村瑞光山長壽寺公用大檀那源朝臣兩宮  
棟津守昌三流延萬歳と萬々歲

此九に上り此北中兩宮攝津守家國が家内一門繁栄を神に祈らんために  
書寫せしむるなりと明かむ所の心祈尚四代目が兵燹の難に遭  
ふを免れし此を石函中に入れし地設してあつたものが十一世松翁和  
尚に至り二百多年上手に埋没せられたために祈り席爛せむを勤め  
し十二世夢山和尚が六百卷に奥書して曰く

維時安永二歳癸巳正月珠日  
大教若經六石卷全部補闕就

甲州八代郡末木村瑞光山長昌寺現寺門懸門謹曰  
此九によつて今本村及名跡は兼本に兼本の意より遂に末木村としし現  
時に及べし此九は今本村の变化せしものなりことを知るべきあり  
されど此の六百卷は全部家國の書寫せしものありしと多敷の人の  
力をかりたることを明かすありかくして二八六、二八七、二八八、二八九の諸四  
卷は昭和三年と巨わんと八九四年即ち後一條天皇の長元五年即ち鎮西  
將從五位下源朝臣頼國と書寫せしものにして頼國は源朝政の長子であ  
る現に本殿若經六百卷は大正十三年一月三十日終刊の大鏡若經六百卷  
の印刷せしものにより

三、金剛山 慈眼寺 (末木己真言宗)  
本尊は千手觀音菩薩宝相院と號す本州新義叢林七寺の一である慶安三

年三月に鑄たり吊鐘に甲陽山梨郡末木村金剛山慈眼寺寶相院とあり  
士曰地藏院少阿彌陀堂百坪あり田舎領十五石四斗あり創立は不明文治  
元年中興の關藤清直上人堂宇を合山の境内に建立す遠久五年國主武  
田信成金堂を不仕加蓋を改造し國家繁昌を祈り永祿十三年皆地法  
印の時上堂り武田信成將に英勝を賞賜して堂宇を建て末印五貫及び錦  
の葉葉更足等二十し給ふ天正十年四月六日織田氏の兵燹に罹り合部一  
山島有に飯下家川家康になり十五石朱印を賜はせし寺の檀越の一  
等は列せしめたる信成の信成寺に係り末木金剛七條の繁栄の果に財の  
信持寺空の書に永祿十二年三月十一日とあり又智積院九寺を命  
持僧正者發の編むる所の建寧の法華念本華品一卷あり唐本なり葉編に  
細末を以て之を京と題し佛の字口刻は金末を以て之を別ち縁は法華念  
の末末は丹波守を織れり軸は次郎なり知に釋迦普賢像に千手觀音の像  
最終は口法三の名多人のこゝを愛慕天白故寺信持比年遺像とあり若經は  
慶安十一年清原の弟子にしし當り信持に住し終り十三世とせられ人  
なり

- 古文書類
- 一、新編神皇正統記
- 一、信玄初願狀(此は日信州長活口と區上口と誤たりのなり)
- 一、勝頼の遺物遺狀の控

(興)の品は長徳寺尊長虎の跡の澤依信として晴親死後天目山に行  
きた其の死を具居十道場を高野山に運つたものである

- 一 厚敷高野進狀
- 一 禁割
- 一 寺領狀
- 一 寺領朱印
- 一 寺領進狀
- 一 病氣扶復禮狀
- 一 米拾獲送狀

四 星光山 眞光寺 (大正区 眞光寺 眞光寺派)  
本尊は虚空藏菩薩 所在地 四百四十四坪あり

五 護國山 國分寺 (國分区 護國山 眞光寺派)  
本尊は彌陀勒菩薩 天平九丁丑年二月十一日勅によりて建立しし。開山  
は行基金光明四天皇寺と稱されたり當時の一國一寺として甲斐國  
に於ても此の地におかれ甲斐國國分二石米と見へていふ。建長七年諸堂  
回廊にありし後新と修繕をすといふも其の末が十分になつし。正に  
法燈の消へんとした武田信玄の將に一廢を立て二十二年に又を寺領

としの寺附し晴親に至りて伯父快岳宗統をして住持たらしめた此れを  
跡して中興の祖と云はれおる享保十六年臨濟宗妙心寺派に属して現  
在に及んかゝりたる

古文書類  
一 建長中火災のしりあはたる、り今も口邊(一)  
一 享保十二歳次下末人皇百十五代中御門天皇  
一 細地倉派の心經巻 (享保十二歳次下末人皇百十五代中御門天皇)

- 一 武田信玄の御判物 一、二、
  - 一 徳川家康の御判物
  - 一 徳川家康の御判物
  - 一 徳川家康の御判物
- 尚詳細は名勝旧蹟圖与寺の部口より参照

六 泉前山 長壽院 (國分区 泉前山 眞光寺派)  
本尊は阿彌陀如来像へて悪心僧都の作なりと  
傳へ。入代後水虎天皇寛永三丙寅年三月五日創立

七 高野山 長徳寺 (東原区 高野山 眞光寺派)  
本尊は地藏尊像印四坪あり。應永年間前宮家國の開創

開山口併花大遍釋師なり

八、即給山 泉正寺 (東原三津土京中瑞泉寺末)

本尊は阿彌陀佛并佛百四代後神及天皇の大正元年三月七日、開創にし

開山は銀澤月公開基は鷹野氏祖元東林院上譽治道居士なり

九、青鷲山 小三寺 (東原三津土京中瑞泉寺末)

本尊は十一面觀音菩薩開山は夢窓國師なりといふ御朱印五石九石あり

寺領百四十坪寺管に古鏡一面ありて徑五寸にして花の模様裏にあり是

は政府として折りの研究をなさんとし出張せられとあるも明

治の中塚住職不応のため其の行方を知らざりしが出来なされいとの

は國令寺と並んで國學をかかた地として縣より模本ありて觀一面

地中より得たものあり

一〇、正徳山 念佛心寺 (東原三津土京中瑞泉寺末)

本尊は阿彌陀佛并佛百七代後神及天皇の慶長十七己年二月の開創にし

開山は念譽慧勝除地一石三坪ありき

一、補陀山 満願寺 (竹原田王曹洞宗中山大藏院末)

本尊は十一面觀音菩薩行基の作なりといふ長五尺五寸あり

竹原勝語集中山大藏院の記に曰く

往昔行基菩薩一本所刻三體安中州三院者觀音の尊像也

一者山梨菩提山 二者竹是満願寺 三者竹是大悲庵也云々

陳地二畝あり

一、大悲山 普明寺 (竹原田王曹洞宗慈眼寺末)

本尊は大日如來 一坪に大悲山に作り

陳地二畝ありき

一、金龍山 喜愛院 (坪井正照清宗向藏寺末)

本尊は觀世音菩薩天文十一年癸亥年三月十日創立一に永祿十一戊辰年

開山は須田五郎入といふ傳ふ

開基は須田五郎入といふ傳ふ

境内に二十三夜堂あり

陳地三百坪は元祿中地頭浪田半文衛の寺附

一、中村山 淨光寺 (坪井正日蓮宗久遠寺末)

本尊は十思曼荼羅  
創立年月日詳ならず一に元禄年間、創立と云ふ

一五、萬年山 光久寺 (坪井正曹、洞宗中山廣嚴院末)

本尊は十一面觀世音菩薩黑印地二百七十坪あり、寶曆寺記には井水山  
光休寺とあり又大泉寺天文十八酉年の文書には坪井御の内高久寺とあ  
り甲斐國誌には光久の字當に廣極に作らるし  
行基和南廣濟廣極の二寺を造りしこと元享釋書に見へり  
奈良原に廣濟寺あり  
坪井村は鎌倉街道の北に在り左右に相対すされは極寺なることと知  
りしとあり  
開山は中山廣嚴院第十一世乾山香貞禪師とて禪師は下野國所領郡大  
谷村の人  
元和八壬戌年六月一日歳五十八にして寂せり

(196)

一六、紫金山瑞蓮寺 (田中區 淨土宗智恩院末)

本尊は阿彌陀佛聖心僧初り作たりと云ふ、本寺は武田氏の尊崇深か  
き寺院として、寺記に、天正十年三月一日勝頼主從目新有向郡内岩殿城  
中略家傳重寶記録号入日從兵銘々分持而出取或捨去至石和嶽之巖  
渡川者纒百餘也又累代持念彌陀聖像嘗聽善公獲物水晶三念珠一蓮以獻  
錦危捨回香院牆下里人懷贈寺當寺住持芳譽見之持回主進立屋境佛像入  
在深田歎喜悲泣而奏佛前島以爲奉養云云 創立は天正九年或は云  
天正二甲戌年三月開山は胤岑發往(天正十三年三月二十三日寂り)  
上人は勢州松坂の人にして知恩院に修學し諸地方を遊化感化しつ、信  
濃に來る 武田信玄其の人格を崇敬して甲州に迎へて甲府嚴安寺三老  
と稱ぐ、其の後全川原に來たりて建立せしもの

本寺には什物として唐織錦の打敷一枚長六尺幅六十五分孔直牡丹の  
五彩模様あり、此水は武田勝頼公の遺物として從往和尚に賜はりしもの。  
當山の寺格は知恩院直末にして中本寺格永代金襴衣持許の名刹

(197)

東部四太寺の一なりしが明治になりし管長の直命となりたり

境内には不動堂十五堂節婦栗女坐婦しげ女の尊像あり。栗女の尊像は  
明治三十三年時の東八代郡長青嶋勝三、東山郡郡長長坂新丁貞志と繪



り營繕せしむるなり。

古文書

- 一、元祖回光大師御筆御名號
- 二、八、宮良純親王御筆筆式紙
- 三、金守縫取御名號
- 四、風早三仕實秋卿三親

一七、一行山養福寺 (下矢作區 淨土宗瑞蓮寺末)

本尊は及彌陀佛 丈四四尺戌年十月(一)に慶長四日亥四月創立  
關山女堂譽定月 黒印坪百坪

一八、春日山春光寺 (小坂區 臨濟宗聖林寺末)

本尊は觀音菩薩 本寺記に大悲山を作る 黒印地二百二十町ありた  
り 永祿元年三月三日武田信虎の臣共京彌も内光俊創立 黒印地

尚關山す。 如の是長寺派たりしが寛永年中妙心寺派に轉す

一九、京都山三寶寺(北斎區) 臨濟宗慈心寺末)

本尊は地藏尊 天正十二年甲申九月十日創立關山は落浦和尚 明治四年  
年八月の大水に堂宇悉く流失其後位窟を他へ移して再興せり。黒印地  
二百四十坪あり。

二〇、一澤山極楽寺 (北斎區 淨土宗東本願寺末)

本尊は彌陀如来 往古大禱寺に三澤に眞言宗極楽寺なる寺院あり。  
位窟を淨妙法印と云ふ、慶永年中現所に移して一澤山極楽寺と稱す。  
此の地は聖德太子の廿七丁の時日本遣化の祈願を起せ水龍念として自  
巳十六才の新の苗後と木にて彫刻せしむるを安置せり。か此の寺院で  
ある。かくて本寺は蓮良三師の代に三澤大谷派と稱し現在に亘る  
ものなり。寛永年中は或る九坪ありしが明治六年地租改正によつて

宅地九畝拾貳坪と云なり

二一 醫王山淨泉寺

(本却殿迄) 浄土真宗東本願寺末

本尊は阿彌陀佛 文應元年三月十二日の創基にして開祖は山崎實成なり  
當寺は禪宗として寶壽院と呼ばれ今の慈覺社社の東にありし也 隆安寺  
中教順なるもの中興隆興して浄土真宗となる。然るに水利乏しき地有  
りたよつて現地の地を水引便なる藥師堂屋敷地にして現地に至り 此水  
より四十三年を経て藥師堂と營みたり  
傳に云く三河國行藤森九郎護師像の甘露と昔に買ひて當所に奉たり  
三と別殿に奉置せり 長さ廿五寸六分八寸厨子に銘あり  
甲州山梨縣一宮莊御坊實成種屋本村樂師如來像宮殿久遠時時入  
禪定 高一丈餘末云々(下文省略) 所の及らざり 住持は兼味讀印  
東林總持主計門社護 時永正四歲丁本林鐘十二日 敬白

古文書類

- 一 新編萬病回春拔書
- 二 十二月往來管相正御製
- 三 眞宗童傳鈔百十六ヶ條問答
- 四 假名友手不同名類字
- 五 古狀揃
- 六 蘇原元克の三部佳

二二 金永山西園寺

(金田區) 浄土宗芝増上寺末

本尊は阿彌陀佛天文五丙申創立 一丁天文十四乙巳年二月十一日建立  
開山は縁覺月公

二三 金田山吉祥寺

(金田區) 眞言宗修驗派

本尊は不動明王 創立不明 五鼓豊饒を祈願せし所なりしこと 去却天  
中七田中陣屋の武運長久

日次の吉祥寺勸化の布文によりて知ることを得

二日 正覺山香蓮寺 (分原田庄 甲府瑞泉寺末)

本尊は阿彌陀佛 東山天皇元祿十五年創立にして開山は彌峯の  
五上人なり。

## 第二十章 名所舊蹟

### 一、橋立丸杉

指定村社甲斐奈神社の中に丸古より自然を我がま類に會得して無言  
のまゝにありし日のことを藏してある丸杉がある。此の大杉は神代杉  
と一名称せられて其の周囲七抱半高さ百三十尺にして縣下唯一の古  
杉である。甲斐名勝誌に曰く「社中に大なる杉樹あり七抱半計り實に  
稀代の杉なり」甲斐國誌に曰く「社中に杉樹七圍半州中に此類なき名木  
なり」かくあるを見てす此の杉の古きは名にみぢずして現在とても同ド  
やうに見ゆる。此の杉は一團にしてその名に背かず 今も枝数幹に比  
べて少く去る年大枝一枚枯木となりたるを以つてうろにはセメントを結  
め重鉛板等に依りて腐敗するを防いだ。  
大正十年七月縣は標木を立て神代杉たることを表示した  
文に曰く

神代杉当社の神木にして里人は橋立の丸杉と云ふ、七圍半、高百三十尺餘  
あり、縣下第一の古杉なり。

此の名木保存のため其の費として金八拾圓を縣に於て補助せらる、其後  
大正十三年三月内務省史蹟調査員三好學氏の入峽によりて審査せられ  
大正十三年十二月九日内務省告示によつて天然記念物としての指定を  
受けたり、此の地甲斐の発源地として神祖明神の祭地にあはれ又由緒  
あることを思はしめ其の昔をよびり里人をして澤か、らしむ。

### 二、初瀬櫻

此の櫻は浅間神社境内の中にありて傳へていふ、武田信玄公社参の御  
り移植せられたり、其の時公の詠めし歌に

うつし植はつ瀬の花のしらゆつを

かけてそ祈神のまに

今はこの櫻は先代の蘇なるかは不明なれども現在残されて面影をこの

櫻樹によつて當時のことが出来ぬ、これに於て地方有志多  
数會して明治二十一年三月時の内大臣三條實美公に依頼して此の公  
の歌を永久に記念すべく碑になし神社庭前に立てた。

### 三、夫婦杉

此は同縣中社浅間神社の攝社なる小宮神社の本殿の直後にありて根  
株は一基にして稍上つて二本となる、大正九年十月其の筋の調査によ  
ると根廻り周囲三丈五尺二寸五分、右方目通り一丈六尺三寸、左方同  
じく一丈九尺五寸、樹齡凡六百五十年、高十八間余であらう。

### 四、連理木

此の連理の木とは末木区八幡社境内にあり、此の社は以前八幡社と稱せ  
られしが最近は雨止木八幡社といふなり、其の由緒は其の社の名を  
變へざるを得ない世にも稀れな不思議な神の力とより推測し得ざる事  
柄がある、此は当社には永久に此の不思議なる力の連続があると思はる。

リ里人の傳へてまのすであるが常に此の社の樹木の中にいつれとも解すことの出來ない雨木の根が合してゐる連木を生ずるのである。社中に奉納せら水一扁類並に小橋の木あり。現階は社の南西に杉の連木がある。此れにつきては天保八年時成先生の遺理木に對する社殿扁類水上校長の同様のものあり實に此の地や甲斐の発源地として永久に解すべからざる靈妙な力を物語るものがある。

### 五、紀念植樹植

明治四十五年四月二日畏し先帝陛下皇太子殿下にてあらせら此の甲斐の地に行啓あらせら水一御侍従田内三吉化を御代拜せしめら此の折侍従自から植樹せられたものである。先帝御大典紀念のすに石碑を立て永久保護にいつとめることとした。

### 六、夫婦梅

此れは國幣中社神宮寺境内中手橋邊の中にある高さ五米半周囲三尺ばかりにして此の梅の木は世にも稀らしい夫婦梅である。これは二ヶの梅二つ合して一つのことにあつた地に聞かざりものである。故に世に夫婦梅といつてゐるが此の梅樹の空にたことは当社に名譽を興せしるが十余才の繁宮の幼年時代よりありしとのことで詳かでない。木は小なれど右によつても古きことは明らかである。毎年六月收穫の式を行つて取れを例としてゐる。その日里二軒ばかり世人子供梅といふて遠近を回はず此の梅の分配を希むまよものが多い。それには此の梅を食すは味長らく子なくして昔よりあつた夫婦に子宮が授けられたといはれかあるものである。

### 七、國分寺址

國分寺は聖武天皇元平十三年勅によりて各國に一寺建立せられ金鏡明四天皇護國寺と稱せられた。其詔に詔元下諸國國別金光明寺法

華寺各造七重塔一區並寫金光明經一部安置塔裏云々とあり此等  
當時國華の地にして最も便利な地にかかれたことであらう。甲斐國  
に於いては本村國分區にかかれたのである。  
かくて天平勝寶元年七月定勝寺聖因堂金光明寺二十所法華寺四十所云  
々、指圖令寺は每止月八日より十四日定勝讀取勝王經古又神護聖靈  
二年再建せらる。建長五年修慶院殿とあり。建長七年國孫の際今節焼  
失す。其後三百年を経て永祿中武田信玄再興し寺領二十二貫五百石  
を賜ひ勝頼に至って伯父殿岳宗院禪師住持とせられより旧の地をも  
かになつた。此北にありて中興願山と稱せられぬ。  
今寺には土中より出土瓦石の遺蹟あり軒瓦には唐草の體呈  
極當等其様あり(石居土着の別考参照)  
今徳川時代文化の折大崎和尚の書中の記録によれば昔ながらの莊大な  
様子が明かに知ることが出来る。今其れを掲げよに

行基也

大般若法算也

天平十年詔曰去年國分寺建立後經納故風雨順幸其改置檢寸是此偏行基  
所念無故靈驗如神同七月福二万束賜。天平十三年五月封三万束賜同  
三月詔曰朕嘗憶去年も大寶寺より三萬束賜三經曰此經も講讀恭敬供養人  
我等四五世來て可い難護とありて四天王之像納衣又天子親紙金泥を  
以金光明最勝三經を寫寫し納す。則今更明日四天王護國寺勅号を改賜  
同月に封五万束。同日二万束賜。同日三經を直讀し十五日に大般若  
經講讀し及戒羯磨せよと勅命あり。天平十六年七月福二万束賜同十一年  
霜月田九万束賜聖武皇帝位を皇太子讓王行基に授け給ふを記す。王不  
勝滿法王と奉り則行基に宣旨あり。賜少子謙宣帝御即位時寺領一万束  
を賜其後封下賜田不納納五つ。然るに建長七年兵火の難あつて本堂護摩  
堂鐘樓數棟破可平山門惣門二玉門經藏室藏閣山堂長廊下土重之塔並

寺中四十九院に至り延盡く燒失申候事(一)に依て雨帝の降區寺領佛像經  
文殘る物無し不思議哉本寺落師如來五十二神下尊に焚燒を免し皇帝  
御達より八百年星霜経て當國台主武田信玄公此寺滅不可捨置靈  
場也假連小南寺領二塔に費五百錢又御寄附有て武日勝頼公の伯父伏見  
悅禪師を住持せしめ自天禪法相讀まじ二百余年今日迄尚今大小難異朝  
暮無<sup>二</sup>怠<sup>一</sup>護<sup>二</sup>天下太平國家安全祈禱有住持之常也其後御當家御朱印持  
領誠實加立極<sup>二</sup>三皇地足又皇帝之儲光平開山行基餘德平

一金光明堂物として

藥師堂三間四面

行基一萬三禮藥師長台座共一尺五寸  
日光月形長三尺十二神台座共二尺余

一護王堂殿として

大長の弥勒菩薩行基作文珠大士  
智勝大師不動尊春の作空藏菩薩

一四天王堂として  
鐘樓門三間四面

一、鎮守堂五尺四面

御朱印高七石六斗余、内六反せぎ珠  
内五十間十九間下五兵衛易也  
居屋補是之香林不置 美栢

右者先代今申傳余古又不詳

右者盡昔屋根御座候

御朱印高七石六斗余境内貳十八百坪今の寺内台の護摩堂跡も礎あり、  
庫裡の前に五重塔跡も礎あり寺西に塔頭と起り関山堂の跡も傳寺の西  
御堂地と云ふ小起あり本堂の跡と申寺の西三町半に經塚と云ふ起あり經  
藏の跡と申傳寺の西四町半に町屋跡と云ふ小起あり山門の跡と申傳寺  
台の境内十六町四方當り辰巳一間四方地内道祖神元祖百天地三澤神當  
山往古從鎮守從村方之頼村祭住才其仕米算計紙遺有書記録  
但二十二貫五百錢文 一武田勝頼公御墨印  
但心門前百柱御免三丈

一水晶文珠一連

一朝鮮土奉鍋

但し開山行基菩薩所持の珠板と申傳

但朝鮮征伐の後大坂住吉の  
神主奉納

一紺紙金泥心經壹卷

一朝鮮打廻金

但し五經の帝様御奉納 但し右同所

文化三丙寅年

京都花園妙心寺末江戸牛込松澤寺願下

甲斐國に代郡國分寺

國分寺住持大鱗 五

(212)

現在建物の確實なる遺物とものとして七重塔である其の地名として  
周防堂塚米佐渡等の名がある。

大正十年七月野は標木を立て國分寺たしことも指定せり。聖大正十一  
年十月内務大臣告示第百七十号を以つて史蹟名勝天然記念物保存  
法第一條に依り第一類の史蹟に指定せり。

### 八 和歌年 海

竹原田の枝村のあてまゝ聖人若鞭と呼んずる也 聖徳太子の祀りによ  
り起りしといはる。梅樹一株を栽え若鞭梅と名けり。又、御舟橋と  
いふ小山がある。草履は草履にして貴の訓にして大正年題の類とい  
ふ。仁徳天皇の御りて若宮と稱した。かくて此の地に若鞭梅のあまは  
仁徳帝の瓊葉連に咲くやこの花冬ごまり今もはよと咲くやこの花と  
いふにより題立りならん。後この地を歸して若鞭と呼んぞ。かゝるが  
今は仁徳帝と聖徳太子とを合祀してある。

### 九 國分寺址

林部社記に曰く、神祖の祠のあたりに齋堂あり、藤原爲堂といふ。か何の  
頃にか瘞壞され、今齋堂といふ。此の地の名遺りといふ。此の地にある  
現に此の地に寺あり青路馬山小石寺、齋堂をいふ。この寺平素一  
見。仁王朝時代全國に國分寺を置き、國分を博士を以て教授せしめたる



本城は上國にありて四十名を率べしめし地がありし後引續き了なせしが白河帝の御時諸國の北朝頼破したにより藤原敦光此の由を奏上して後援をなさんとせしが其れをこと止みとなつた。本洲に於ては國衛の事にも記すか如く貞治嘉慶の諸國別當留宣所目代等の文章にも傳はつてある。その後應仁の大乱後國衛の政令も行はれず野に於ては大正十一年三月樺木をまて、その後を花平してある。國衛は王朝時代に諸國に於て郡司の子弟を教育すべし學校であつた。はての遺址として後世聖堂のみあり地名を鷲堂と稱してある。

一〇. 軍團址

孝徳天皇大化元年の記に曰く「於開曠之行起造兵庫收取木園可乎」夫邊國近興賑夷一掃境內百可建蓋故兵具兵而猶假本主とある。かゝる奈良朝時代國々郡司公卿の選したる位にして桓武天皇の延暦十一年の御時のみとして後世伊弉の制をとりて有庫兵衛と守衛した。其の後後非...

より貞観以後には漸く衰へて武家の興起によつて守護地頭に代はつた。本軍團の後には本村小地区にある。今は地名と成つてある。かくて此の地は兵庫をあらわす米庫は市の倉米倉八十倉におか水たがである。今此の軍團の組織を存せしに栗田博士は大概各郡に一軍團をあげたと言ふ。かくて男子二十歳より六十歳以下を正丁となし其の三分の一として軍團を組織した。は五人を伍とし三伍を大とし、大ごとに軍器並に駿馬六頭を有した。かくて其の編成に

平時の編成			戦時の編成		
大穀	小穀	枝厨	警大	軍大	將軍
一人	二人	五人	一人	一人	一人
一人	一人	三人	中軍	一人	一人
一人	二人	五人	小軍	一人	一人
十人	二十人	五十人	一人	一人	一人
二十人	五十人	十人	一人	一人	一人
二人	一人	二人	一人	一人	一人
二人	二人	二人	一人	一人	一人
二人	二人	二人	一人	一人	一人
二人	二人	二人	一人	一人	一人
二人	二人	二人	一人	一人	一人
二人	二人	二人	一人	一人	一人

縣と此の地に大正十一年三月樺木を建て其跡を表示す。其の文に「軍團は王朝時代諸國に置きたる軍營たる今の師團と似て小打ものた

リ 本村を元小城と言ふ遺址の續と爲せしを後人の呼称せりと言ふ  
工 矢作部

矢作部は往昔弓矢部を言ひし地である。を水は延喜式に曰く「甲斐國所賦弓  
矢部六十張 征箭四丁具云々」文武紀に曰く大室二年甲斐國賦弓矢部五百張云々  
之大室府云々とあり。甲斐名勝誌に此の地にて弓矢部を修りし事を書留りてあ  
る。此の地は軍國の所進にあつて弓矢部を修りし地と云つて此の名の起つたのであらう  
以前此の附近には多數の叢林ありしが日川の汎濫の折終に此の地は荒れ盡して今は  
其の面影か河の所進に散在するばかりである。今では此の地は下矢作、上矢作、二部は  
落し今せれしが其上を作の唐土神社と産土神として居るものがある。

十二 京 塚

王朝時代軍國を國と起りし時王城を守護として此の軍國の正丁中より選取して京布力守  
覆とあらせたるなりと言ふ。此の正丁不幸にして京師と云張中交りて其の京師を御上の地と守  
りたりか其の地を御人塚と言ふへは京師の呼名は京塚と言ふ。今此の地は馬手はりの北にあり  
や都塚と北御味との二部を分たれり。此の都塚名も此の地名より出たのであらう。

一三 林部郷

和名抄所載 山梨郡東郡の郷名なり  
古事式に 所謂波多ハバ宿禰の岡林臣の受封せし所なりんか  
姓氏録に 新朝臣は石川朝臣同祖武内宿禰の後也とあり  
中山廣藏院所藏の河村瑞部允信貞の寄附狀中に「林部内國分」とあり又  
天正及慶長中の文書にも多し林部と見えたりは廣く其した郷名なり  
ん 現今東原の中に納まり又林立大明神は林部神社とも云ひ本國の  
總社なり現に此の里人の呼べる遺れる地を見るに広き土代にあつたこ  
とが悲愴さされり

一四 堀田筑前守宅跡

本村東原の林部に方五丁許りの壘あり即ち令の一宮小學校の地に言ふ  
又良正寺に即垣ありとか 又金田に藤太郎茶師の石佛ありとか 堀田  
筑前守の家人風間弥太郎の祠ありとか 又長徳寺に二丁余の舊蹟あり 住職は天守台といふ塔構並に礎石あり  
とか  
今は堀田筑前の家傳は失はれ唯安部勝清の口碑のみ 或は甲斐國誌に

は國分寺又は社の神宮僧侶の居つた所とか最近島居博士来村せり水て  
鎌倉時代の地頭の地ならんといはれた

一五 國分尼寺

國分尼寺に就ては本縣内に確たる遺跡存せざるも既に僧寺が古刹に創  
置されあり限り尼寺も亦同類置りれたるものであらう今此の尼寺の遺跡  
と思はるるも赤松原区内に存してゐる同区内に二ヶ所に合水て大なる礎  
石が存しその附近より得られろる石の多数は其の紋様を見るに國分寺  
のそれと同じである

先に内務省考古部柴田常慧氏来村の折此の地ならんと鑑定された

一説に東山梨郡岡部合村大藏經寺が尼寺の後身なりと言はれりも確かな  
証據はなし

一面又諸國の僧尼寺の所在關係を見るに多くは僧尼寺は同所に置か  
れたるものであり

又諸國の國分寺、尼寺が多く國府附近に建てられたることと事實であつて  
延いては 本國の國分寺が本郡甲にありしものと推するも必ずしも斷言  
とは三は水はなし

今國分寺に就ては東八ヶ郡並村説と赤松郡國府説との二説あるも恐らく

本郡並村であつたであらう

南國合尼寺は僧寺よりも早く焼され事定まり且つ後世定額の方を  
以て尼寺に宛てたる指令も其水は本地の尼寺がその後大藏經寺に移さ  
れり故に指令も有り得るのであるが、其關係から大藏經寺説も生れり  
たりんか  
要するに尼寺の所在に就ては当地に在りしと見ることが最も妥當であ  
れば早く確証を得て確定されし餘餘を望みても好まぬ

一六 兩宮攝津守宅跡

本村本組にあり東西三丁南北二丁余の宅跡存す内に燒宅といふ小石室  
あり

攝津守は名を正忠といひ恐らくは赤地ウ地頭であつたか同村長富寺の  
什物大藏經聖書に源朝臣家國 又大且那源朝臣兩宮攝津守云々とあり  
家國は明応九年八月十六日卒し長富寺に葬る  
其の男十兵衛家政は武田家に仕へ大御義信の衆たり 永祿八年追放に  
處せられ小田原に走り北条家に仕へ居ること三年功ありしかば高松  
澤正之を討して本州に降参させた

文化二三年の頃、田中代信小島源一(蕉園)百五に因つて、學校興さんとした如く、開きを引いたか？ 沙汰止みとあつた。時に巨摩郡西花輪村内藤澤を、衛門の盡力によつて、石和代信山本大膳に謀り、大膳江戸の大學頭佐藤一育に言上して、典校を失し、場所を本村小成天神社の西隣と定め、六年正月十三日開館した。かくて、當時の上矢作村の人小池正次、主宰を命ぜられ、その死後、石和代信の代官一階、學校を石和に移して、開館した。其後は毎月三ハの日を定めて、月六回、甲府徴典館より、教信出張して、講義にあたり、一般人民をして、聴講せしめ、た勤く、明彦館址に至り、廣館となす。

第二十一章 土器 石器 石器 部

本地は甲斐の國中にありて、先は民族並に王朝時代の最も繁華な土地として、此地に出る祖先の遺さしたるものも多々ある。今其の品について、も、國分方面には、折々其の品を見ることが多い。現在持つて居る品目たつて、擧げて見よう。

● 山ノ久平氏所藏

鉄

A



色は水色、切つて、鉄の黒味を帯びてゐる。産地 國分(南)山ノ久平

B



色は黒色にして、粘板の硬さをもつやうで、産地 國分(南)山ノ久平

毛鉢の粗球



黒色にして塊状をなし粗材に使用したもつらしい。  
 國分 南條に産す。

曲玉



色は赤黒色にして端をすり出でたもつらしい。  
 表面も滑らかにして曲が甚だしからず。  
 國分 南條に産す。

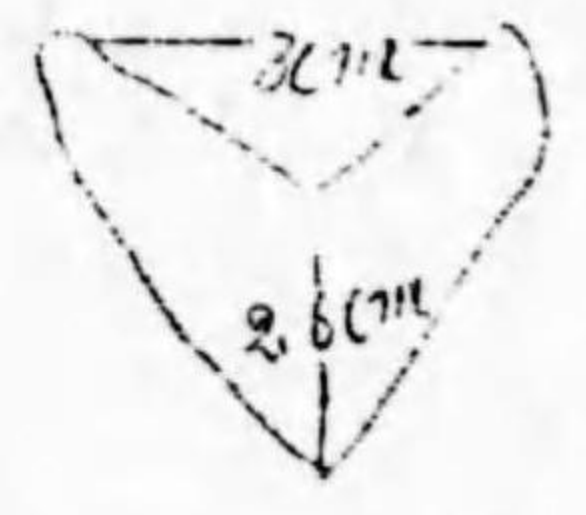
石のちから入つ



赤褐色にこうすく端をすり出でたもつらしい。  
 裏口獸類の皮をばくの用にとらしたらしい。  
 産地 國分 南條

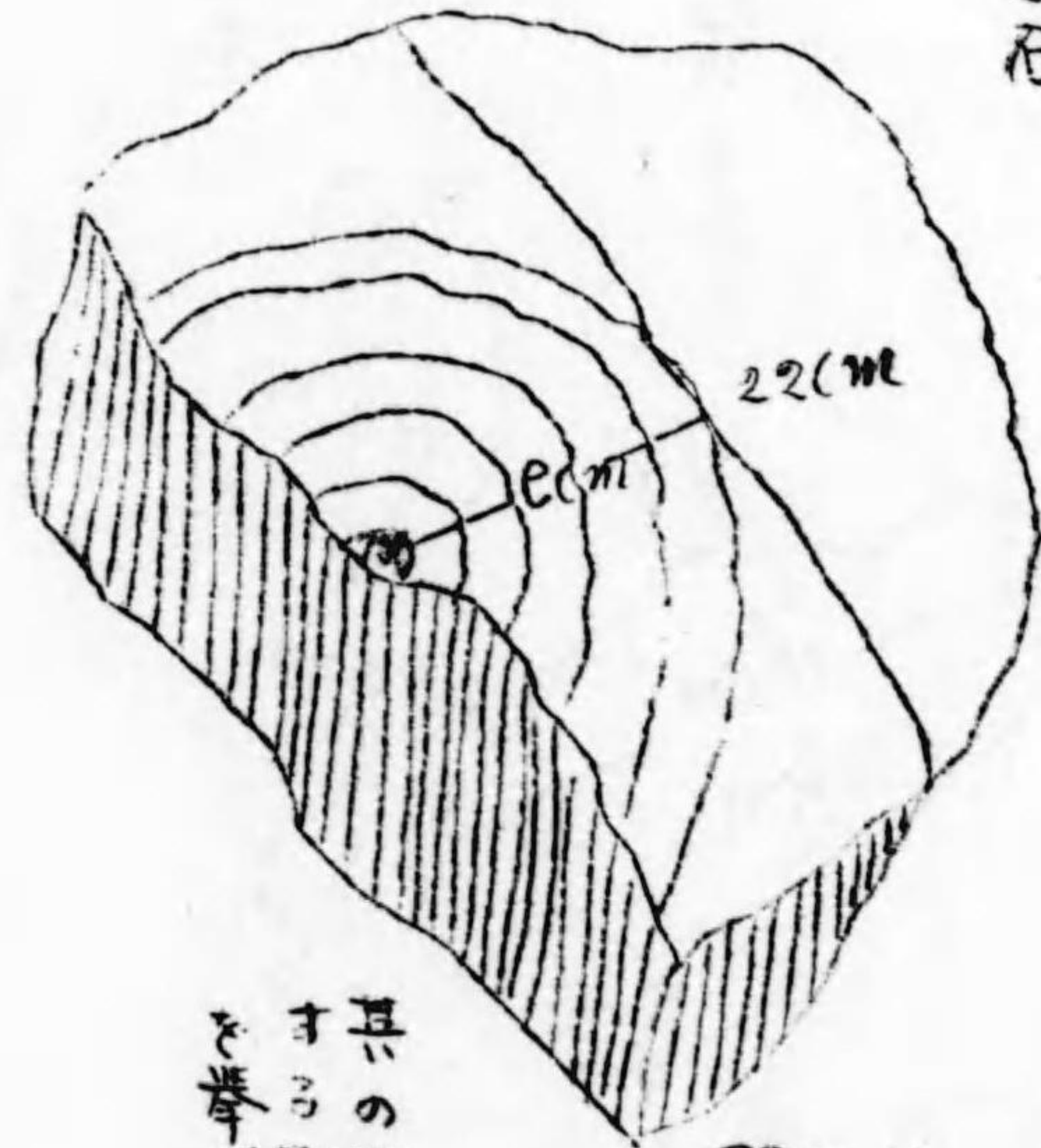


黒色もくはらさるゝにして黒色のものは黒曜石より出でゝある。  
 白色のものは透明の物は半透明にして鏡利を出して居る。  
 此物は三本よりなつて居ると思はれる。中軸はたたくて居る。  
 産地 國分 南條



白色にしてニ又になつて前者とは異つて居るらしい。  
 産地 國分 南條

凹石



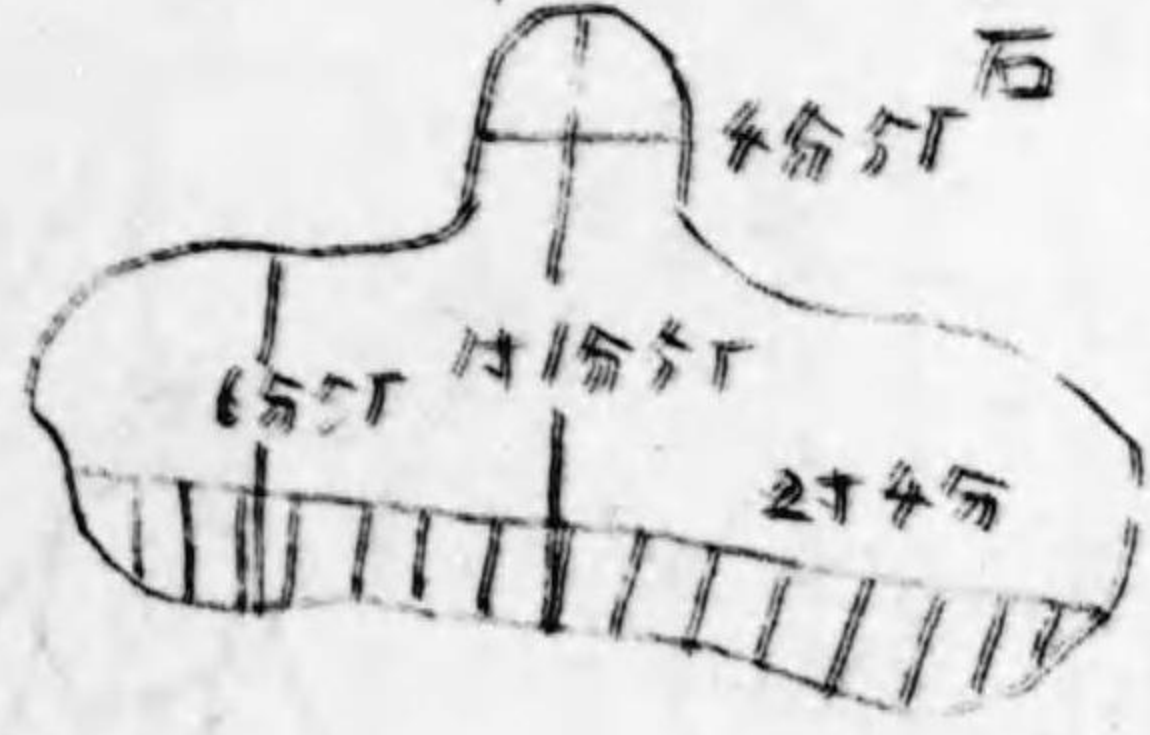
半分割れたによつて原形は十分にはわからなないが凹石なること確實である

産地 國分 周防堂

其の他石斧石棒土器の等又は地手  
する部分壺の如きものがあるが種類  
を挙げるため此水にたしめておく  
(224)

一宮村國分遺山原夜所藏

ヤノ木石

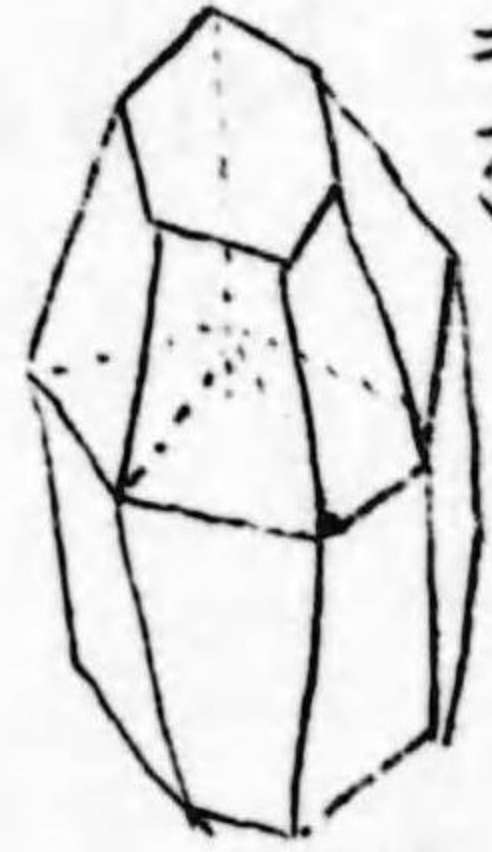


色は灰黄色にして下部は削げて刀のやうに  
鋭利になつてゐる  
産地 國分 地内



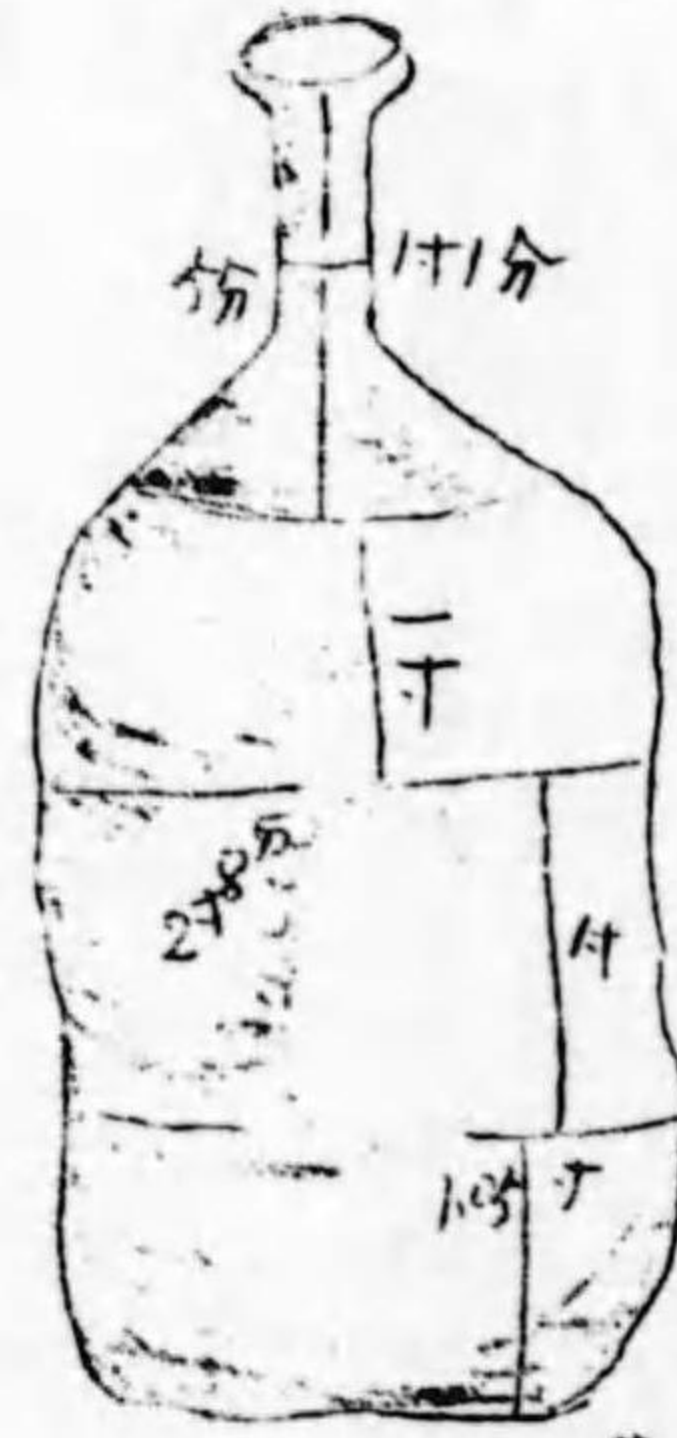
色は青灰色にして、形は深山久平氏のものと同一  
であるが今は尾山の里に與ふ  
産地 國分 南森

切子玉(古代ガラス)

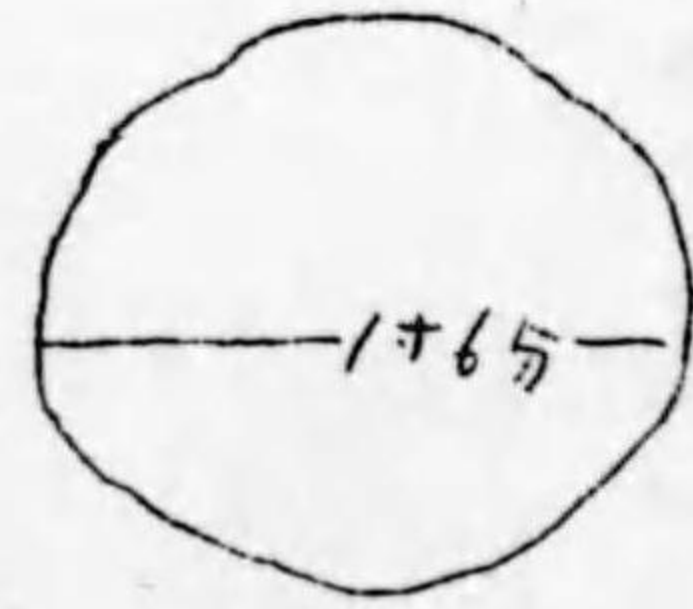


透明にして無色其の中の一本の紐を通すやうになつてゐる  
産地 國分 聖塚

壺



燒方より見て割合と後世のものらしい  
表の細長い凹所ありて三線あり。色は黄灰色である



(226)

石



産地 國分地内

此水玉の部分は五分位の厚さ大まかに磨り下すは切水やうにす  
と長いものがある。それとこの水玉の一部分に付てしまつて現形はもう  
と長いものがある。

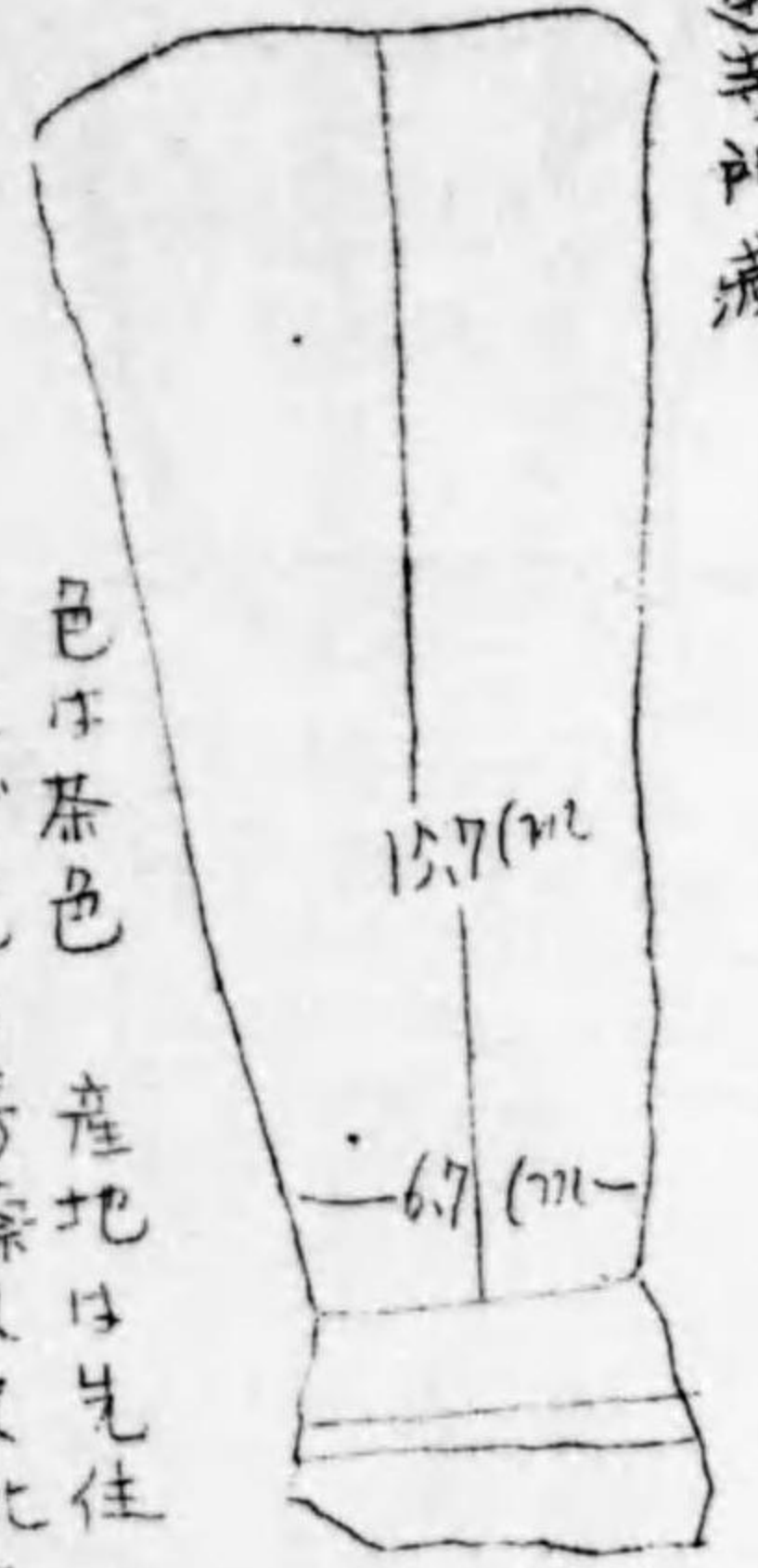
石



此水玉は非常に重りが少ない  
産地は國分地内

(227)

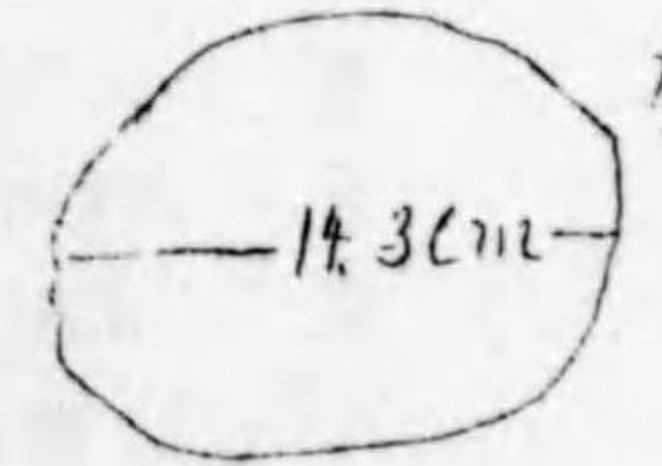
土器  
田中藏蓮寺所藏



色は茶色  
産地は先住の蒐集したもので故不明  
水ど色々考察して北都塚地内らしい。

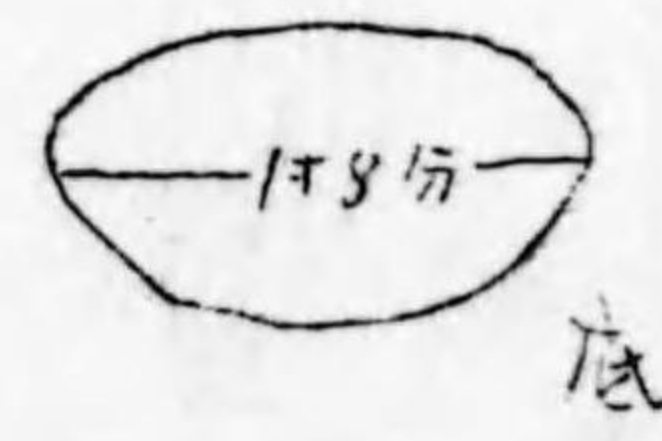
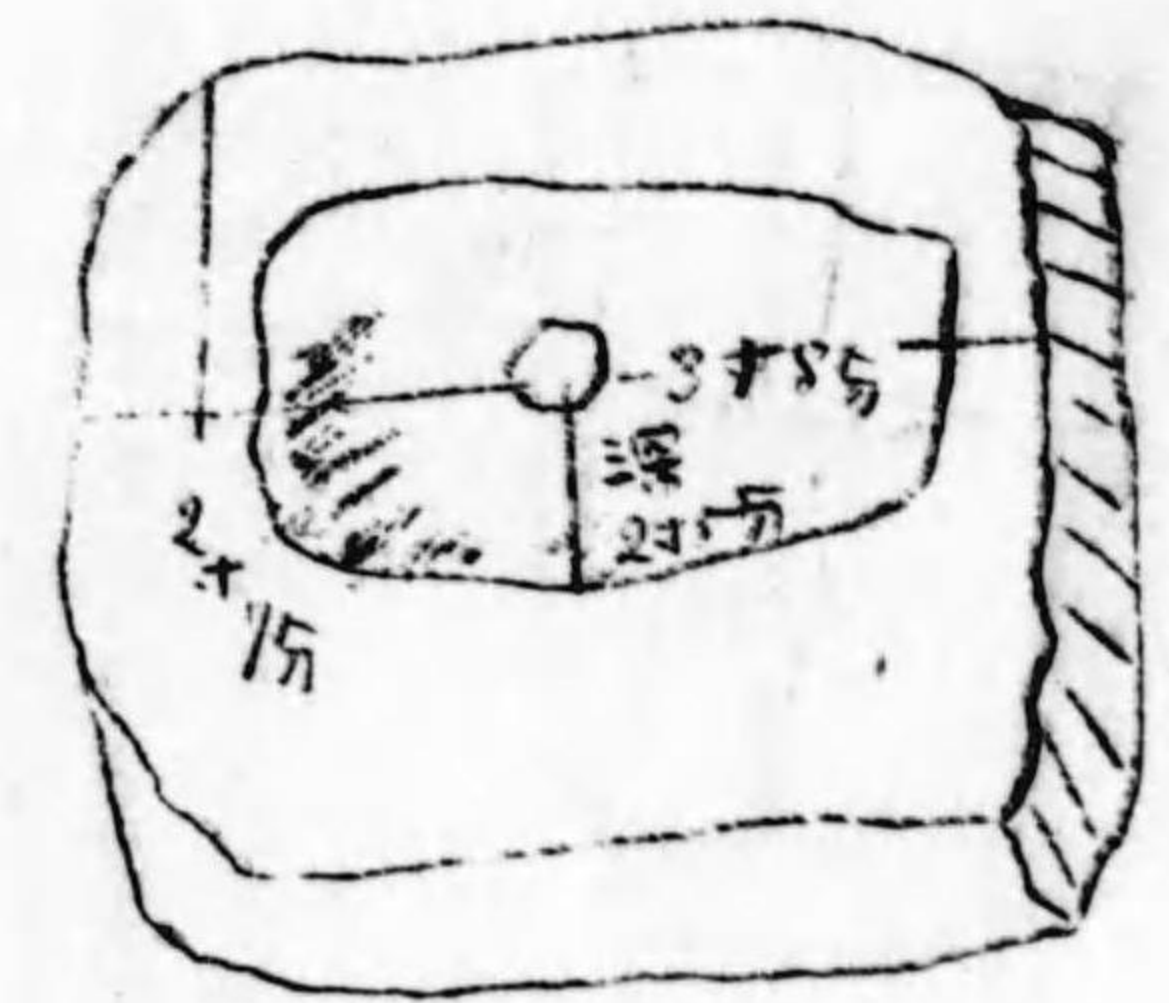
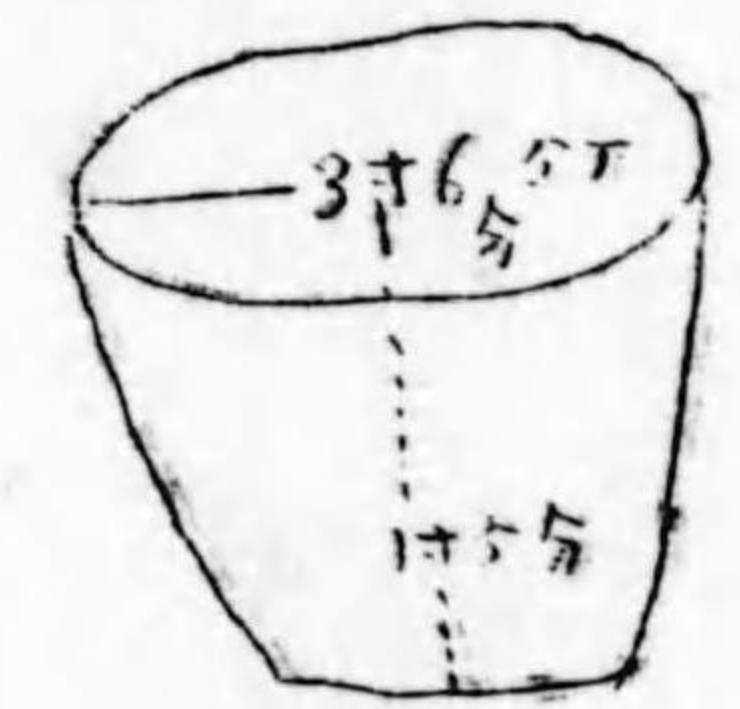


産地  
國分地内  
瓦土の把手

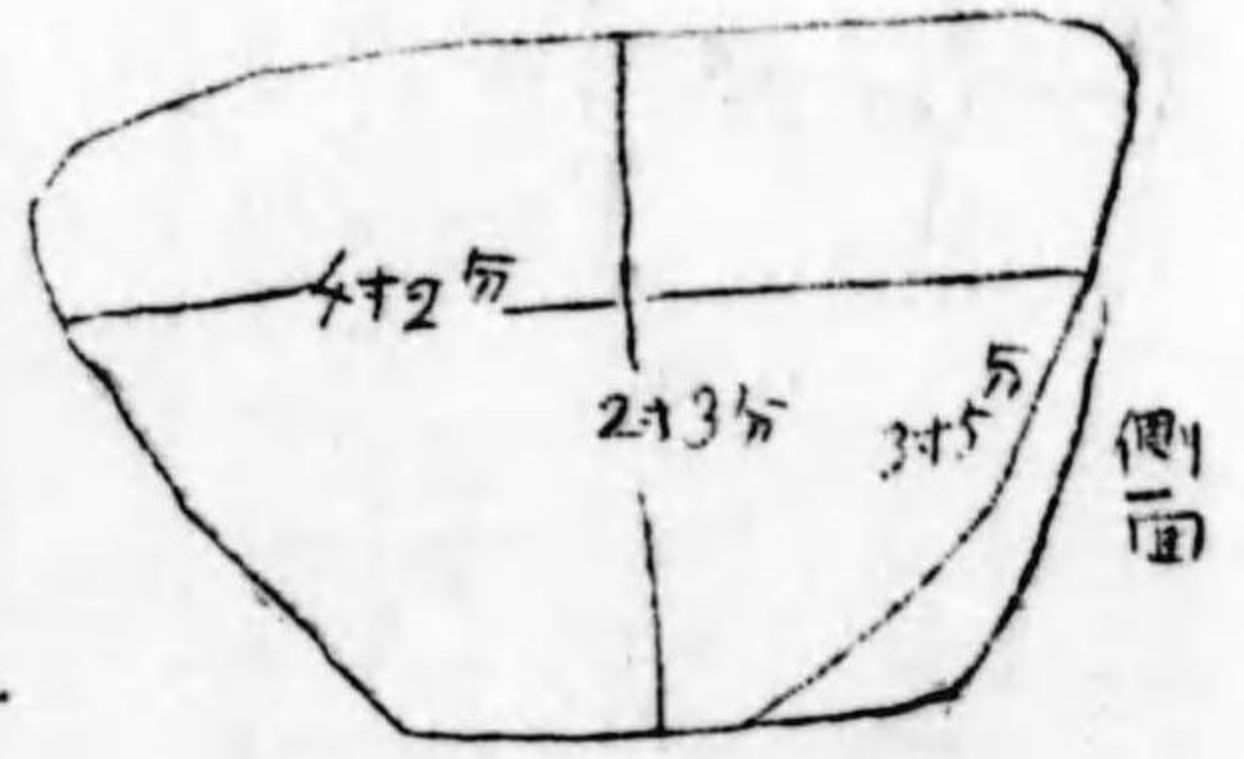


土器

凹石  
(上部)



底

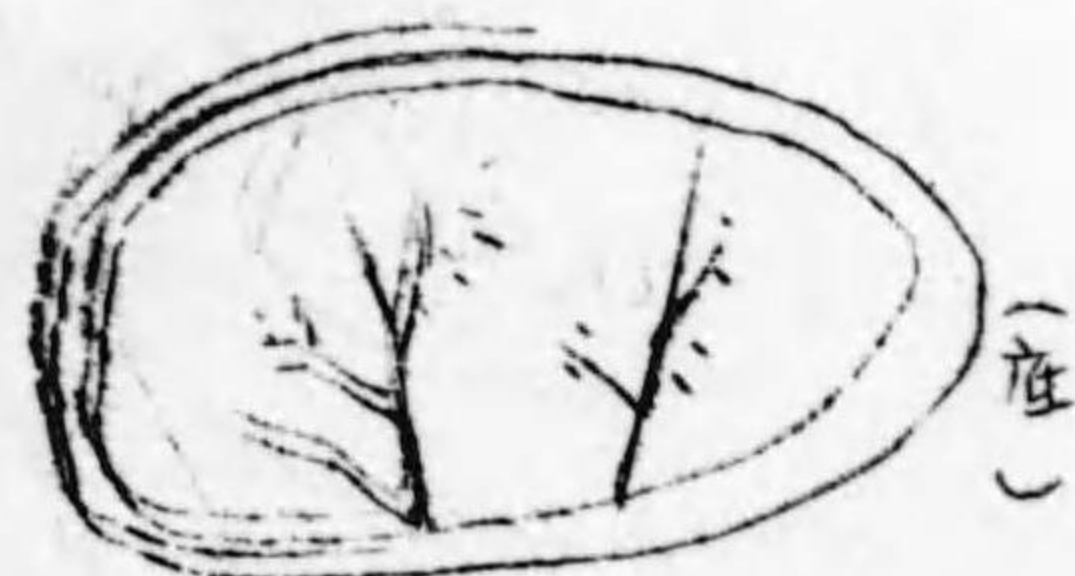
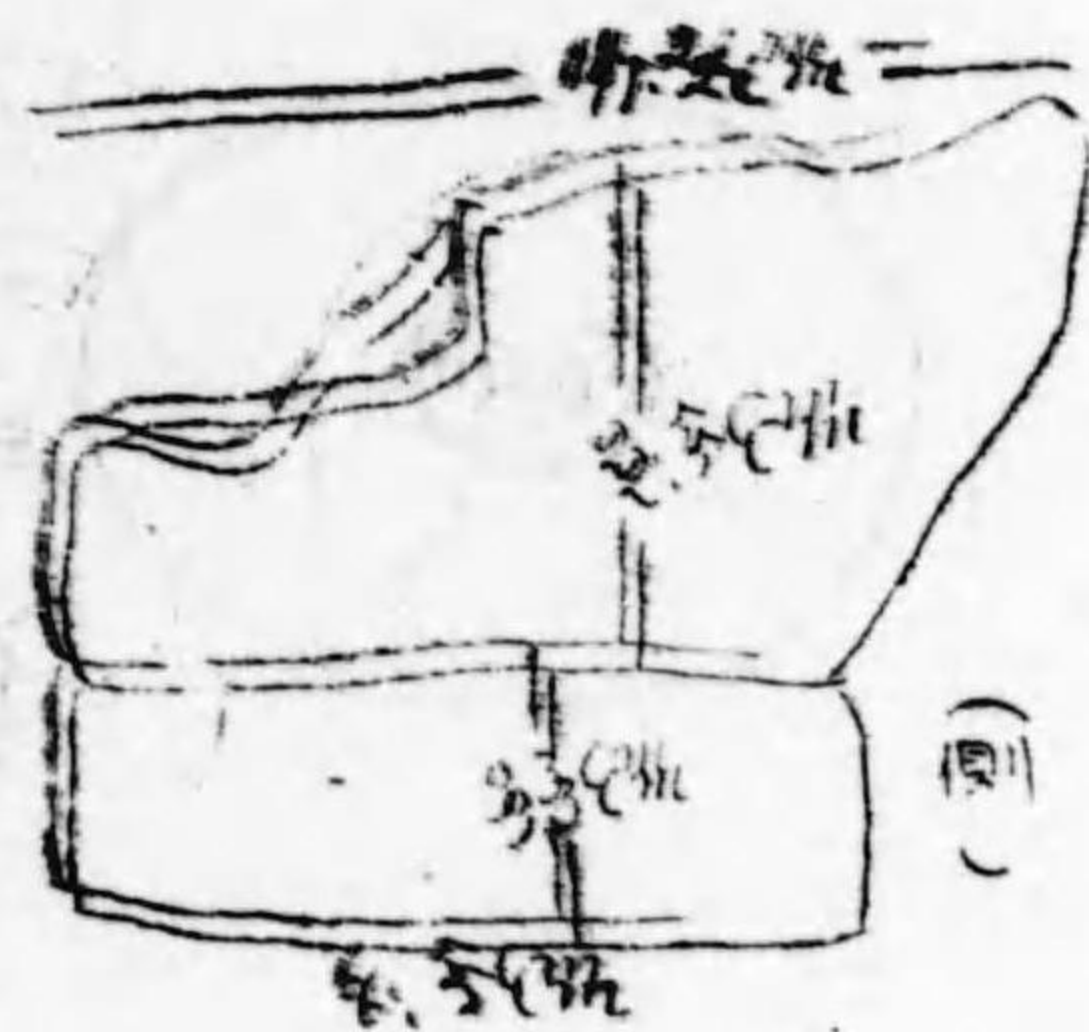
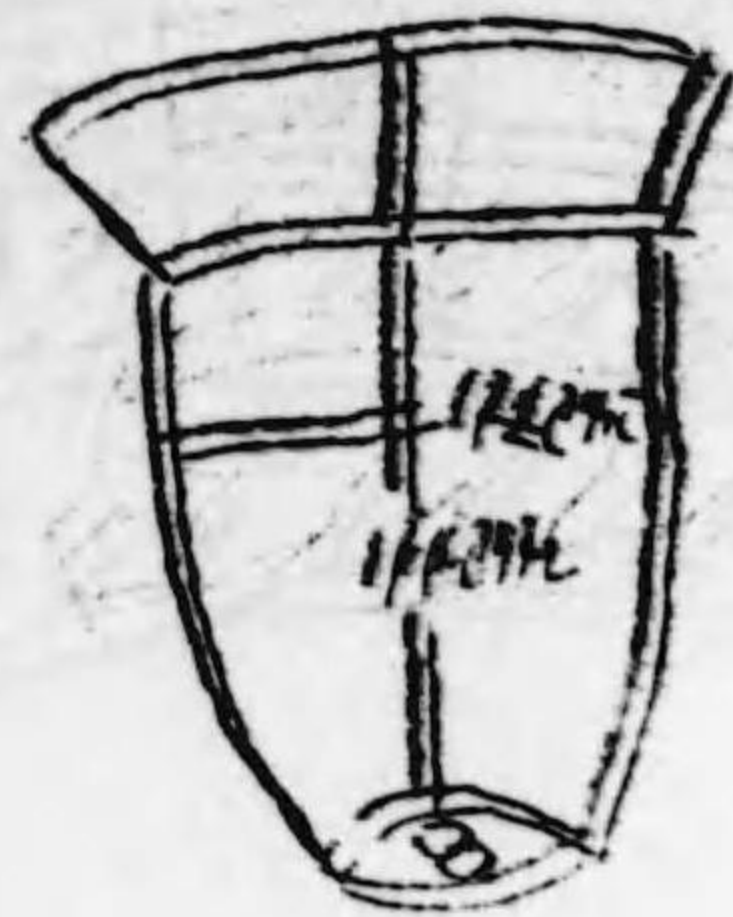


側面

産地  
國分聖塚  
色は茶色にして

此水は神完全の  
ものであり  
國分地内  
南森大  
神宮  
址宮

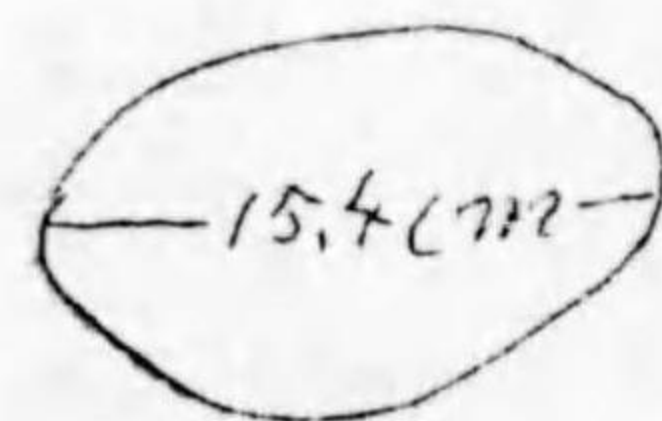
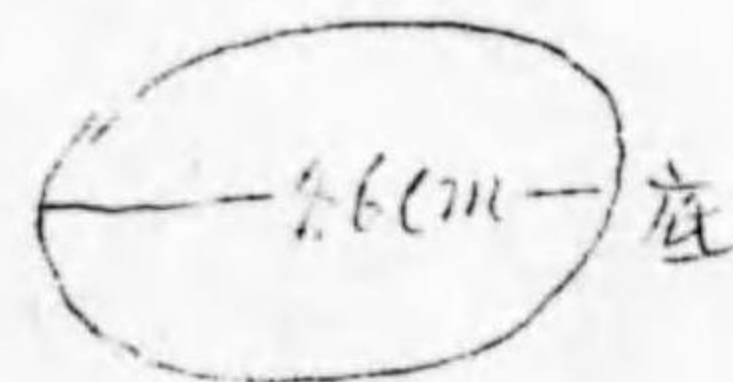
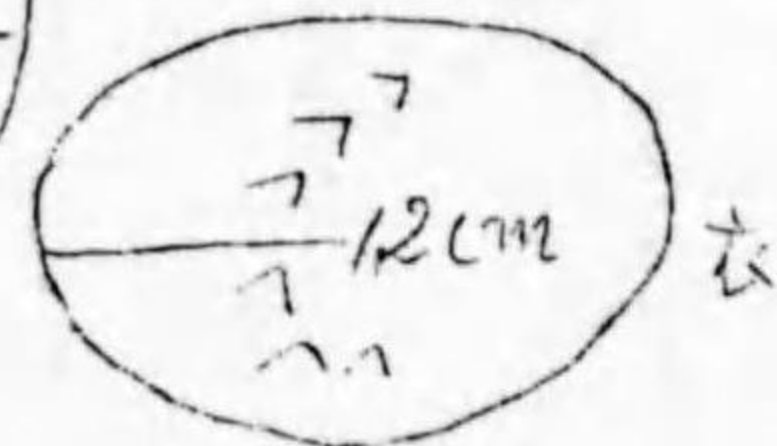
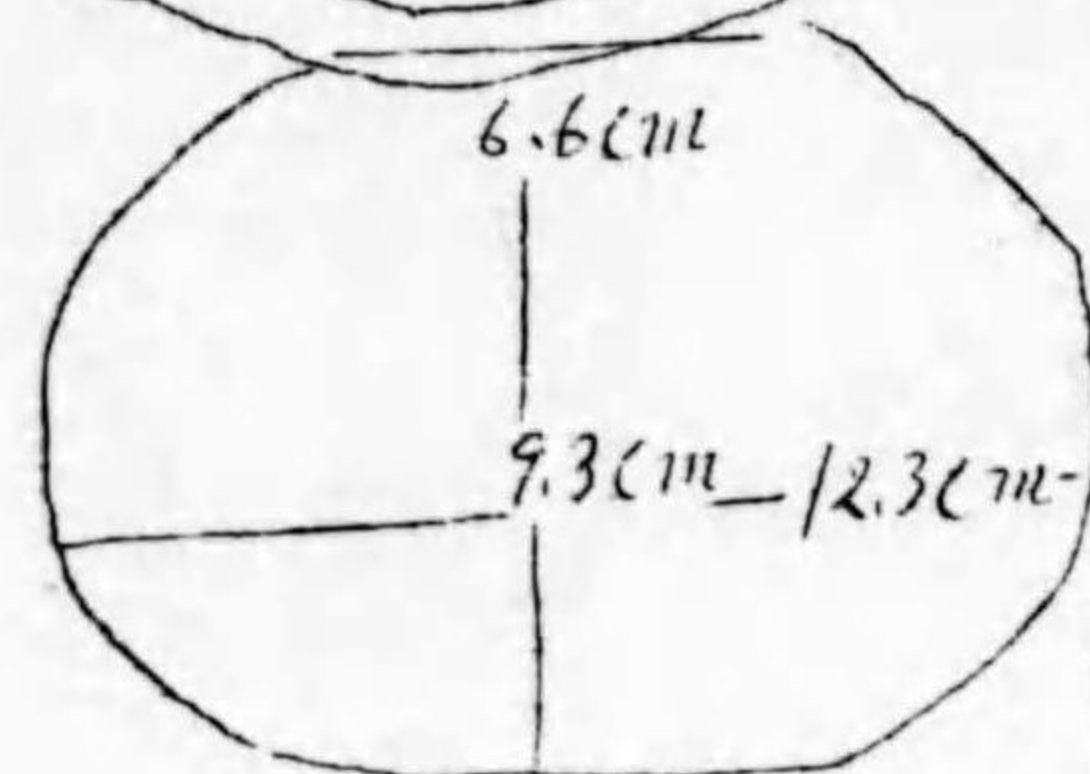
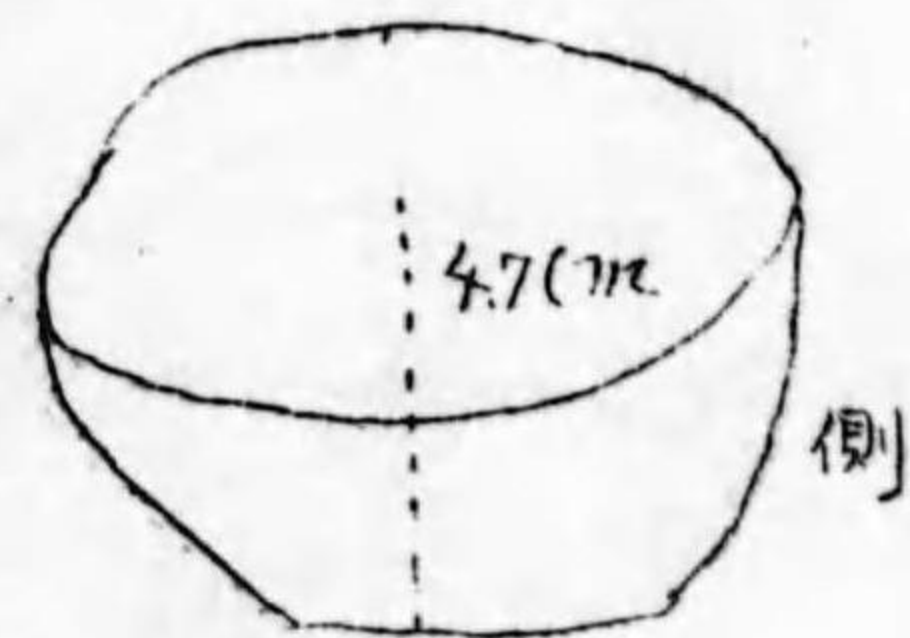




色は茶色  
産地は不明  
或は前記と同  
かじ

色は茶色  
産地は不明  
或は前記と同  
かじ

== (231) ==



色は茶色  
産地は不明  
或は前記と同  
かじ

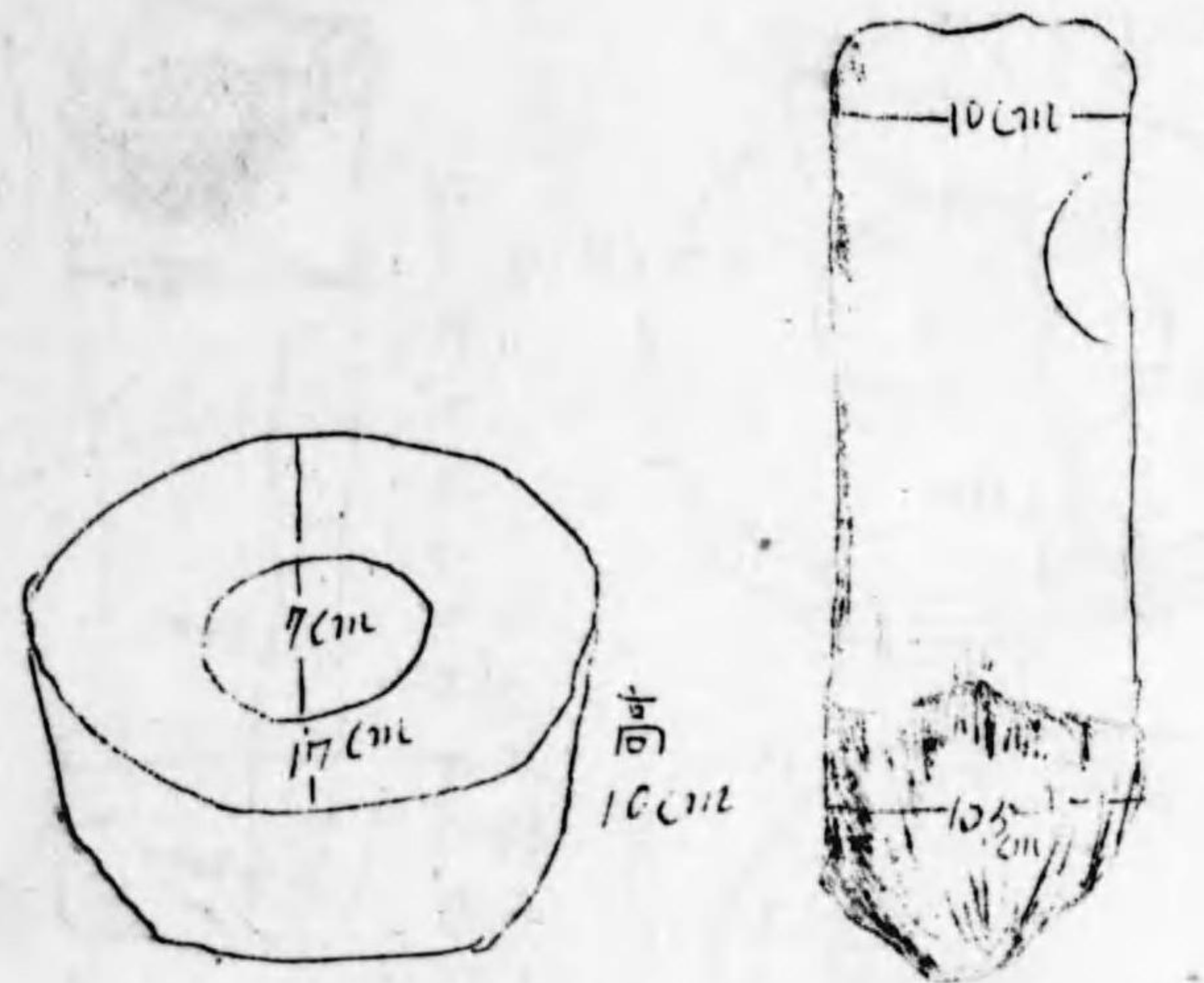
色は茶色  
産地は不明  
或は前記と同  
かじ

== (230) ==

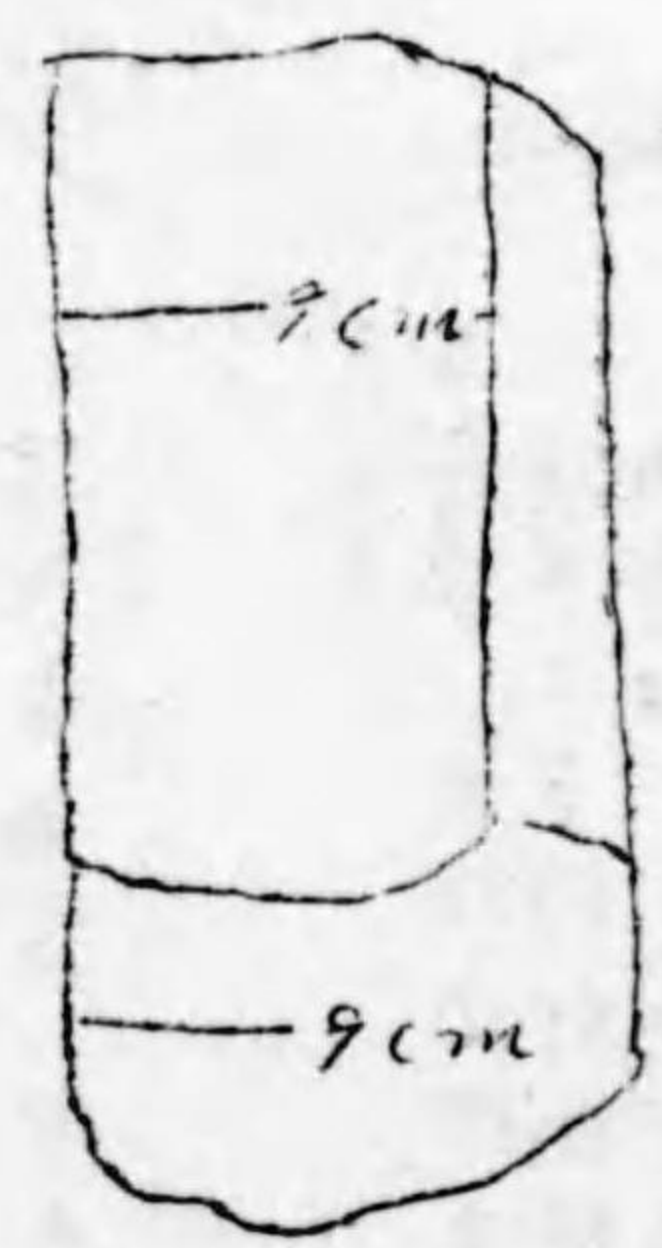
一宮山學子校所藏

石楯

石

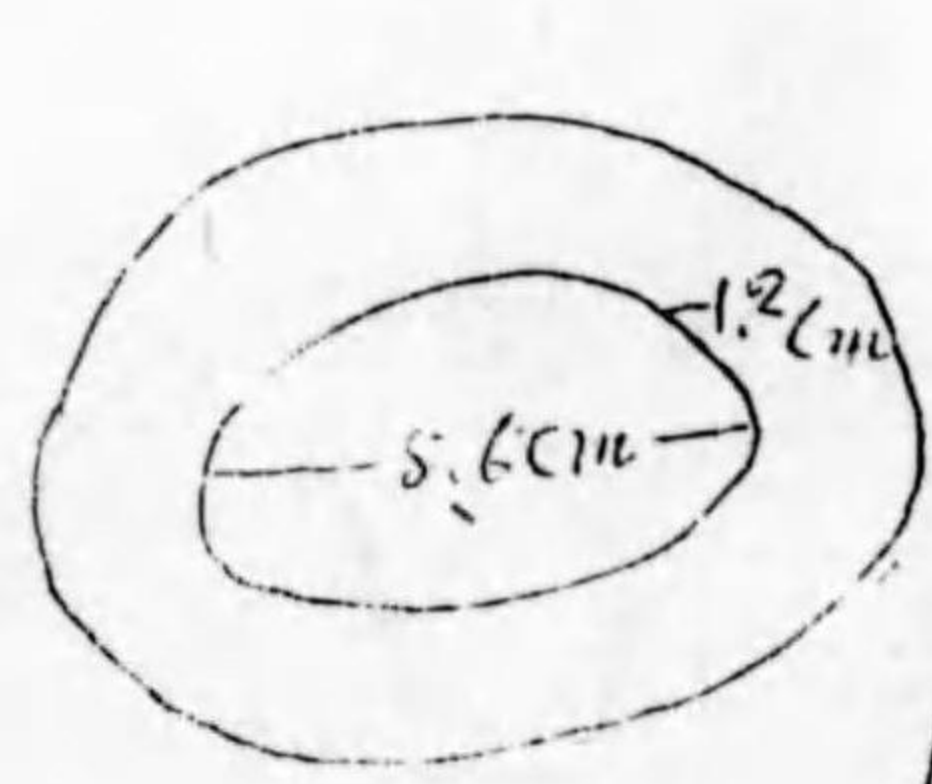
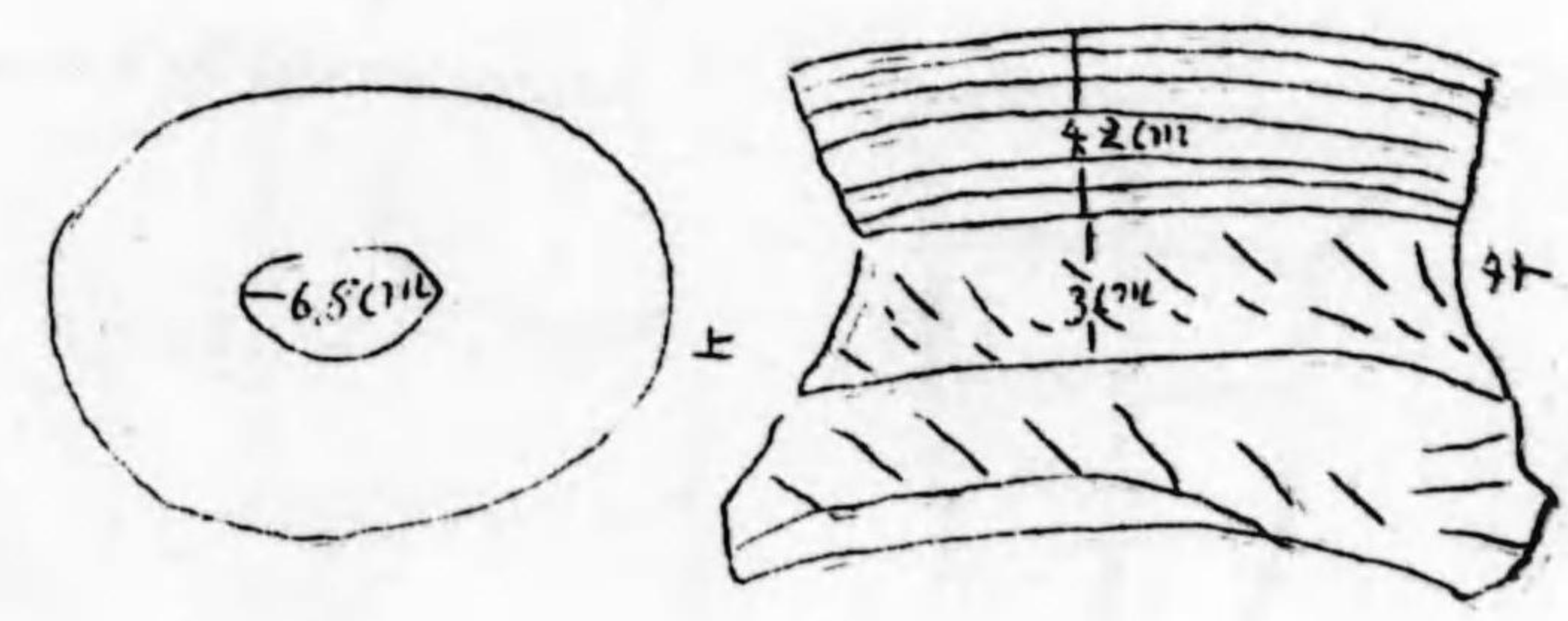


高 10cm



昭和三年五月十八日  
 石原村黒吉彌太郎氏  
 前印  
 岩石 輝石安山岩らしい  
 此の地方になくしい  
 人岳山麓地方に出る  
 もの

同姓

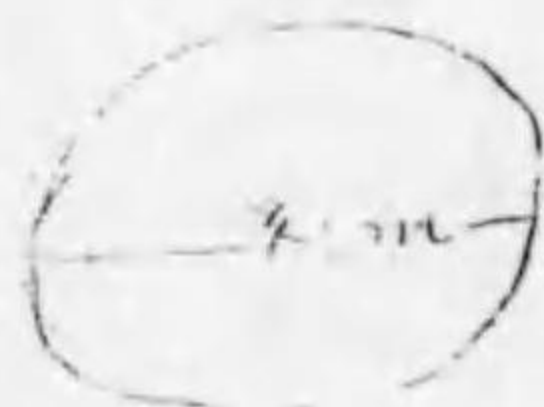
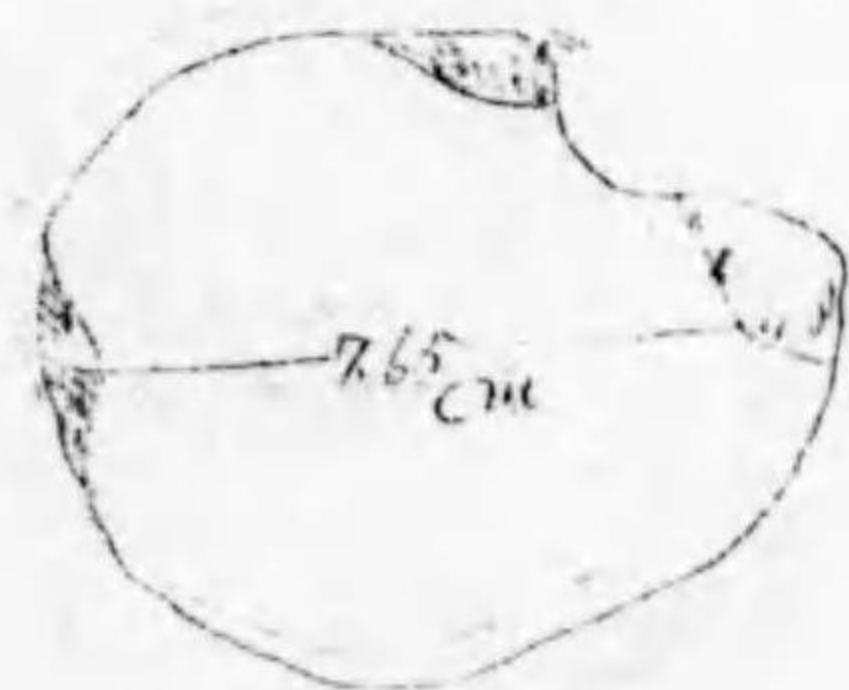
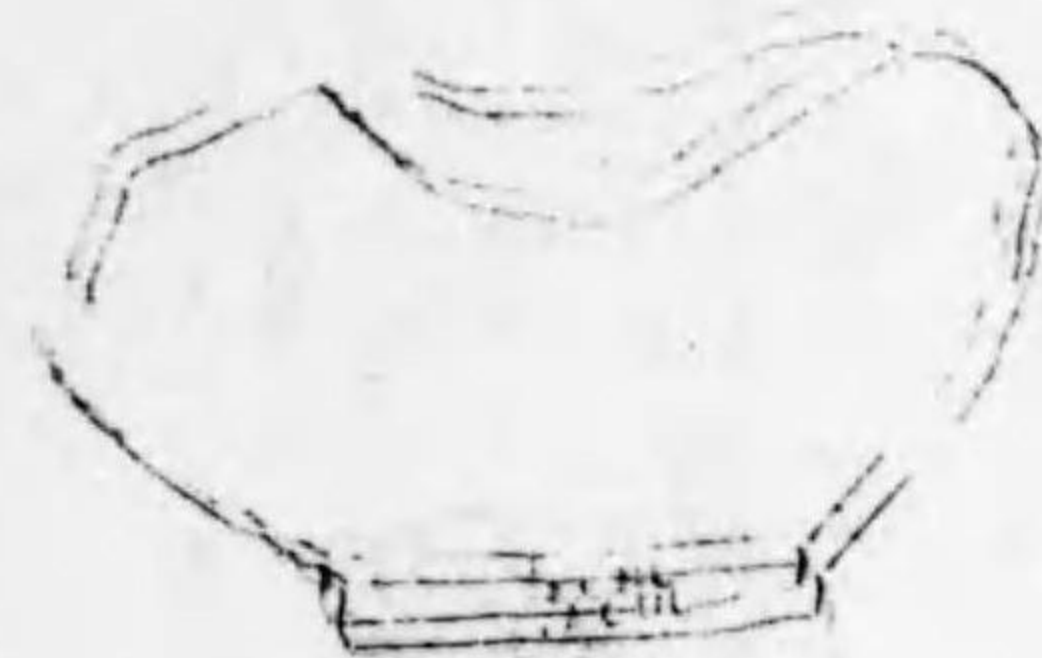


産地 黒灰色  
 金山原  
 昔の布もしくは食物  
 を入れたる蓋らしい

産地 色茶色  
 田中鶴吉氏

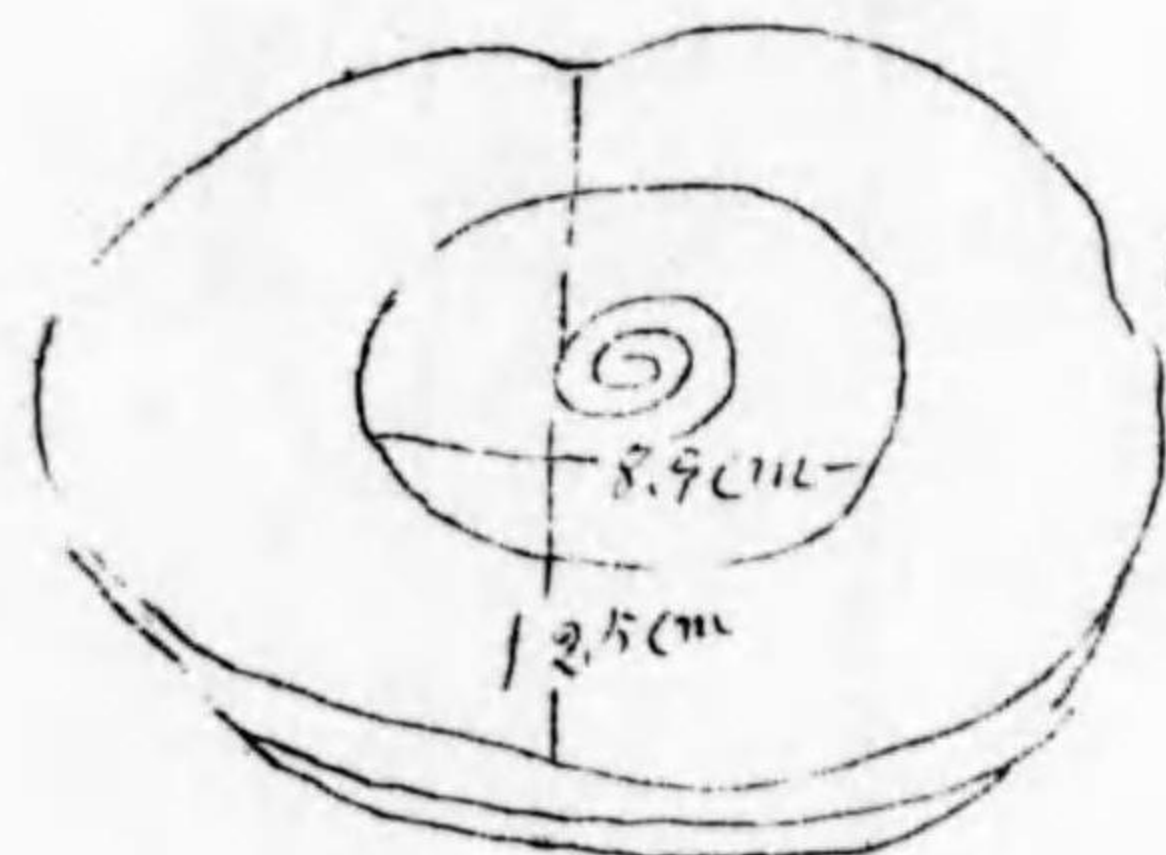


色は茶色  
形から見て  
巴川浮堀



土器

石斧



(1)



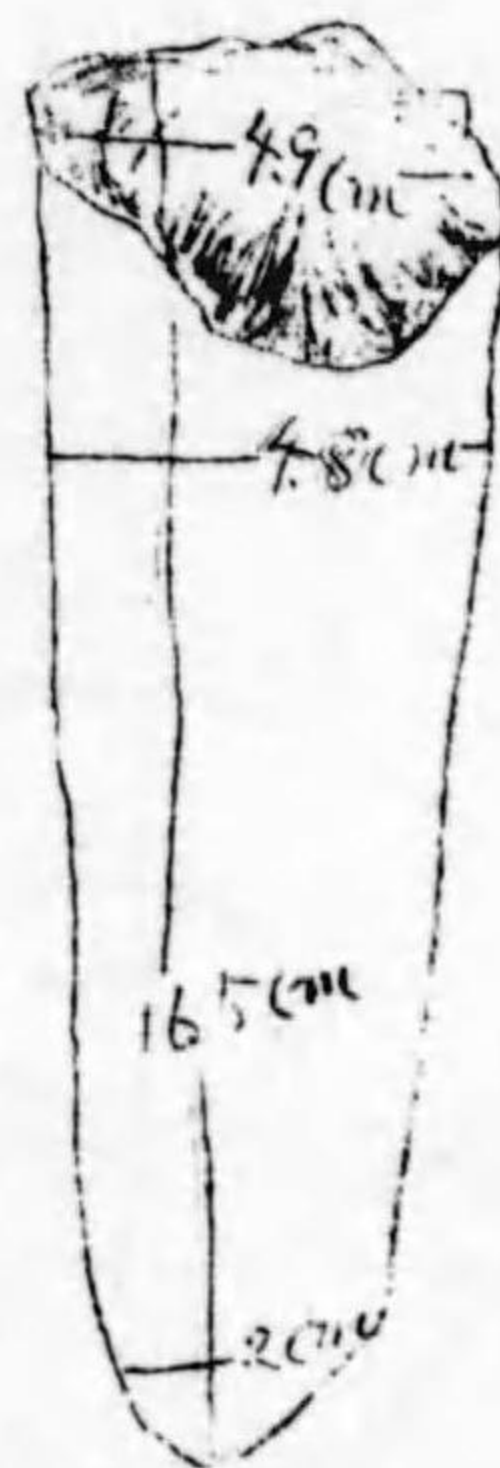
(2)

(1) 色は茶色

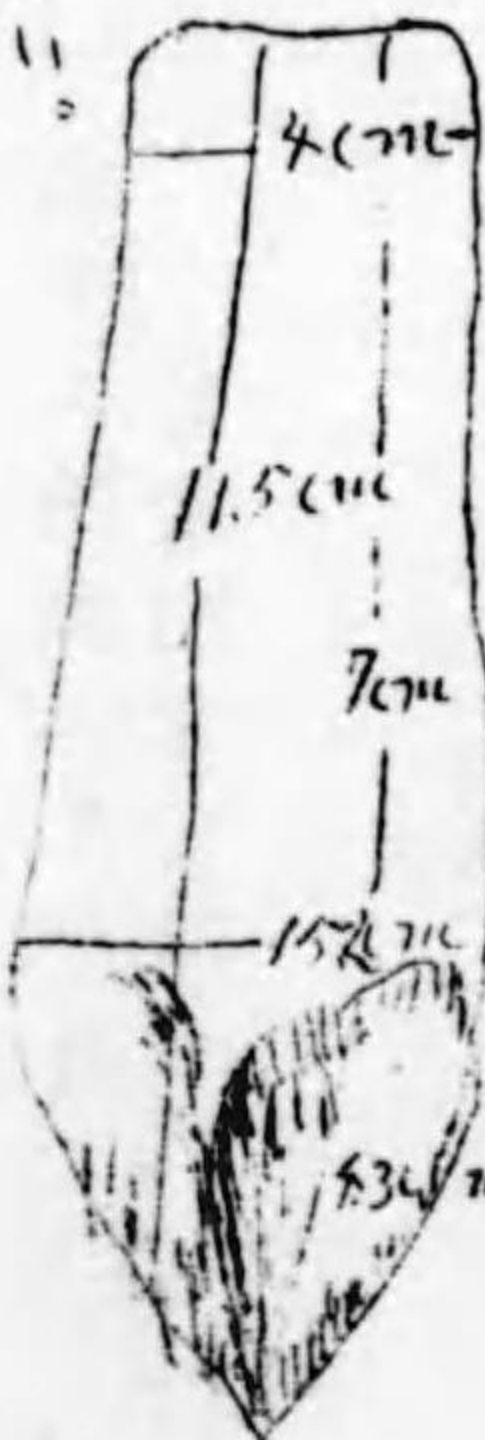
出产地 坪井南権現堂  
寄附者 雨宮保氏  
北原より 東原地内宇  
此寄附 所益雄  
6.2cm



6.2cm

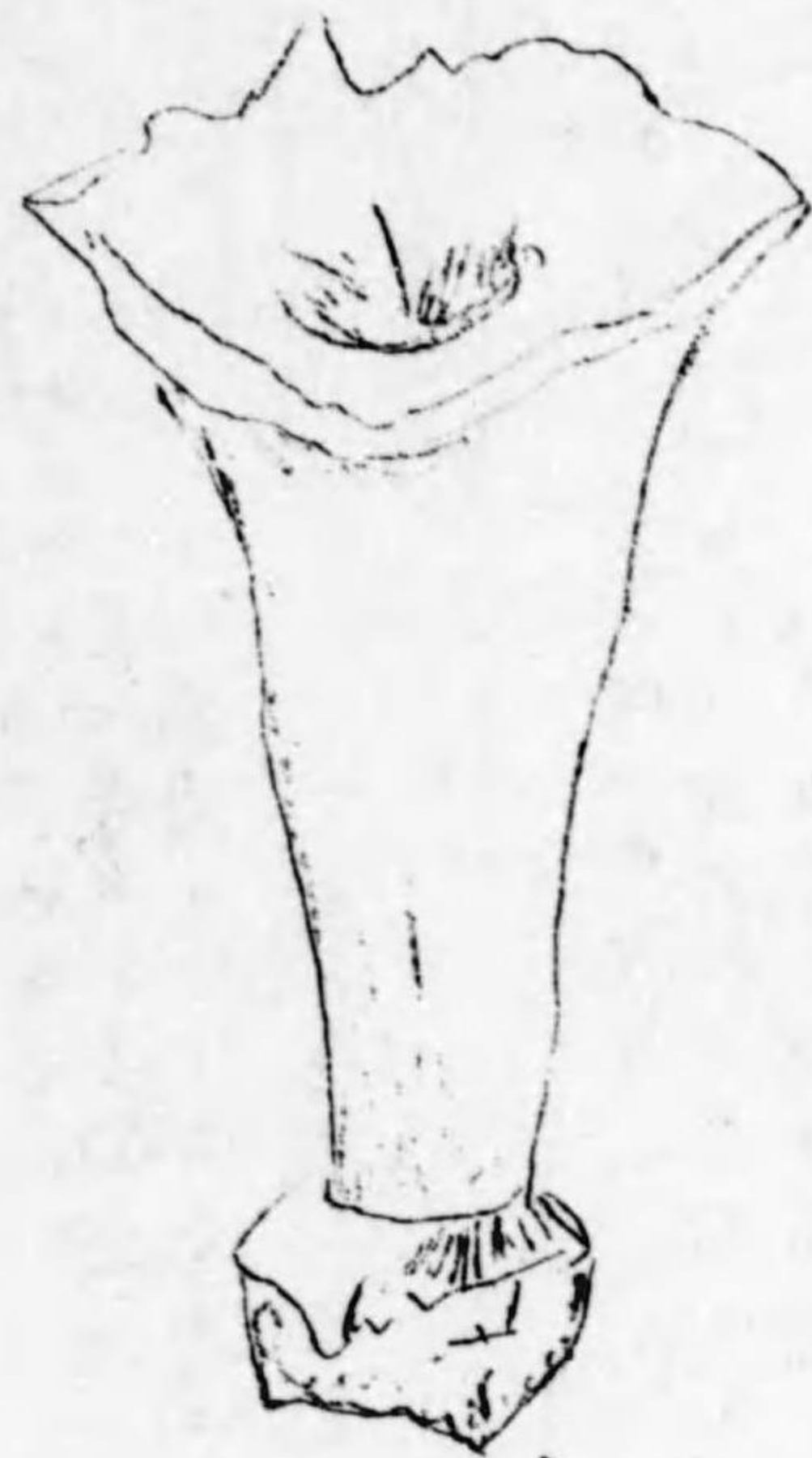


切る所が三つに突出して居るは稀らしい。



产地 国分南森

水上原氏寄附



色は茶色

筋の如きものが其の方向に出て  
或は提拵か又は拵の一種で  
はなすかと思ふ

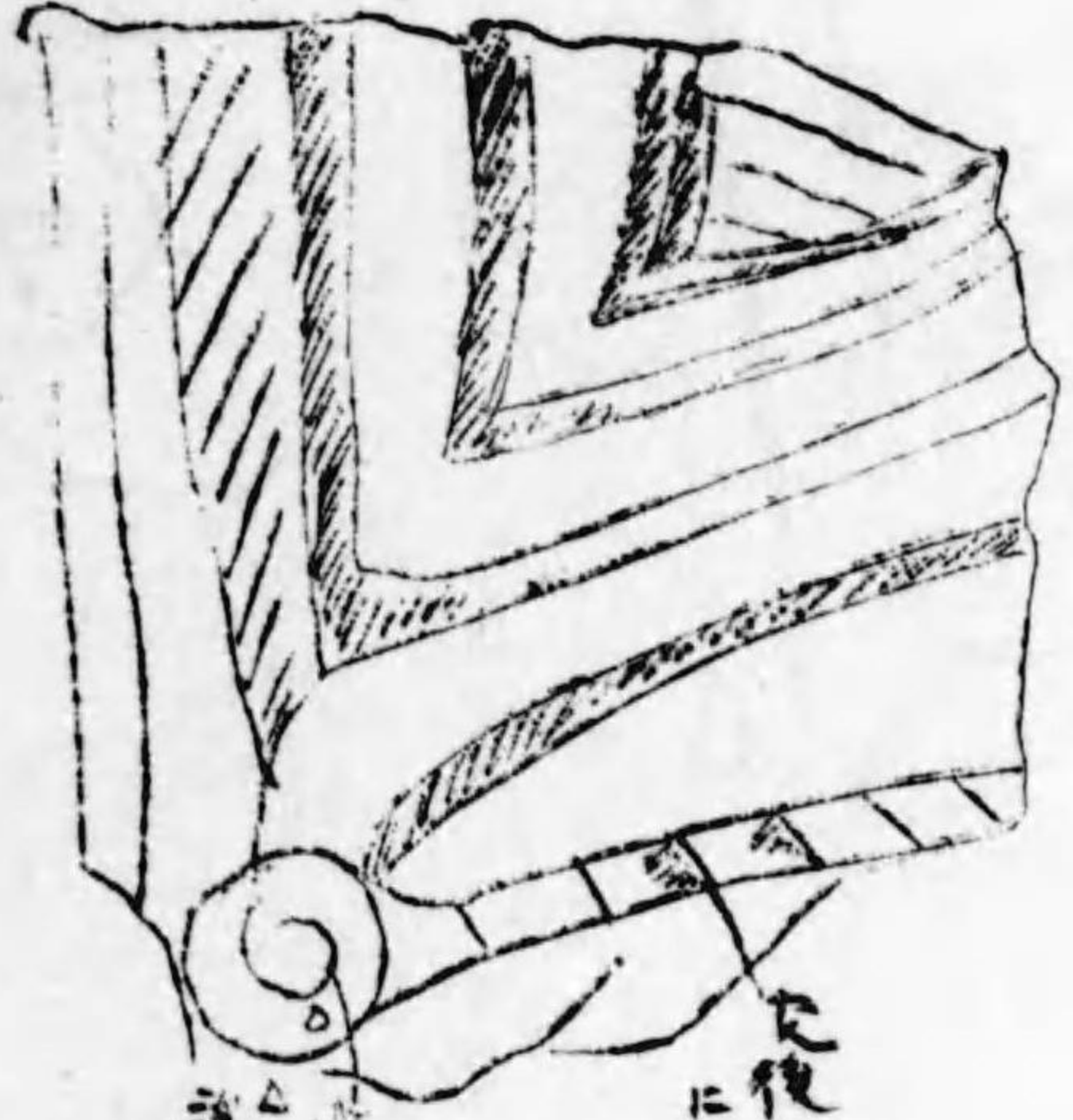
色  
茶色  
中  
中  
中  
中  
中  
中



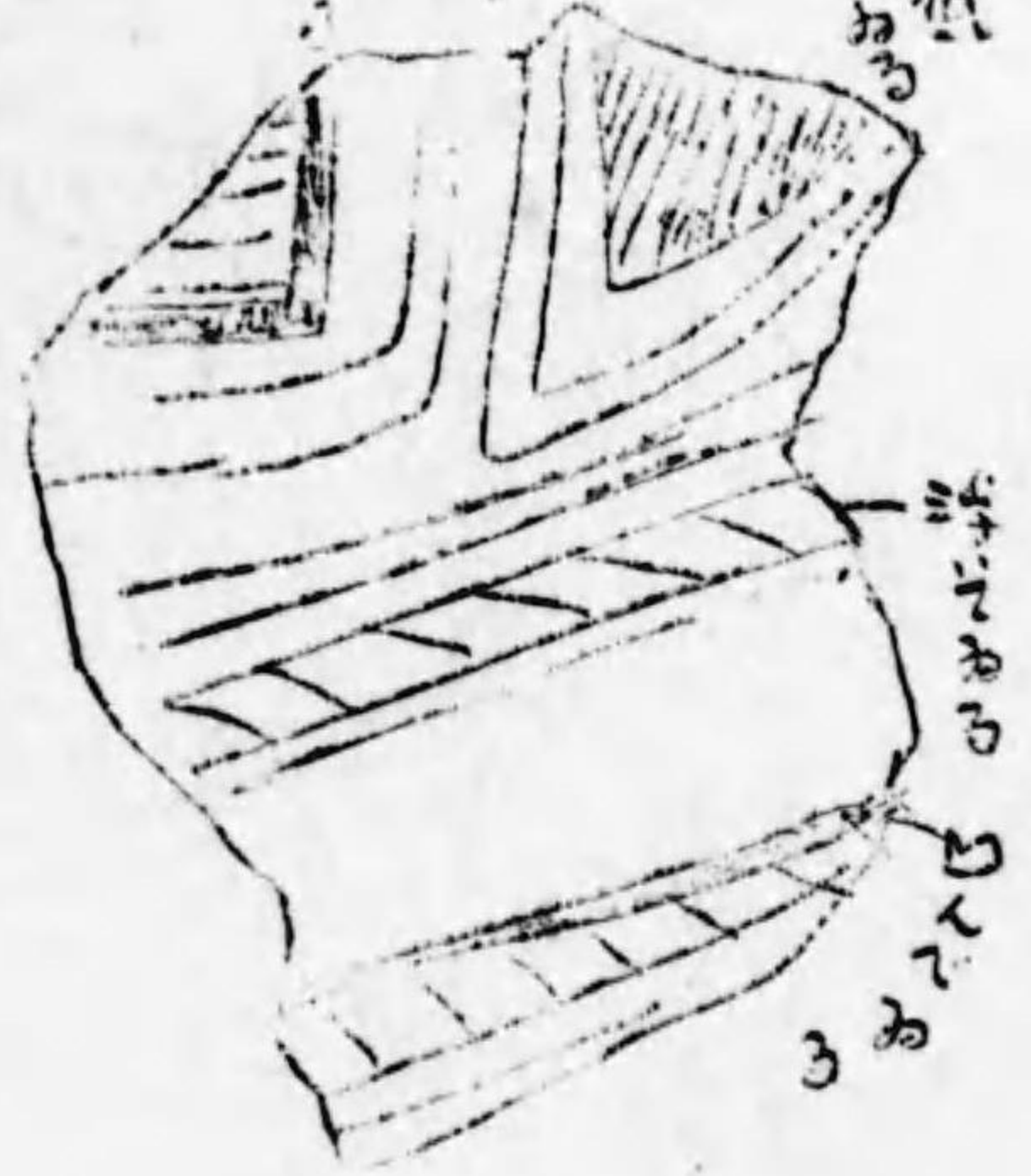
色  
茶色

海軍部御用  
蔵の中央へおしるべき物  
茶色はあり  
茶色は使用し老も少く  
い

蔵の御用が茶色  
で應りし茶色は  
茶色はあり

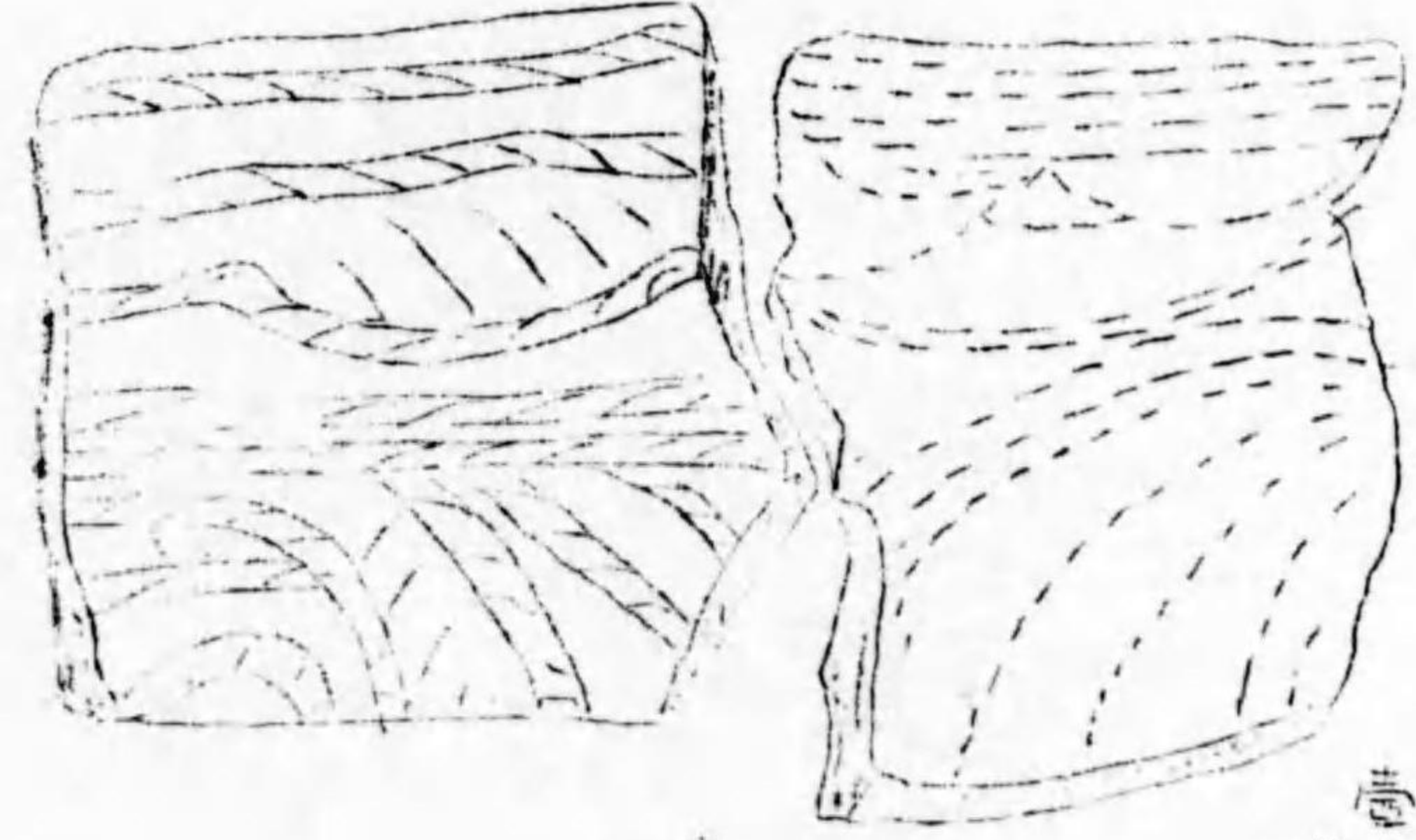


壺の破片  
 口縁部  
 口縁部  
 口縁部



壺の破片  
 口縁部  
 口縁部  
 3

(155)



壺の破片らしい  
 線は点線にして口縁  
 がつてある  
 口縁部にして割合に  
 高標せしものである

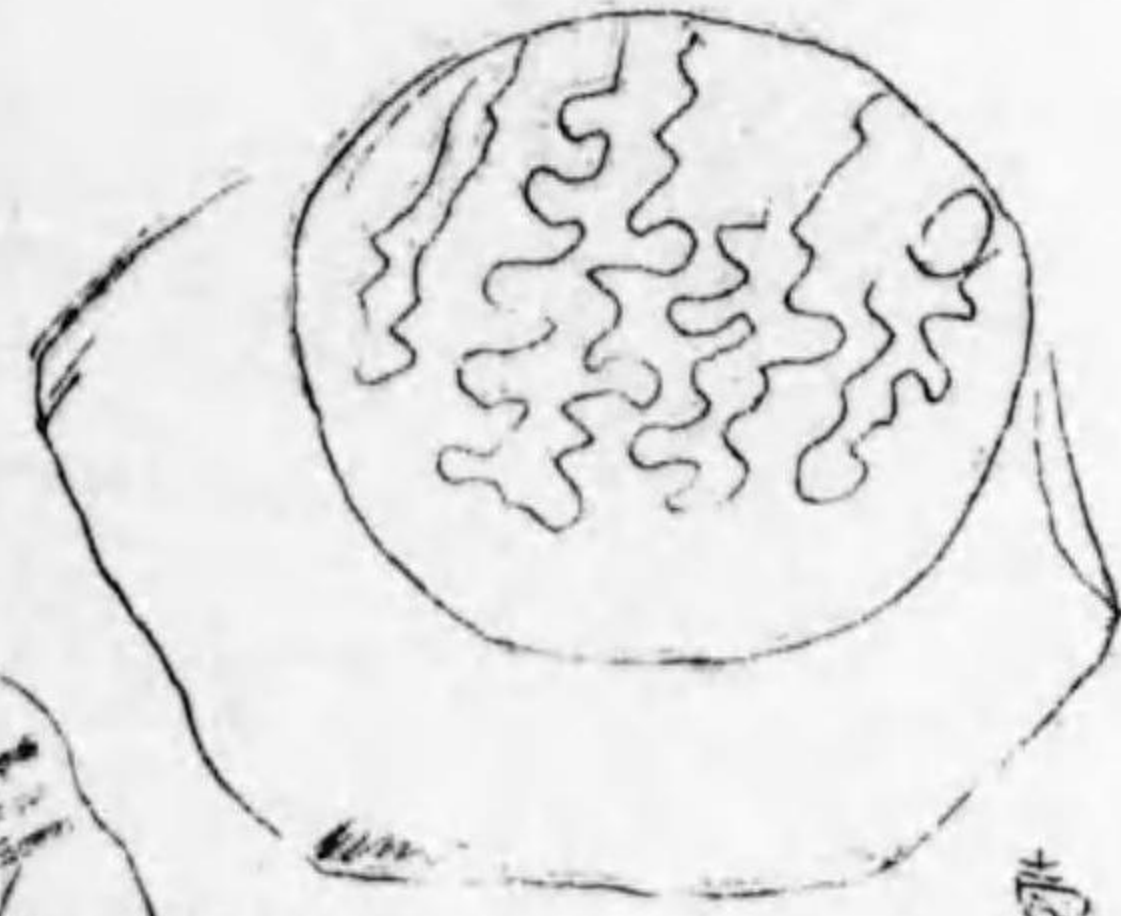
壺の何かの破片  
 らしい線状にして  
 此れは備生式である



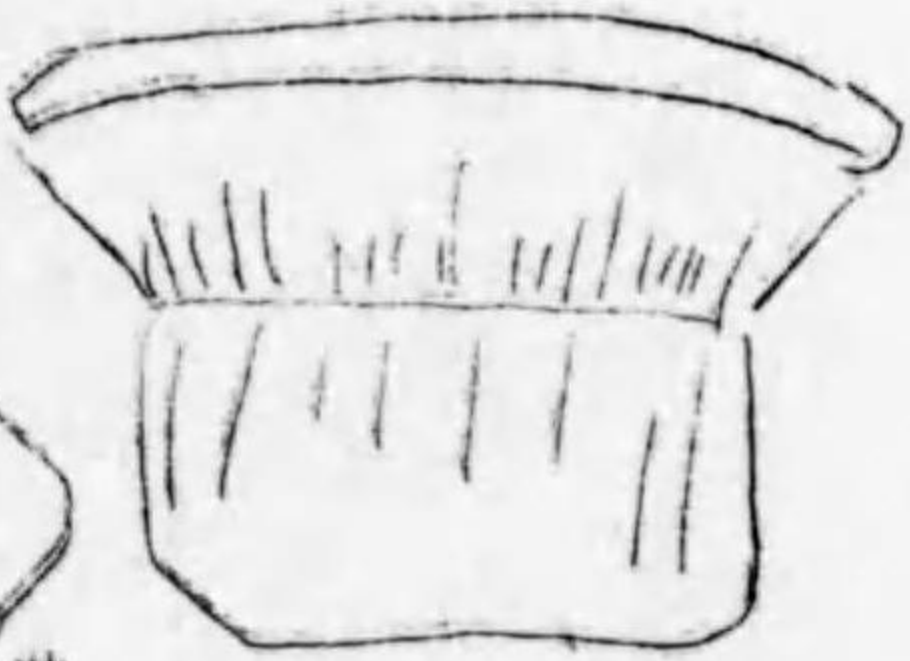
壺の破片  
 口縁部  
 口縁部

(158)

甲斐奈神社  
大正十四年に  
出しでしもの

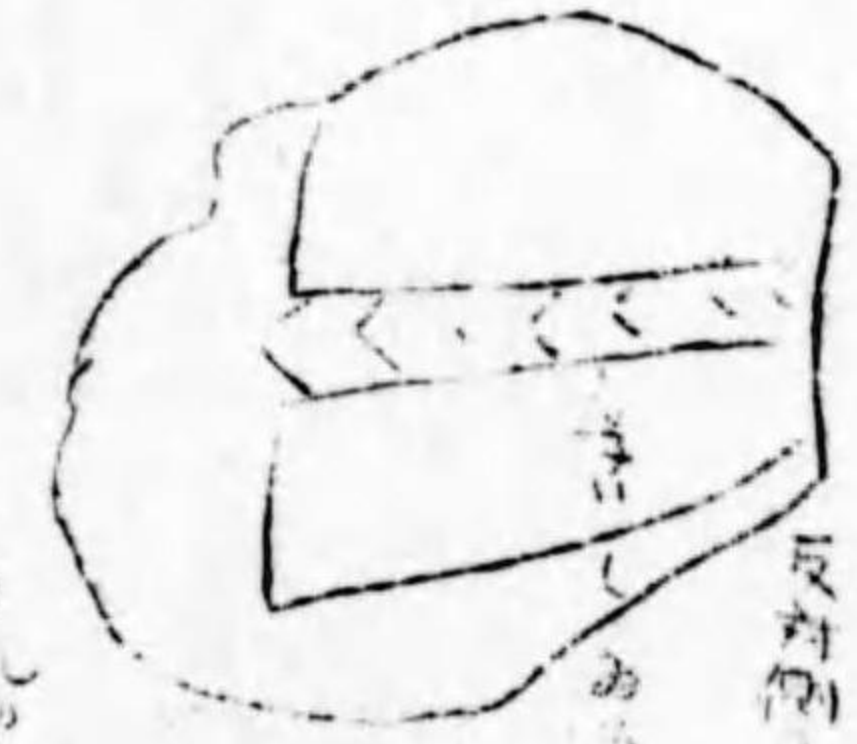
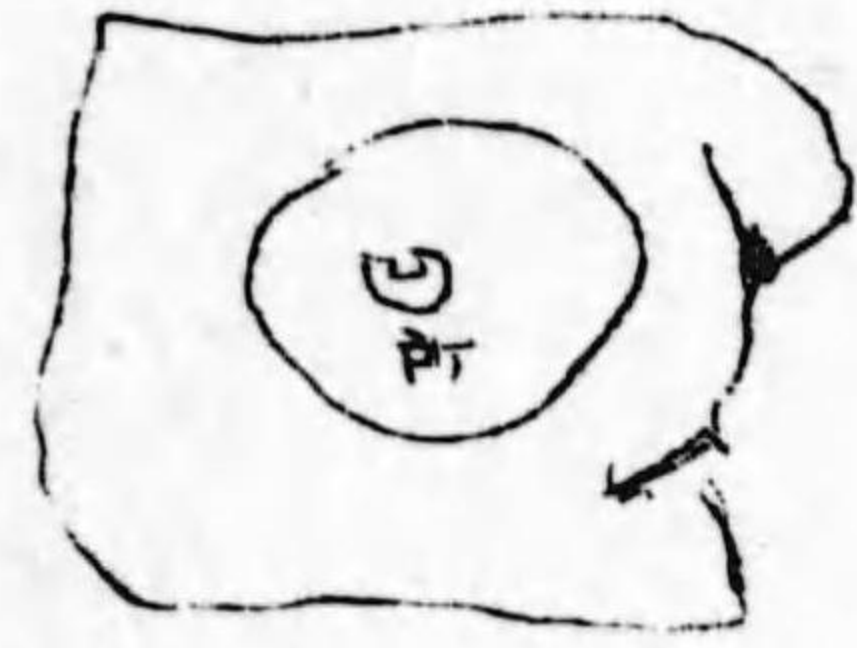
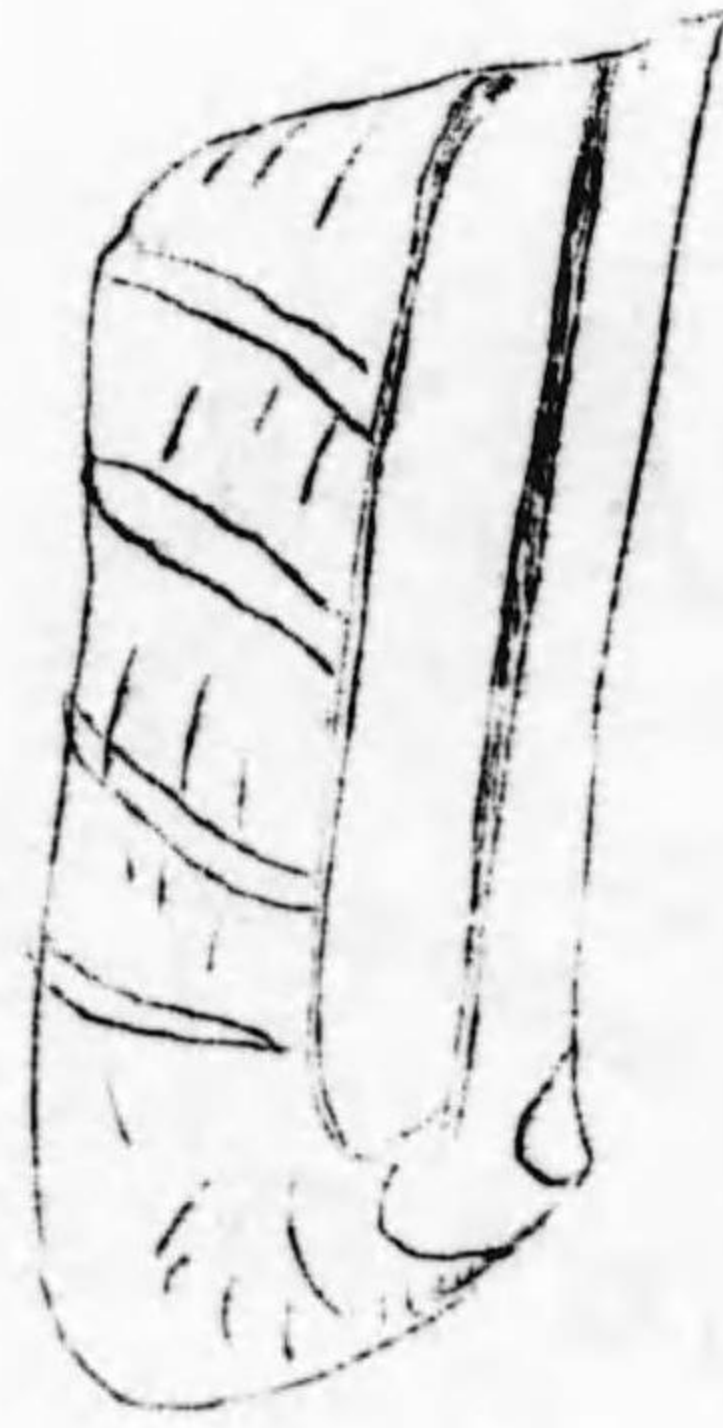


蓋の蓋  
らし  
ハ



蓋の蓋らしハ

(241)

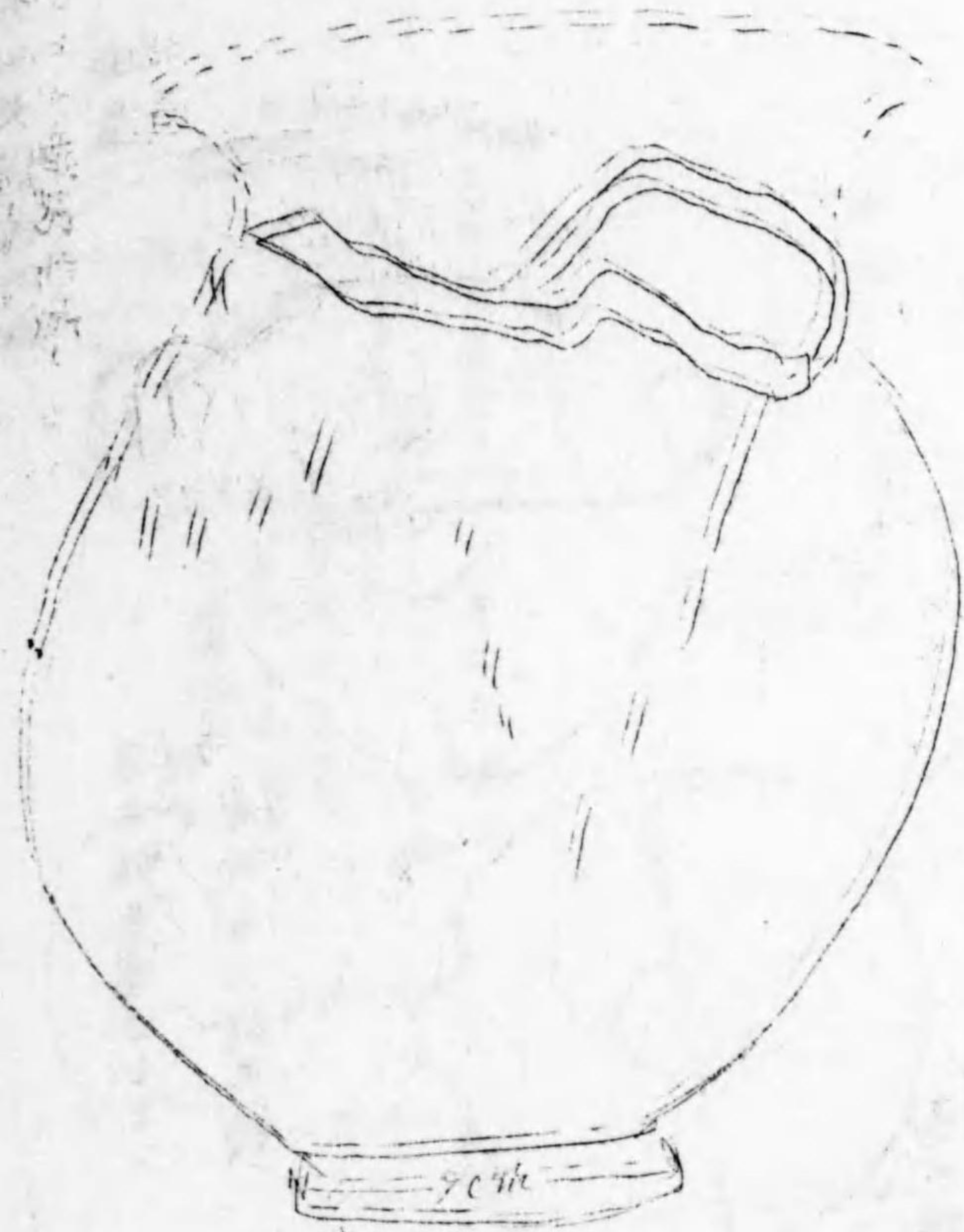


蓋の蓋らしハ

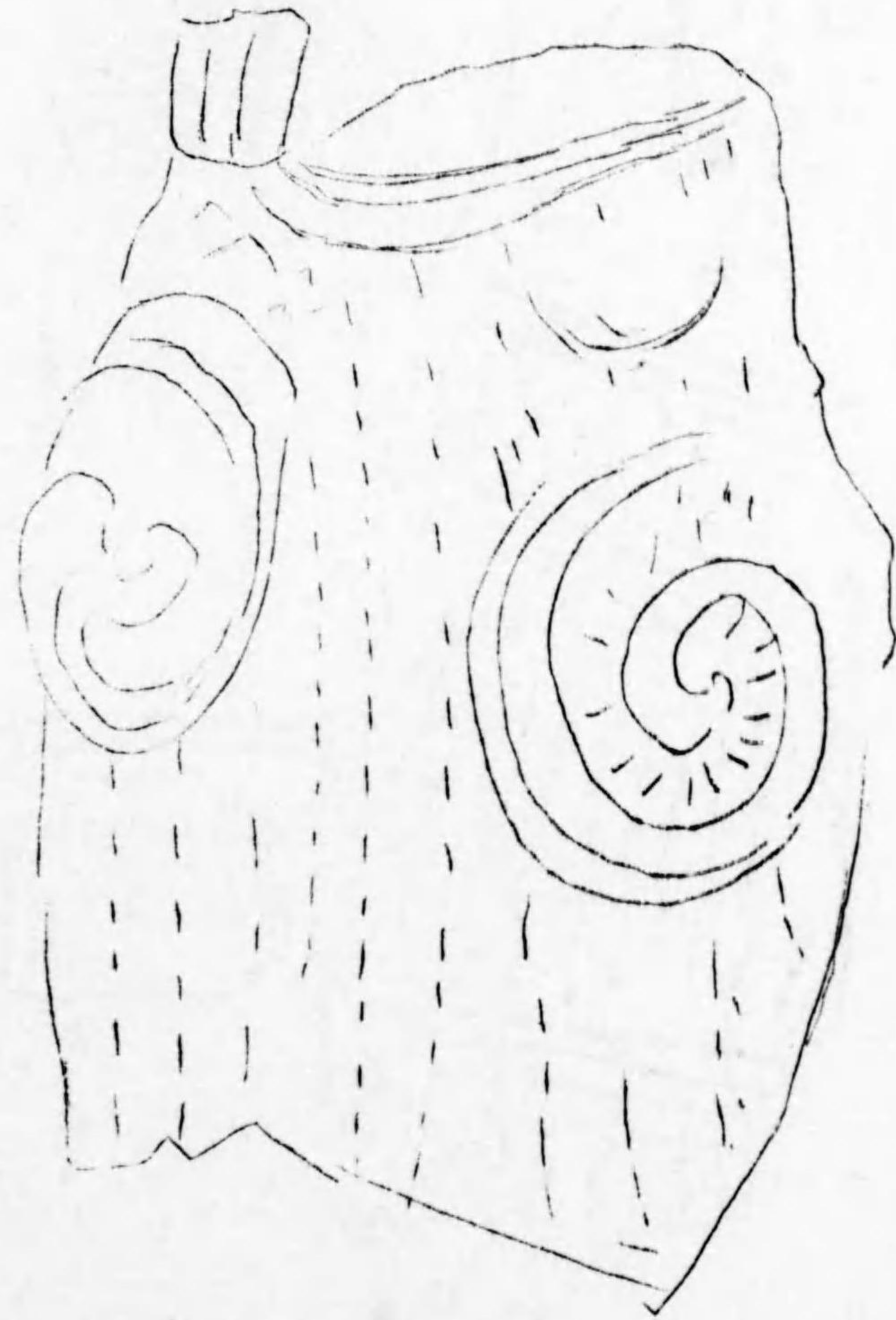
此の蓋は、甲斐の蓋である

此の蓋は、甲斐の蓋である

(242)



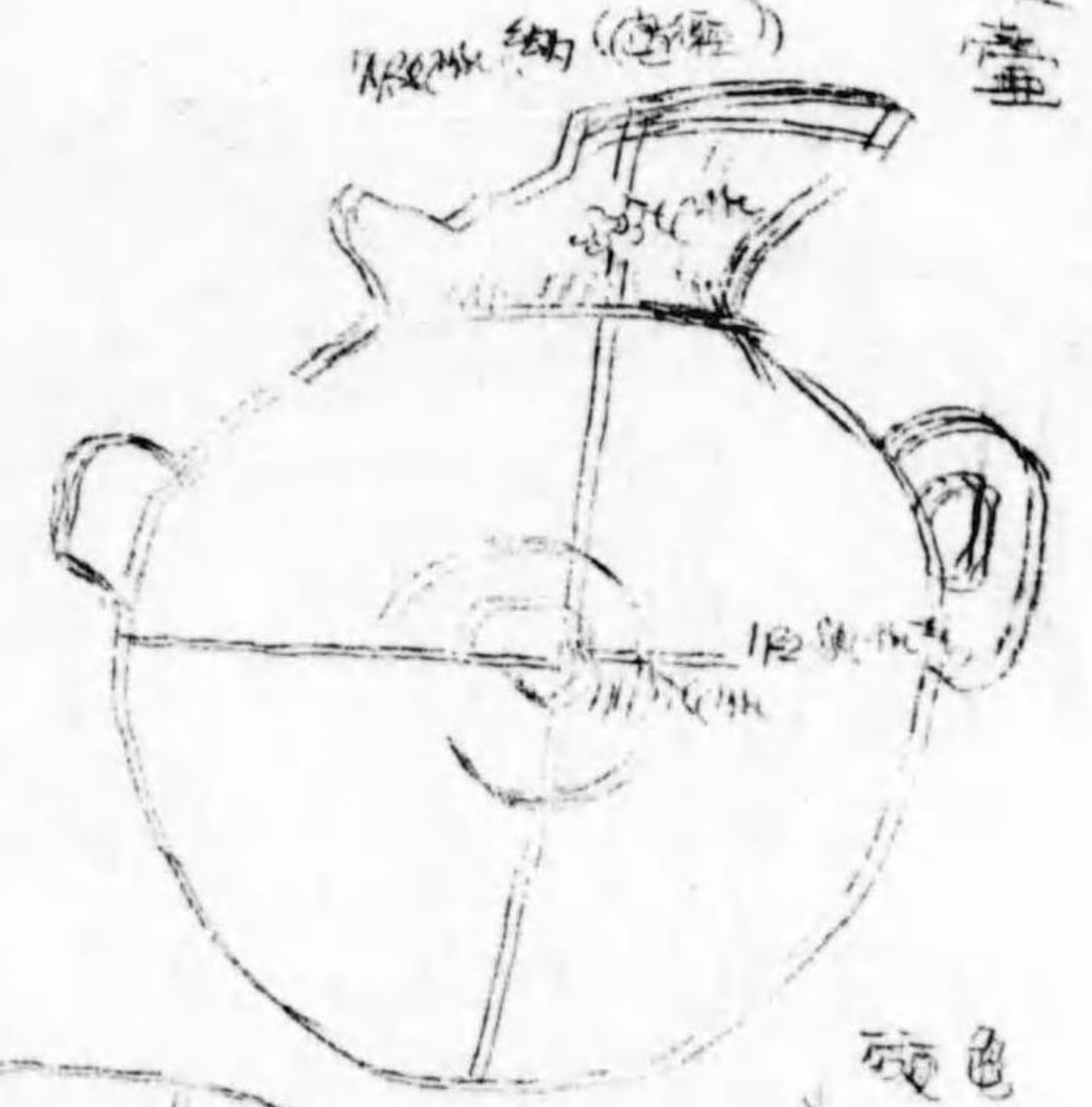
產地  
 產田全重標  
 (昭和三年)  
 色茶色  
 無紋  
 酒  
 27  
 27



(252)

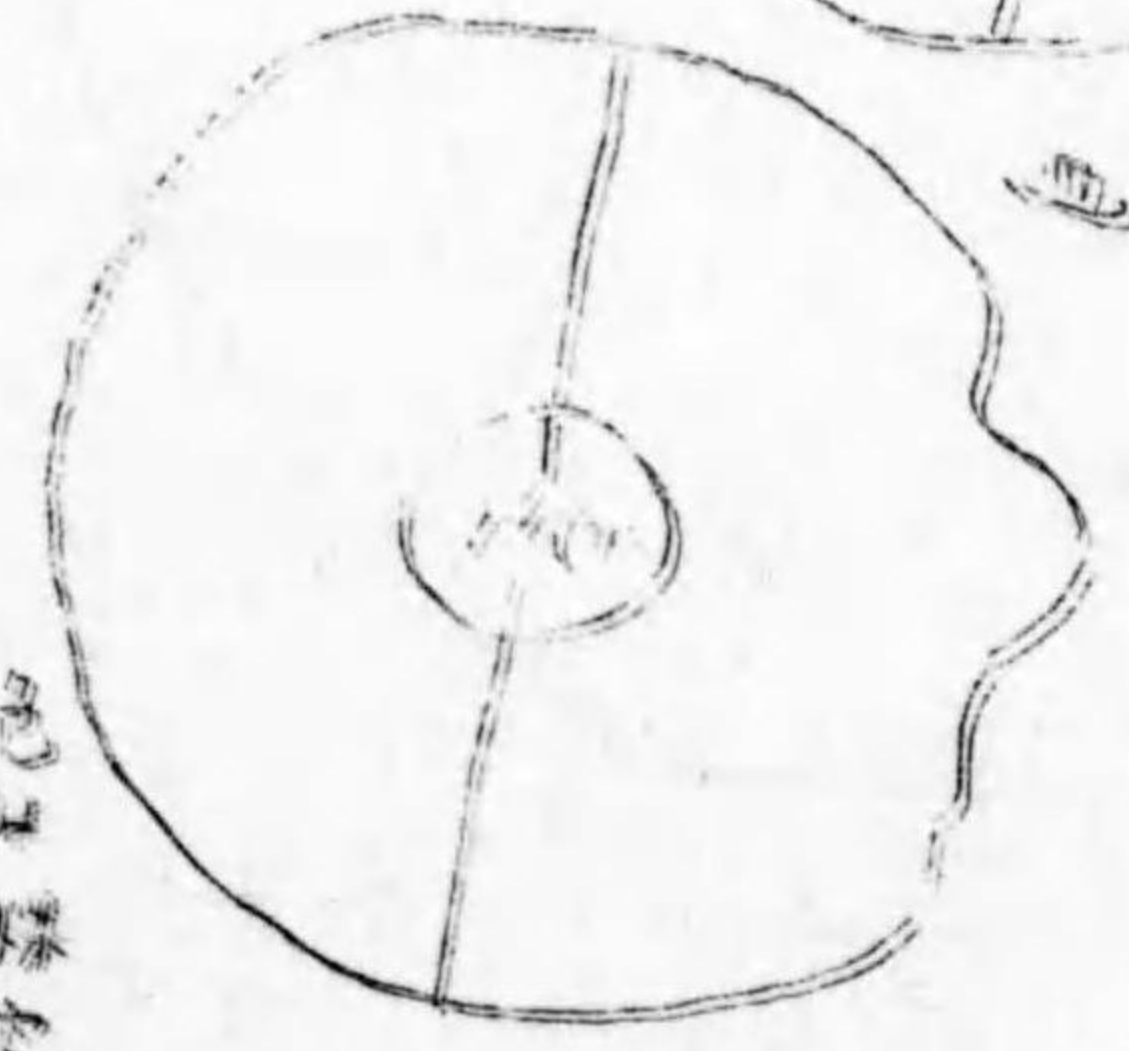
永正支那成新製

壺



色煤黑空色  
產地金州新杏核

作  
器  
用  
之  
器  
也

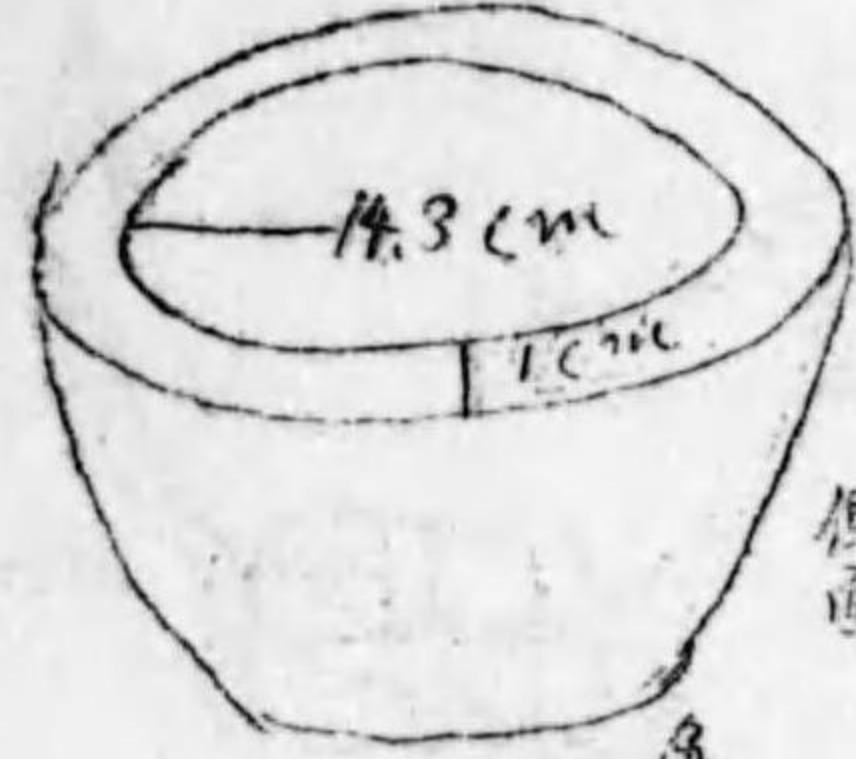


色  
煤  
黑  
空  
色  
地  
部  
部



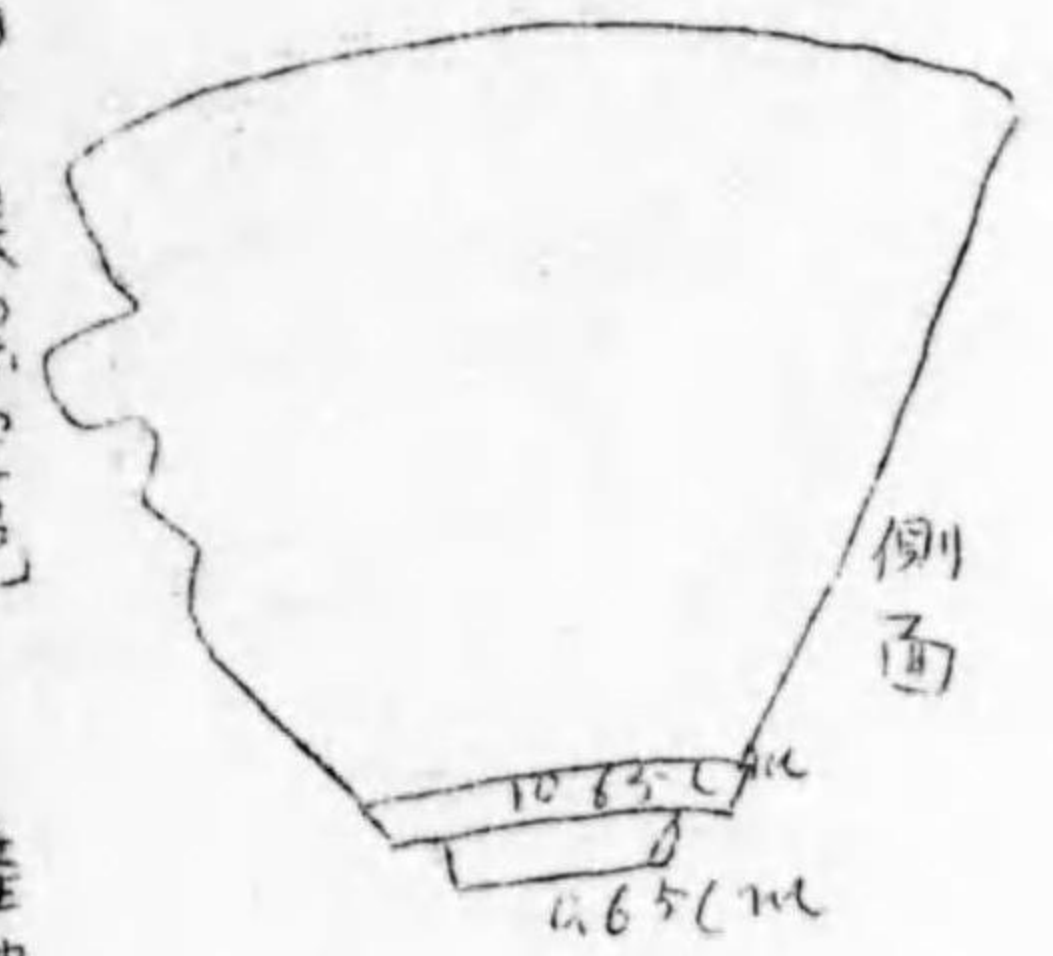
側  
面

—(274)—



色  
煤  
黑  
空  
色  
側  
面

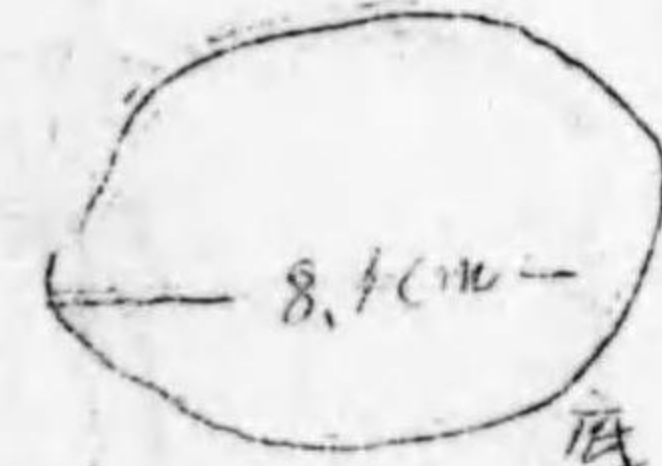
色  
淡  
灰  
茶  
色  
地  
部  
部



側  
面

上  
部

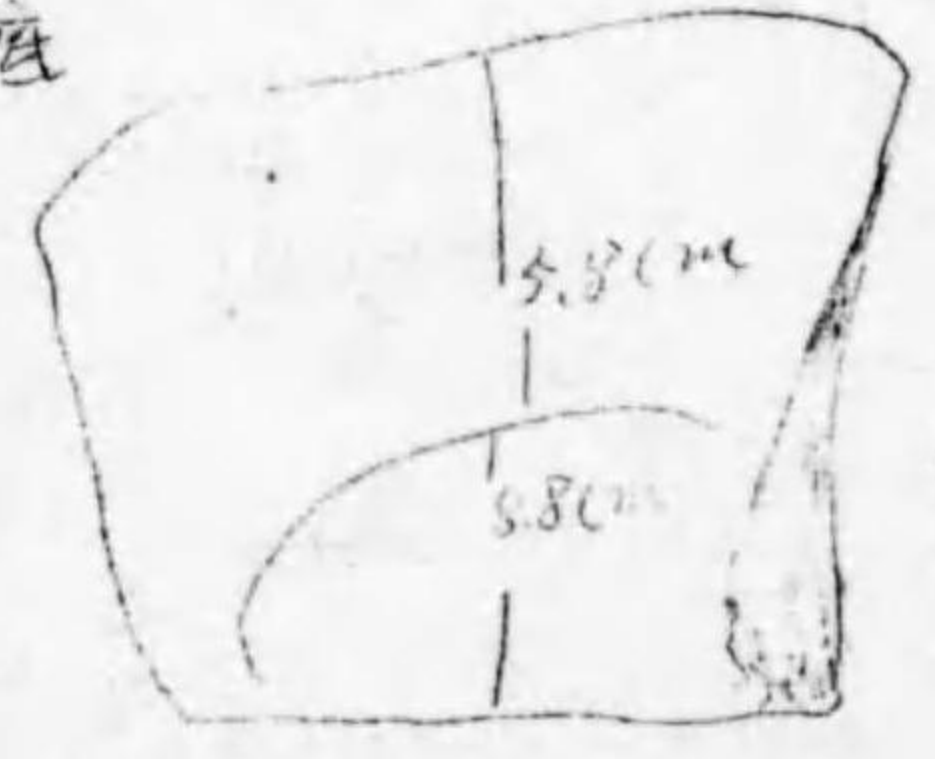
地  
部  
部



底



中



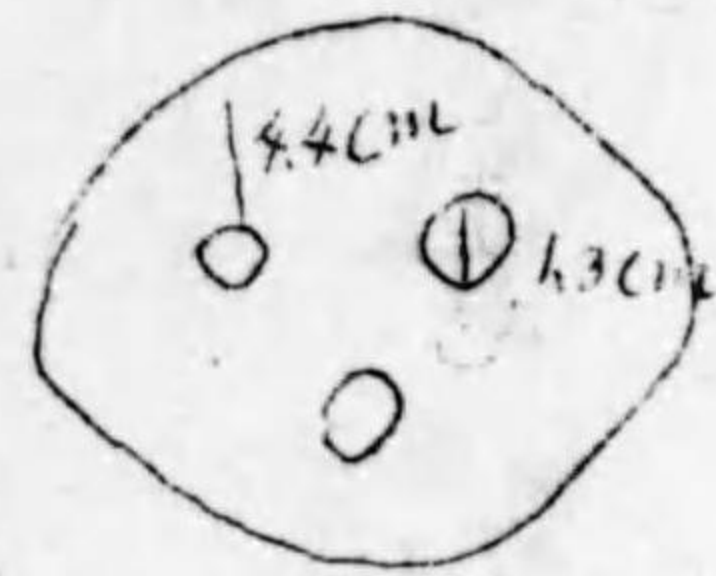
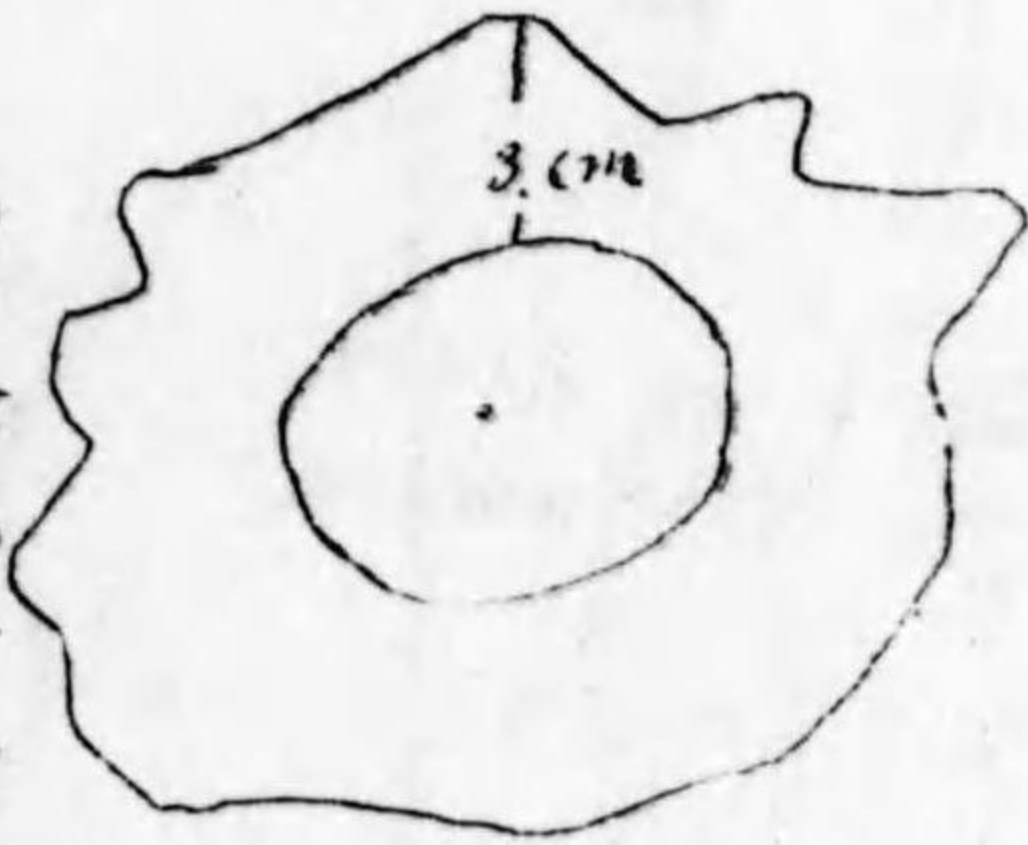
中

—(275)—

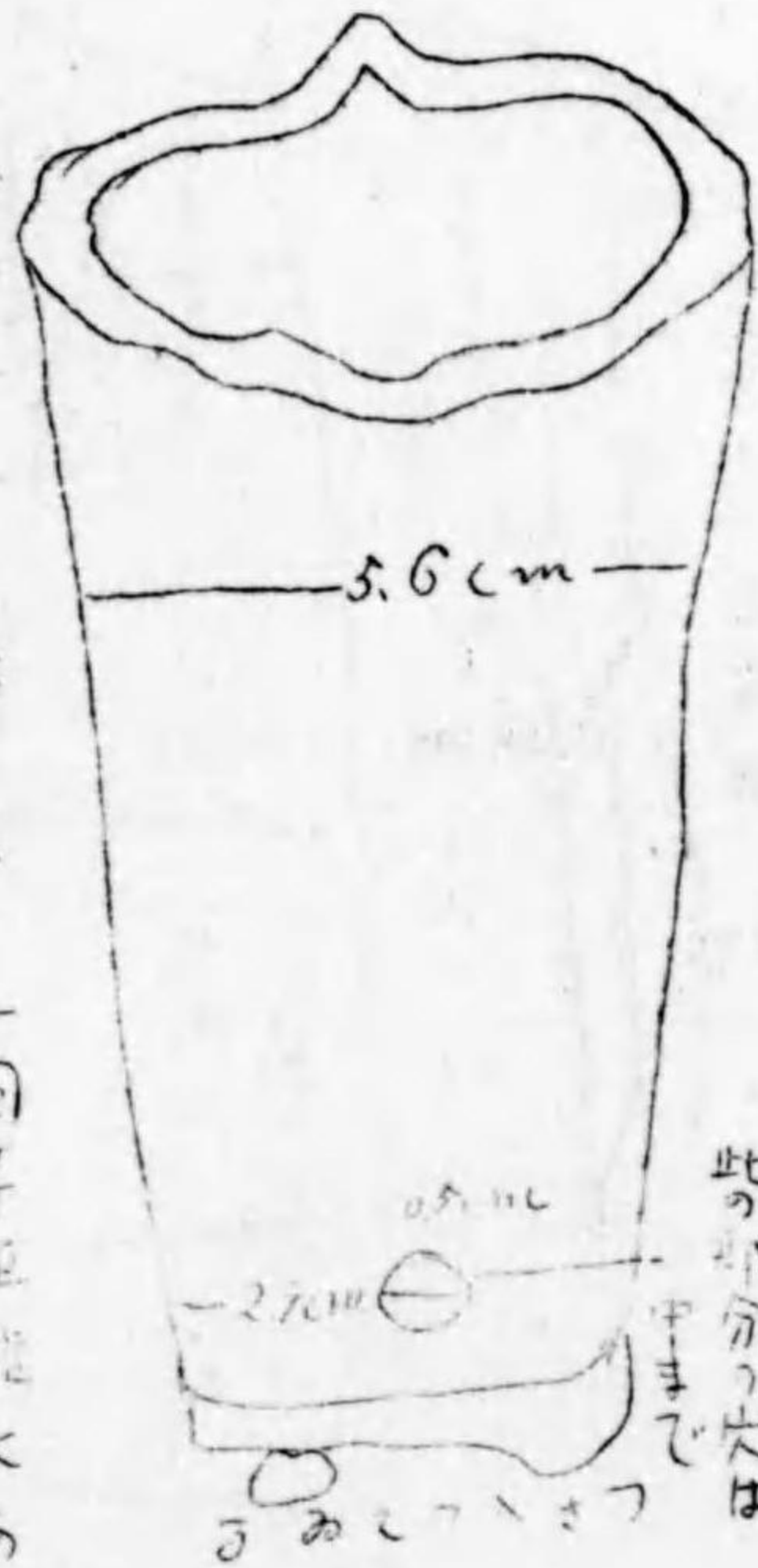




色は茶色にして  
産地は甲斐奈神社境内

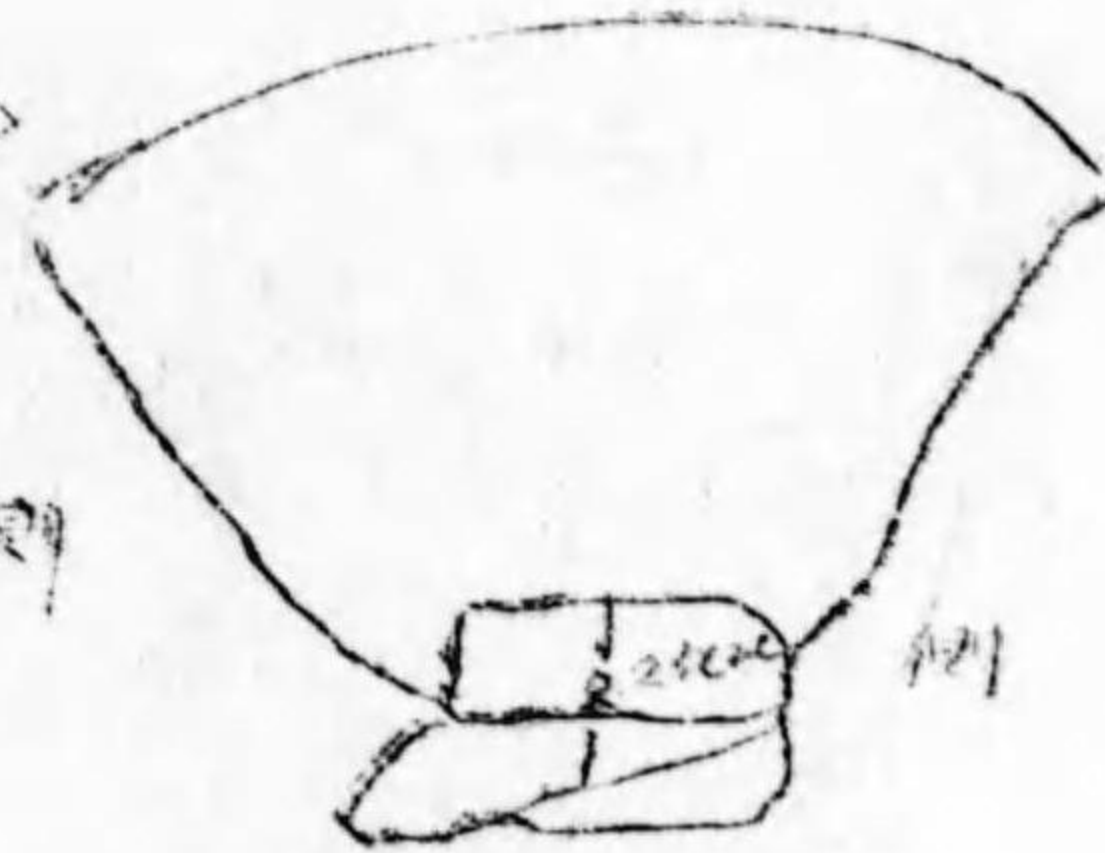
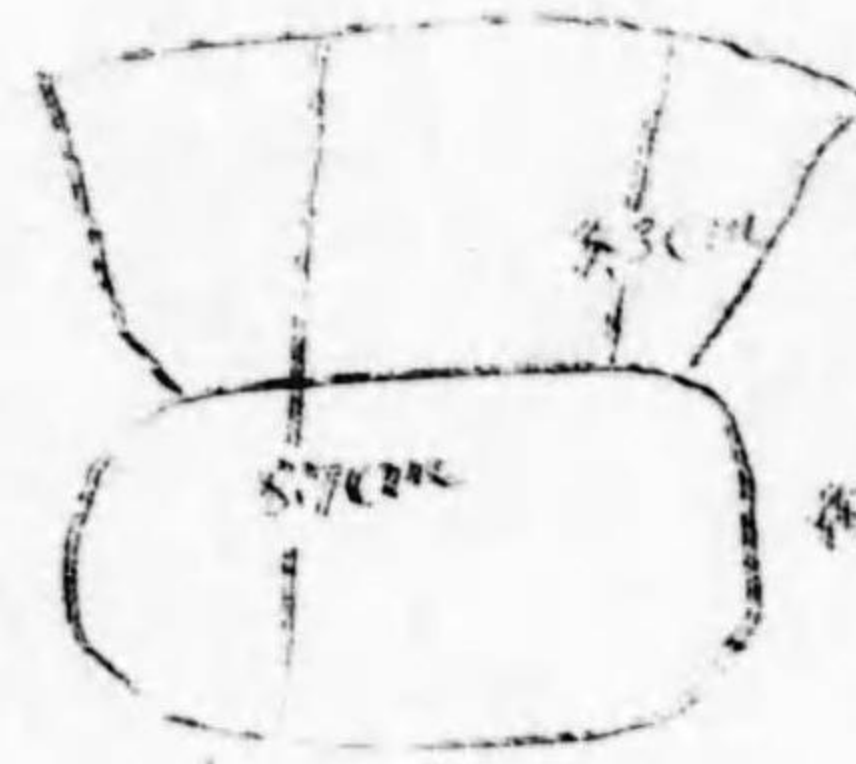


此の穴は三個等距離に  
つて全部甲斐まで通  
つてあ  
る

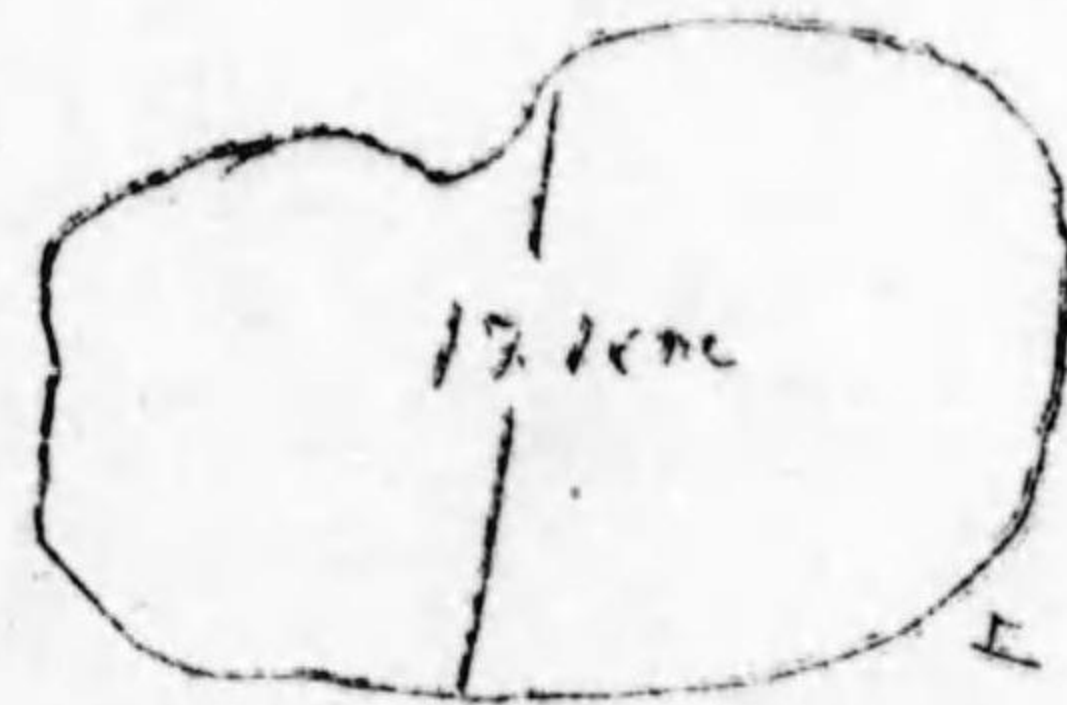


此の部分の穴は  
甲斐まで

壺

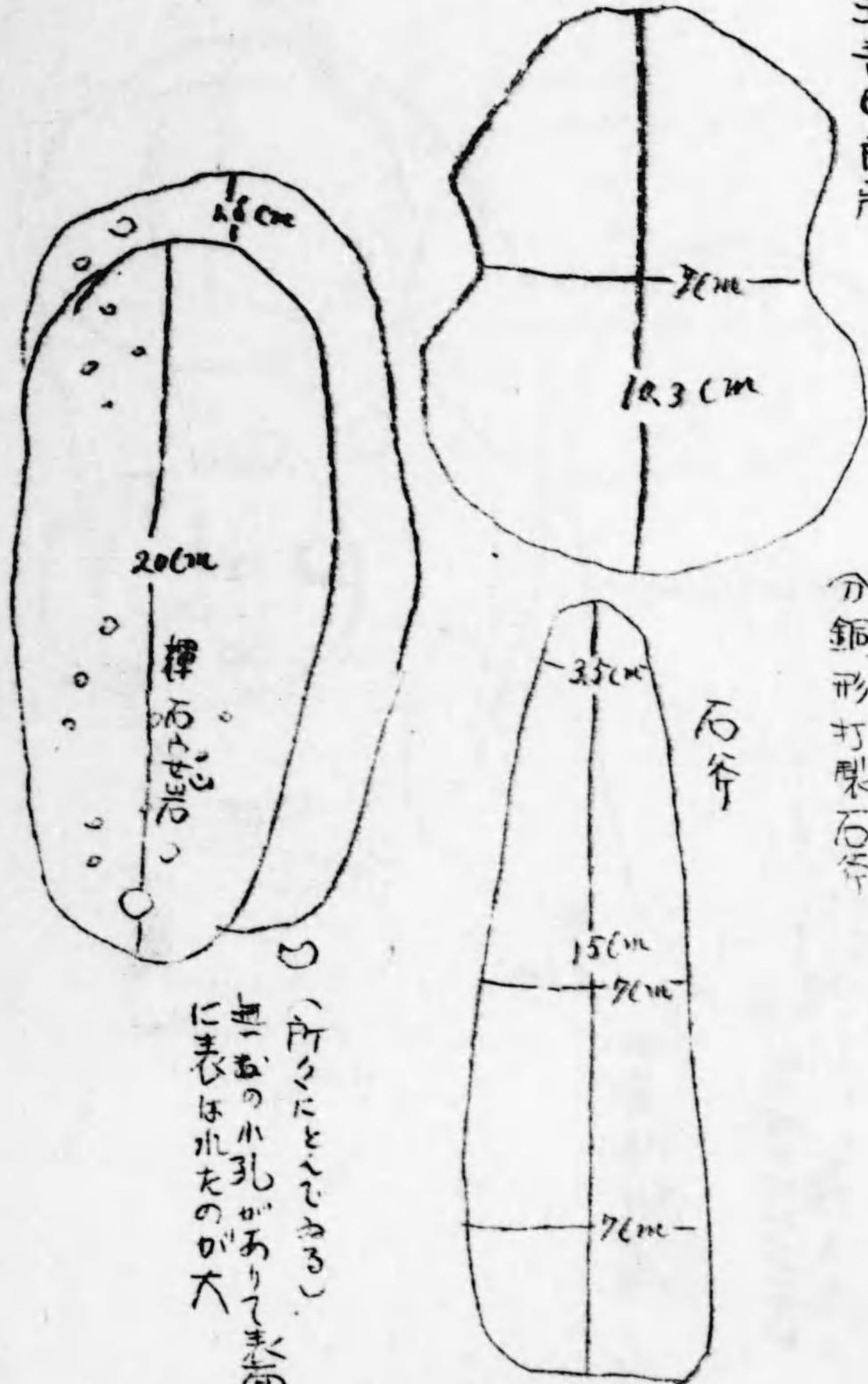


色は茶色  
産地は馬  
堂



色 濃茶色  
産地 下矢作  
雨宮考木  
代印 印

岩間塚古石所蔵



分銅形打製石斧

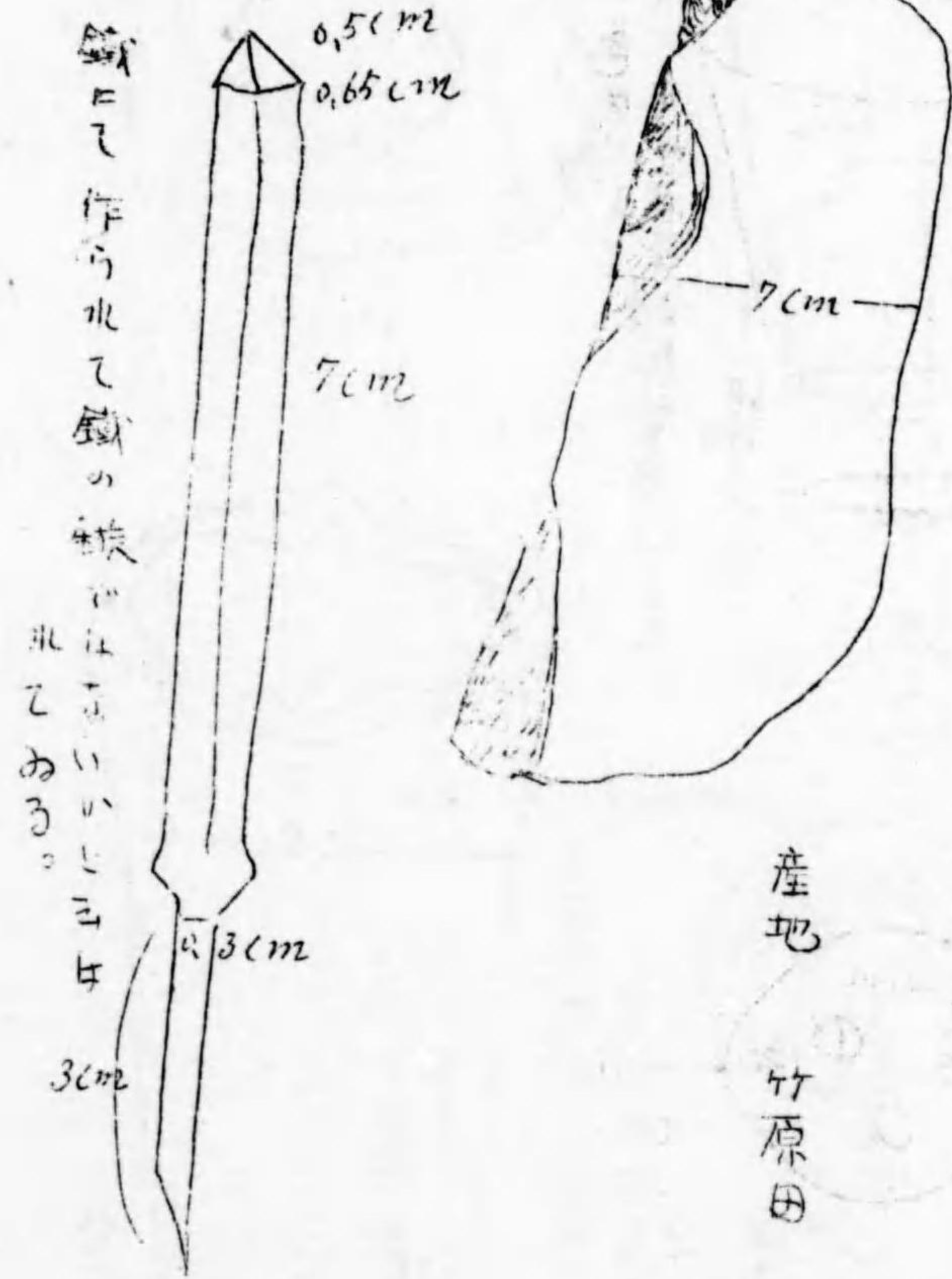
石斧

所々にとてある。表面の小孔があり、表面にまはれたのが大

(249)

鐵卷

石



鐵にて作られ、鉄の線は、はなれ、いれ、こ、ま、は、れ、て、あ、る。

産地

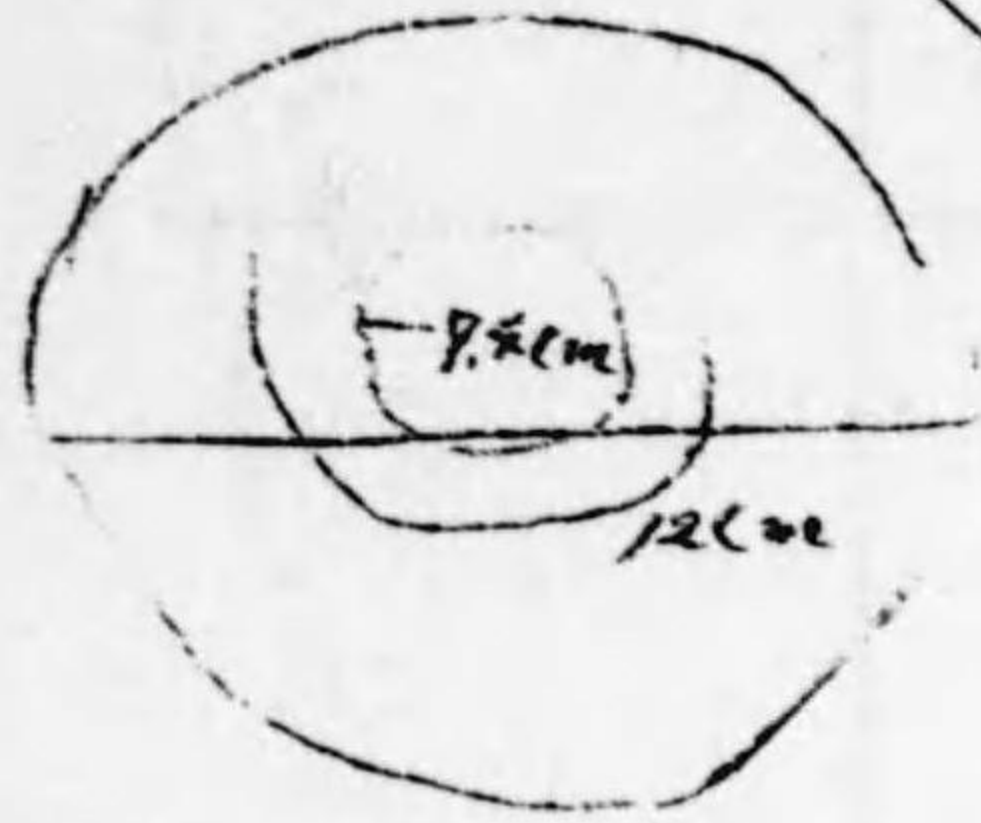
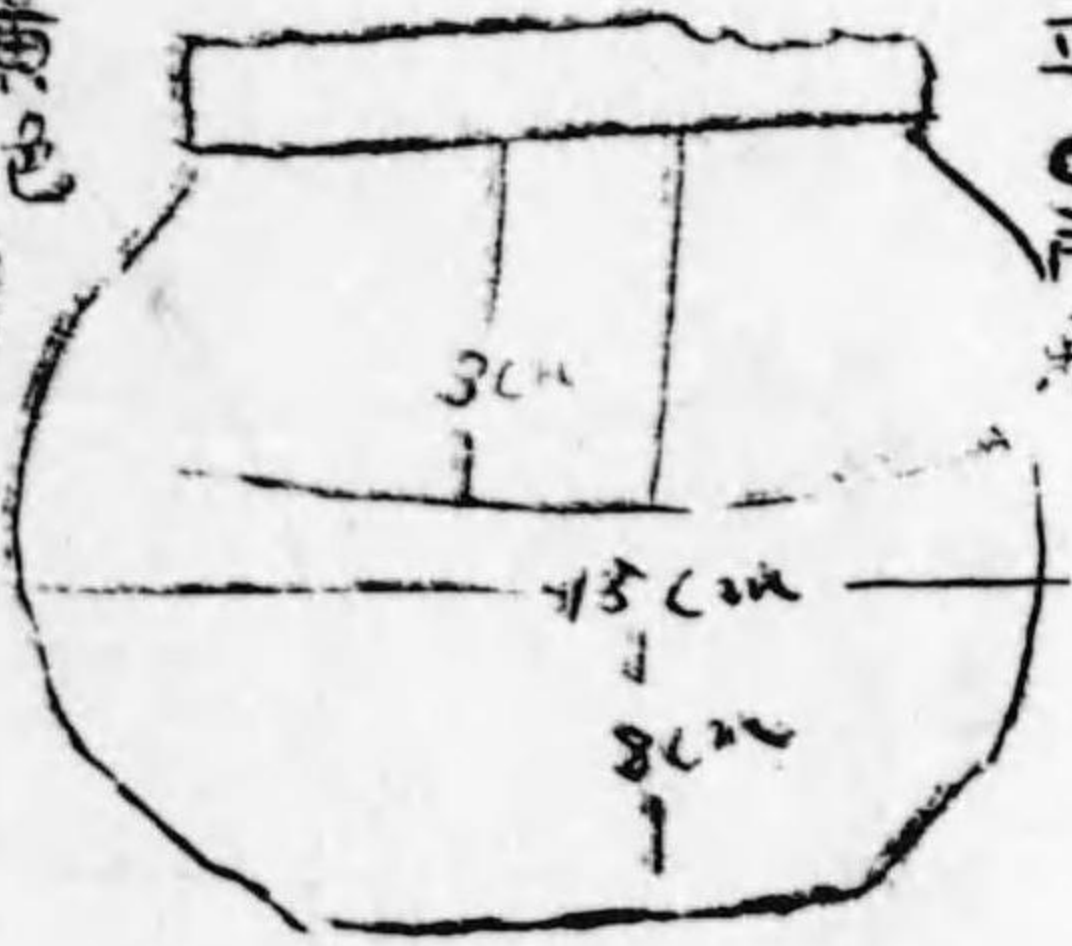
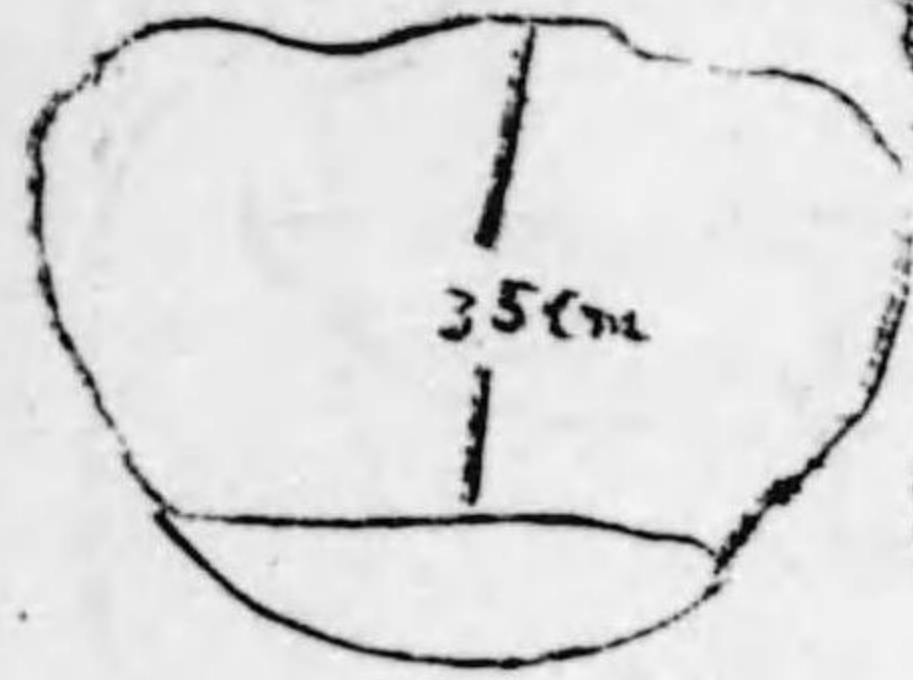
竹原田

(243)

志村亮平氏所藏

色は淡青色

出產地  
本都



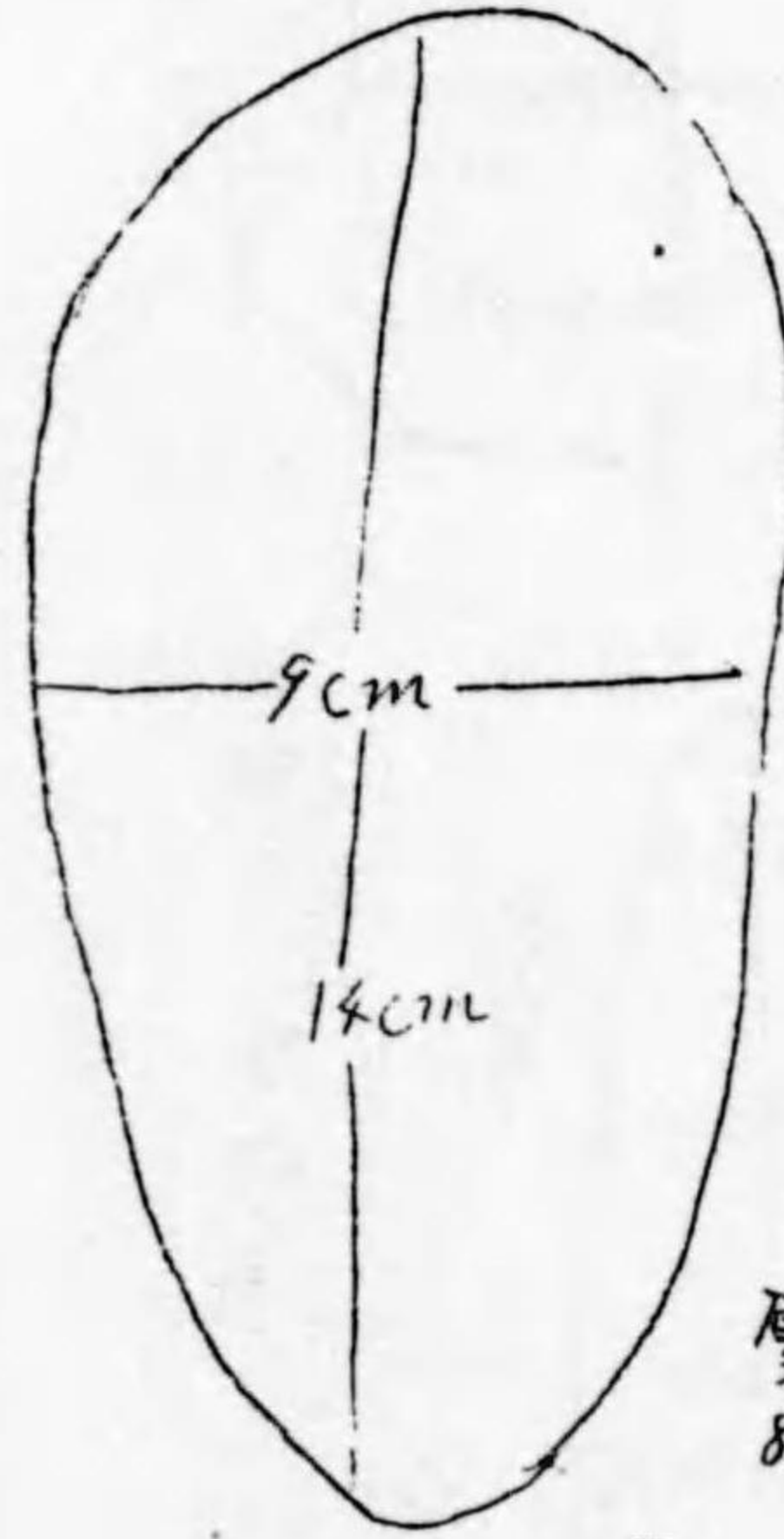
色 灰淡青色

産地

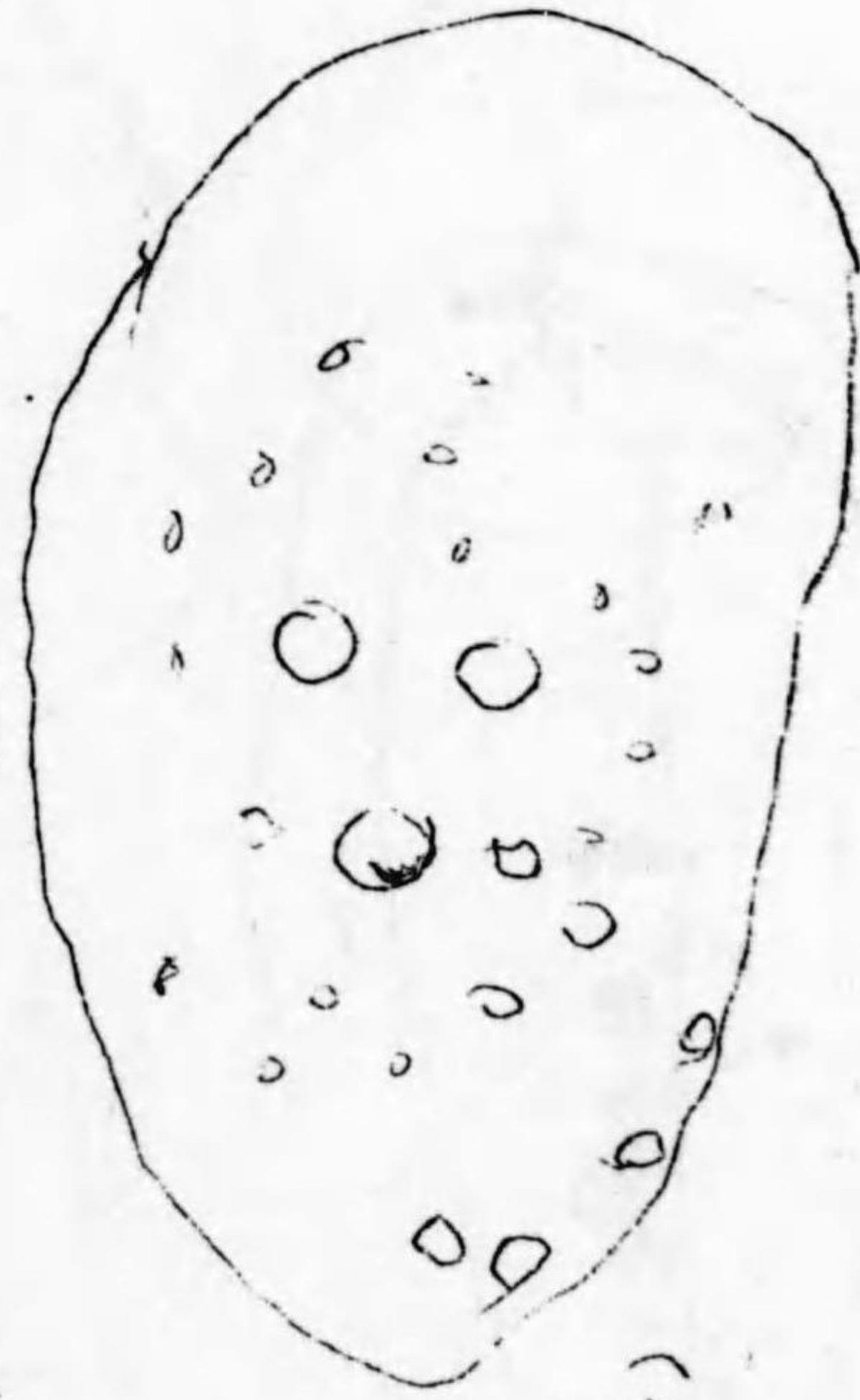
本都  
下山十田

下  
下  
下

—(251)—



厚 8cm



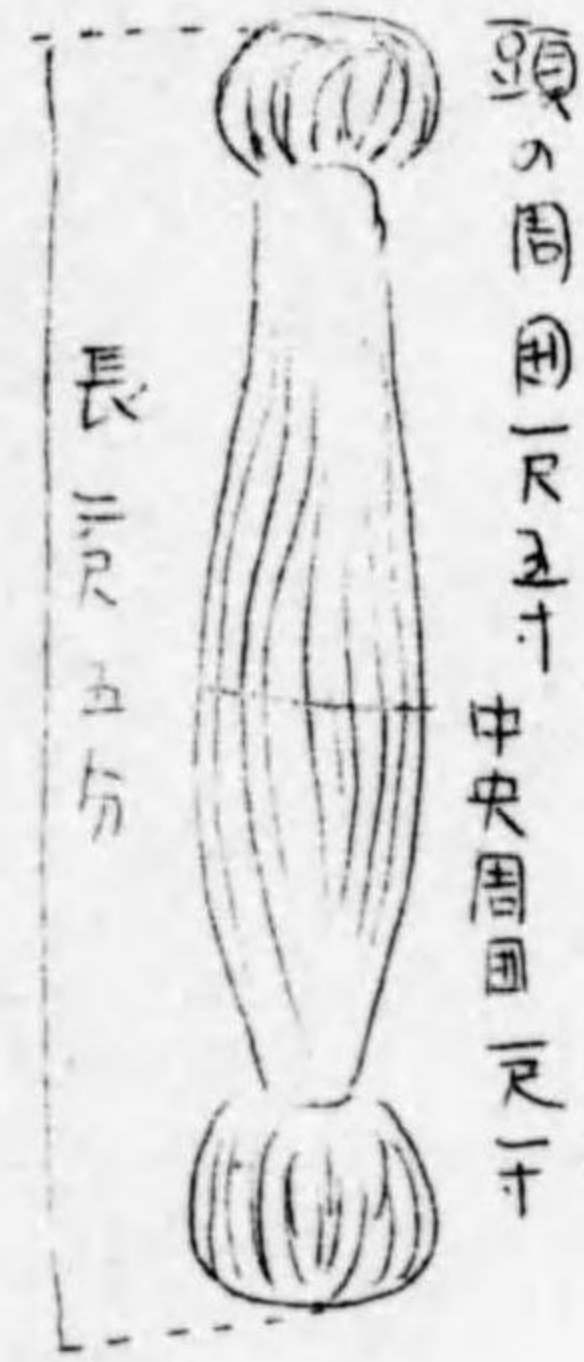
(裏)

石某閃綠岩

此の外に小さいものが  
一個あり。

—(250)—

故古屋真也氏所藏



頭の周囲一尺五寸 中央周囲一尺一寸

長三尺五分

重量三貫三百匁

箱の蓋書

頭楯劔とあり

大

正

十一年七月十六日

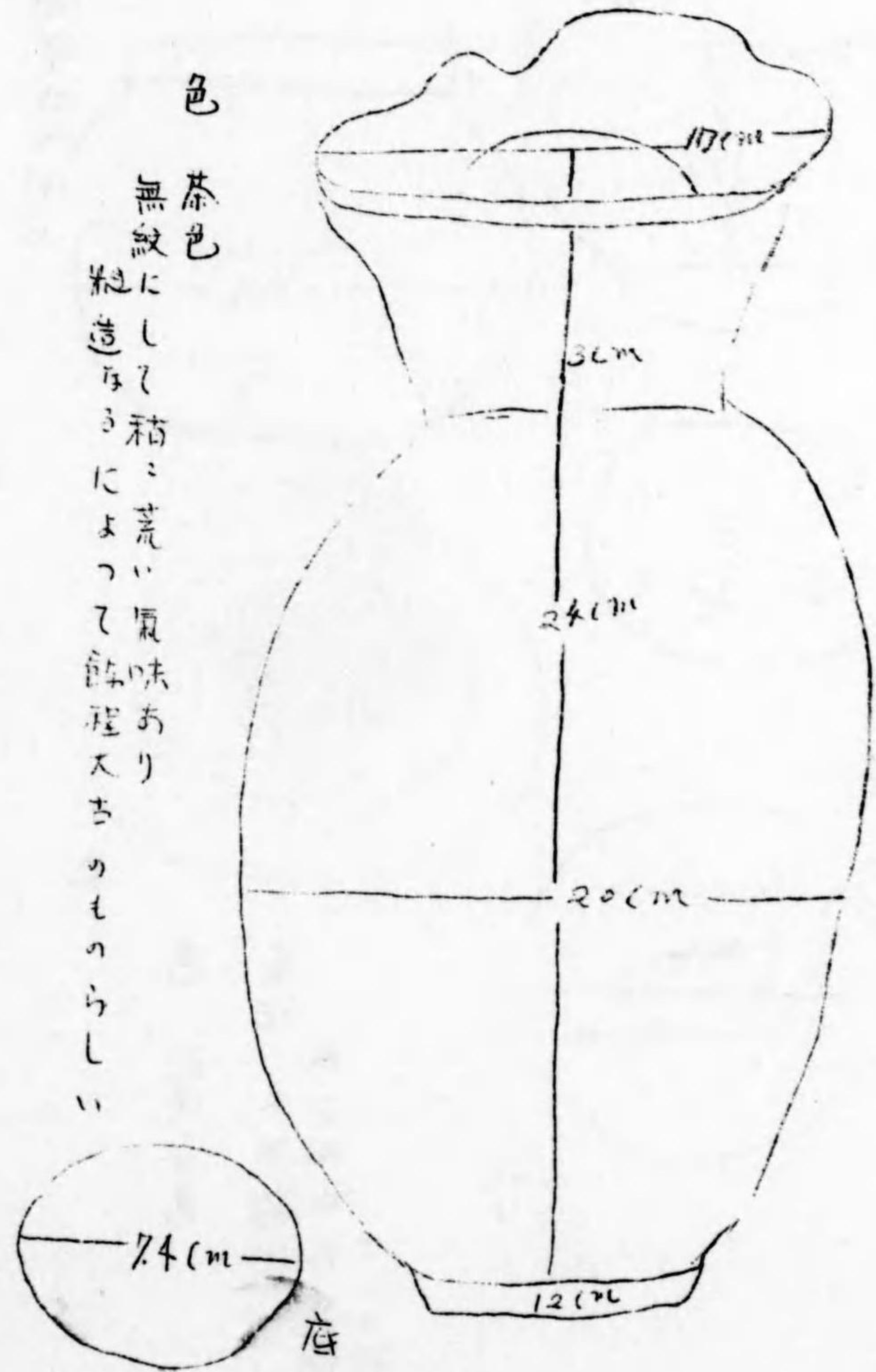
文部省博士

鳥居龍藏氏蔵

(253)

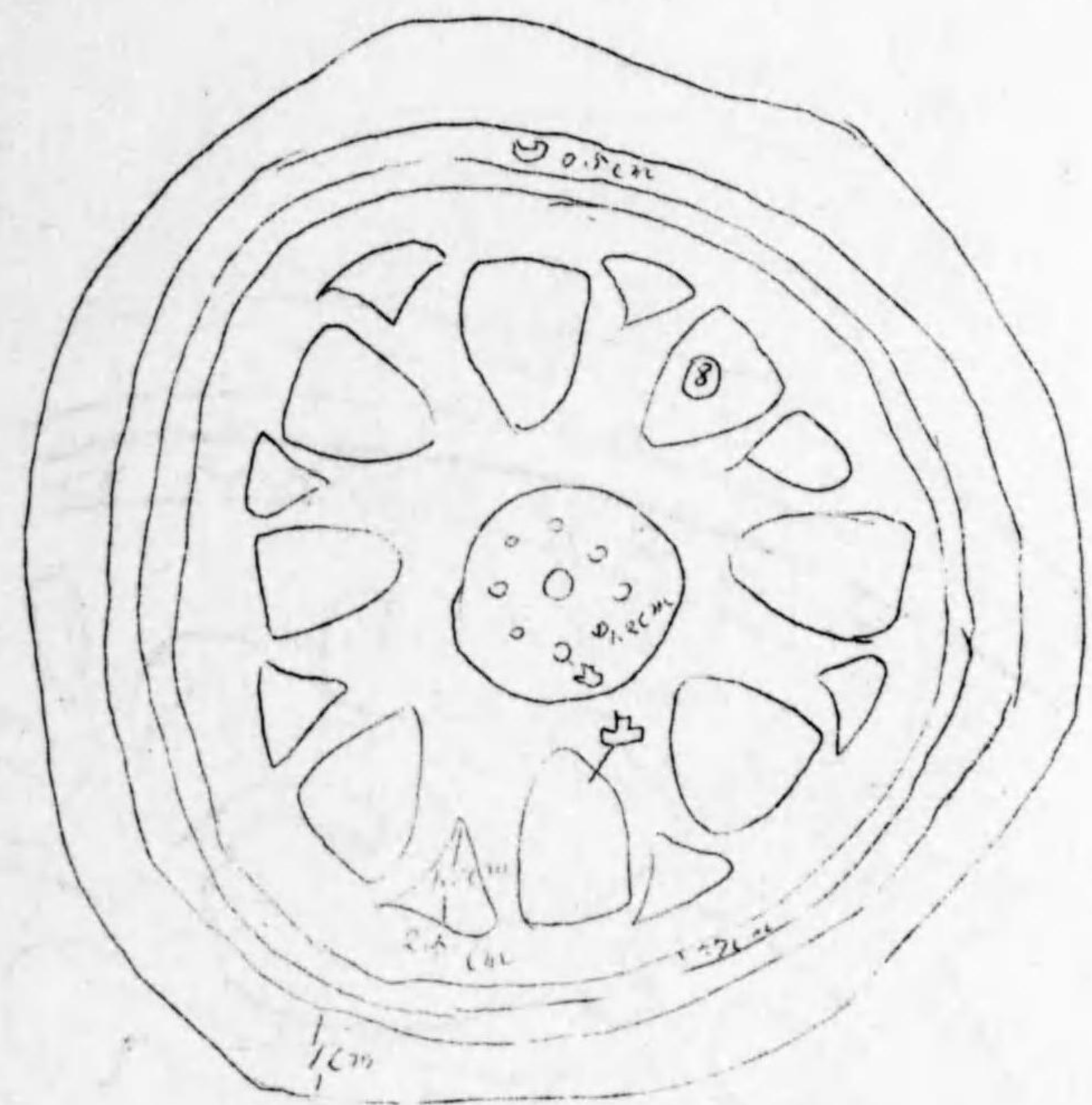
色 茶色

無紋にして稍々荒い氣味あり  
 製造なるによつて餘程太ぢのものらしい



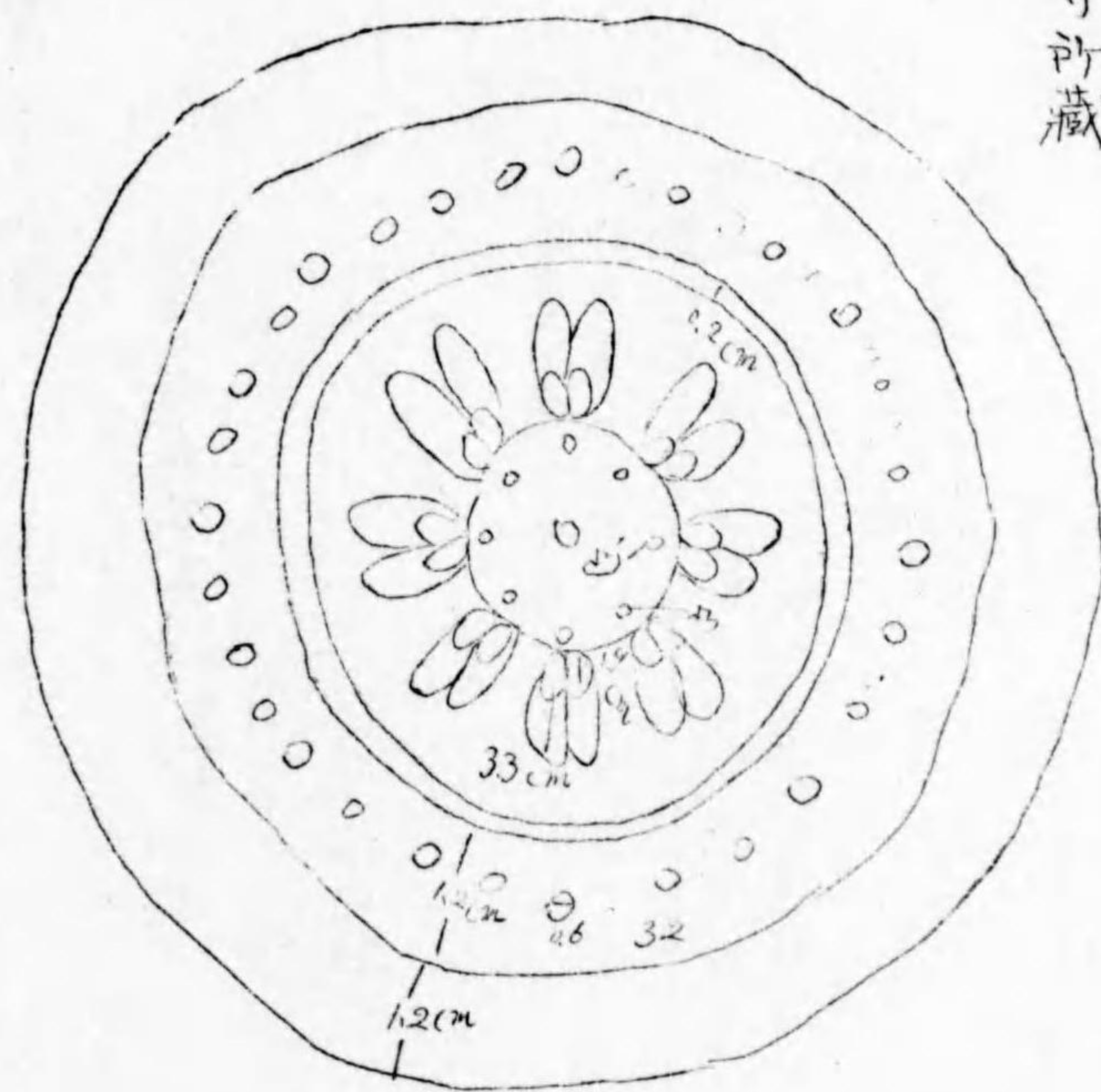
底

(252)



—(255)—

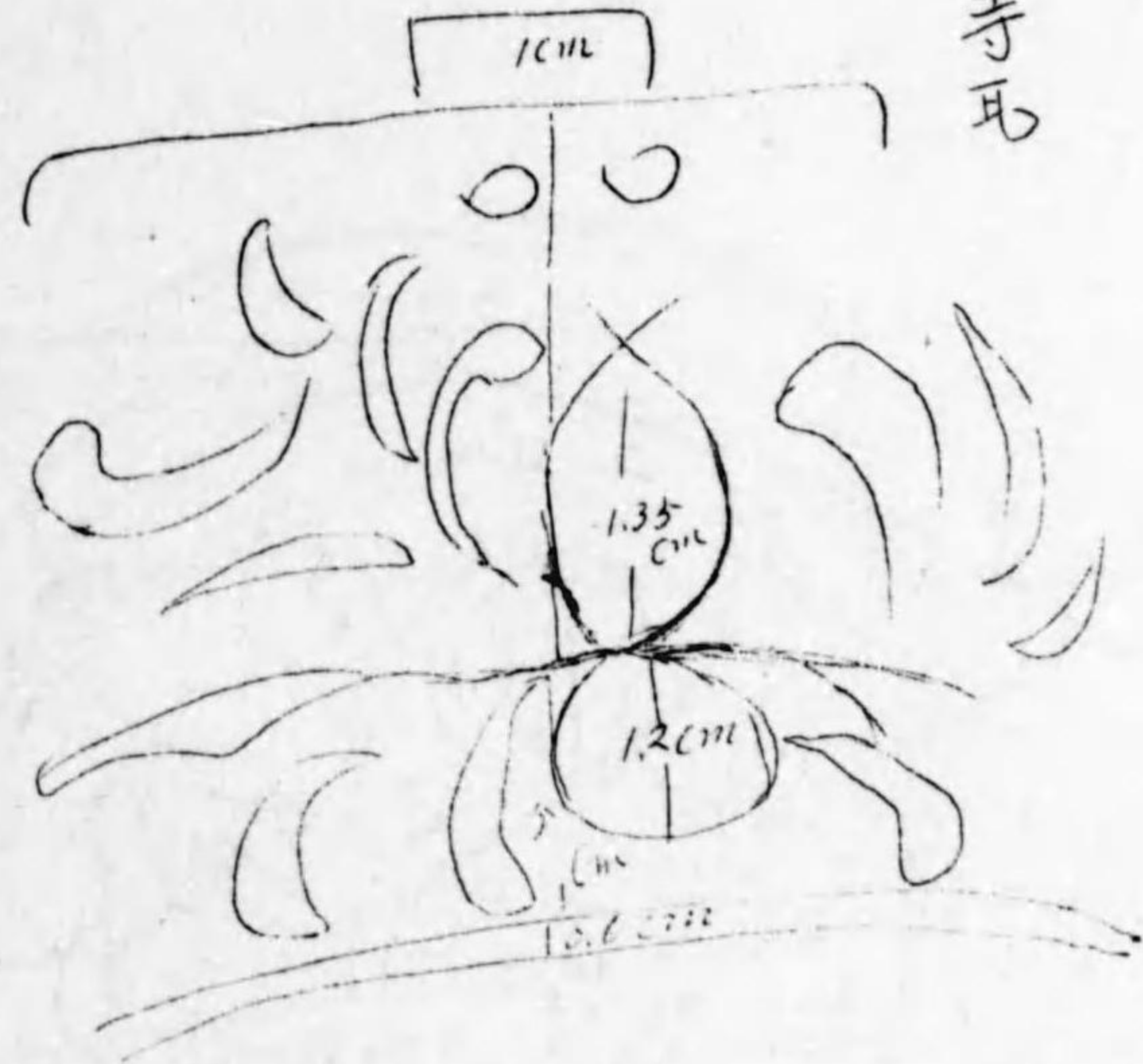
國分寺所藏



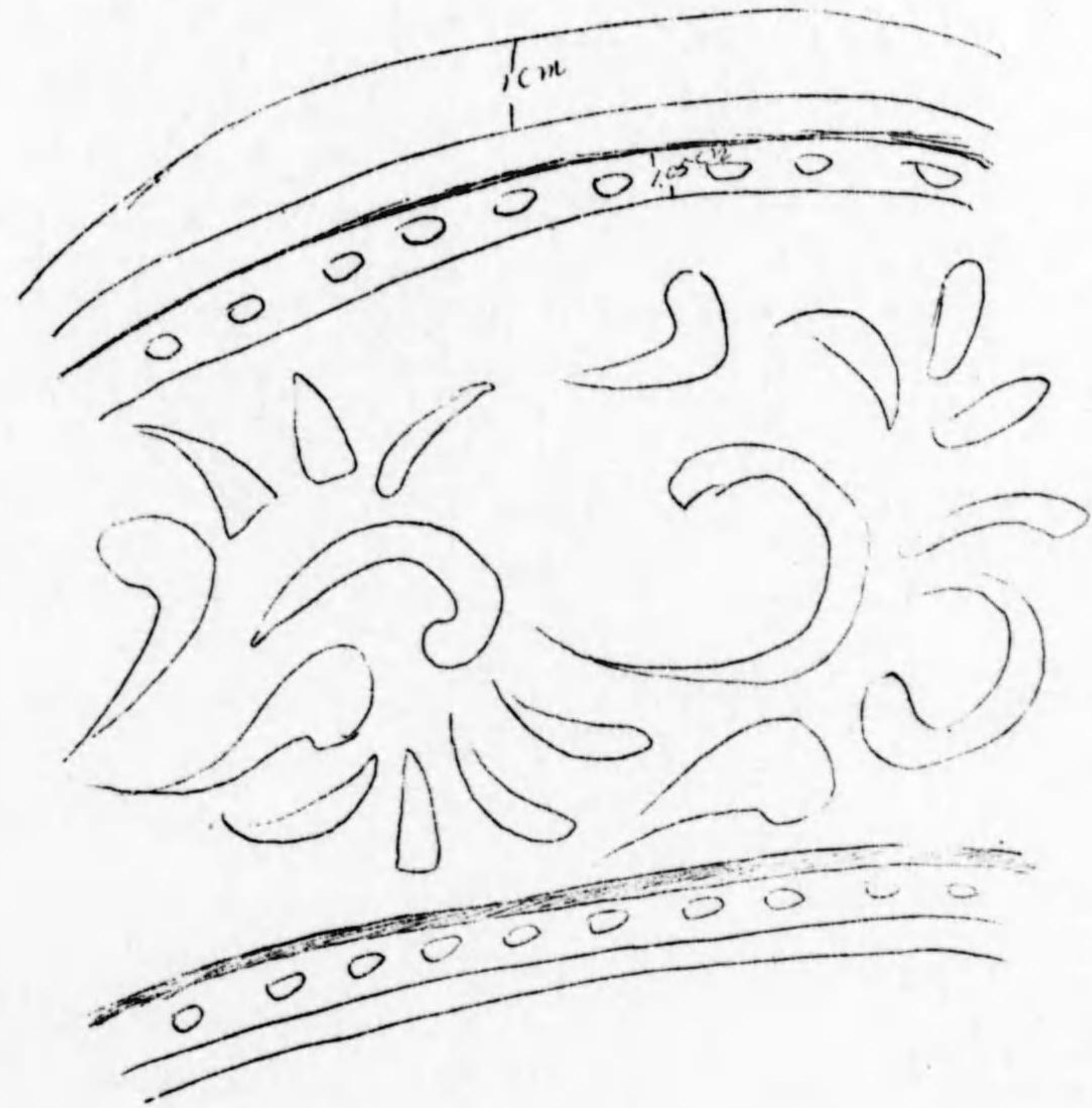
國分寺瓦

—(254)—

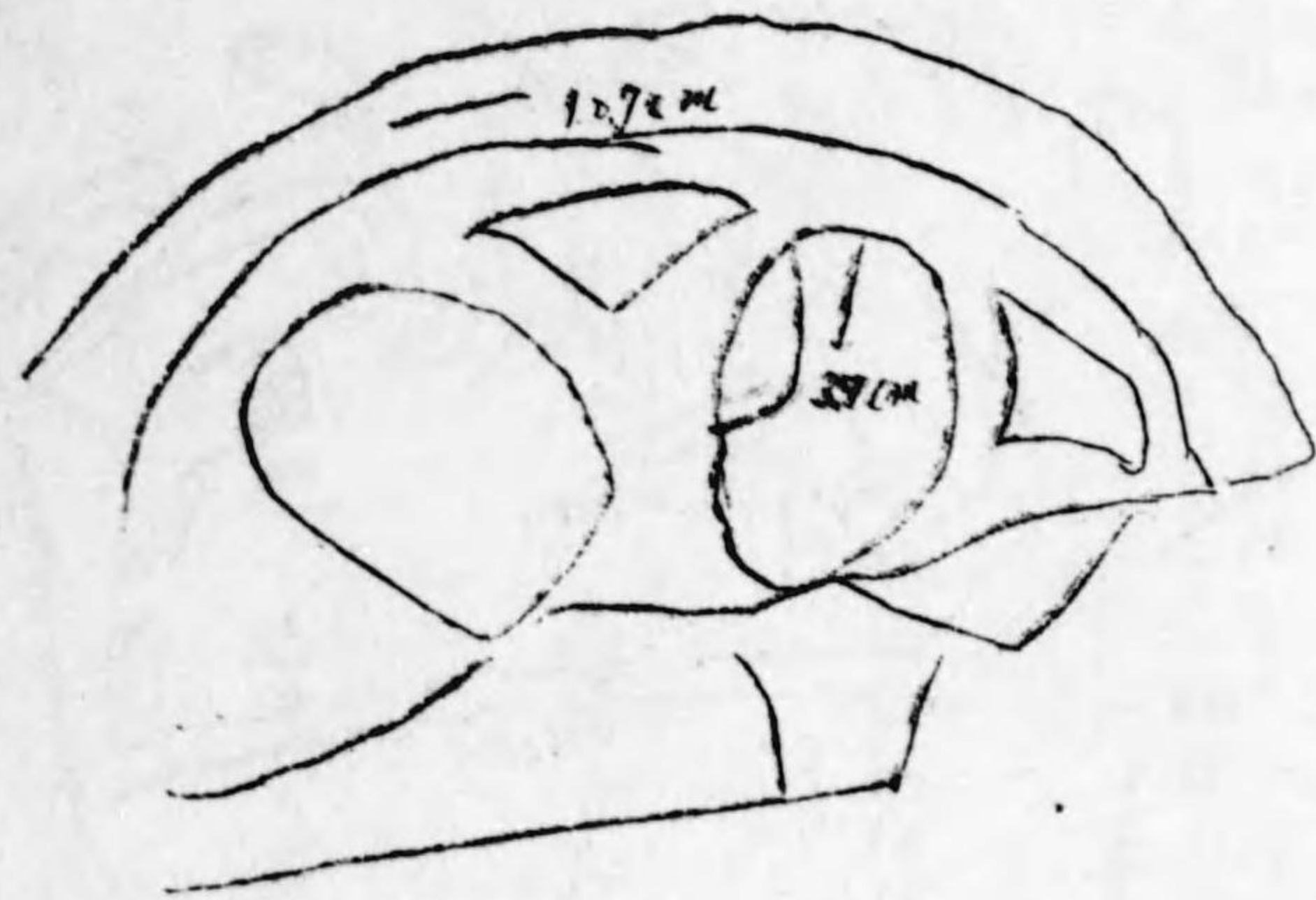
國分尼寺瓦



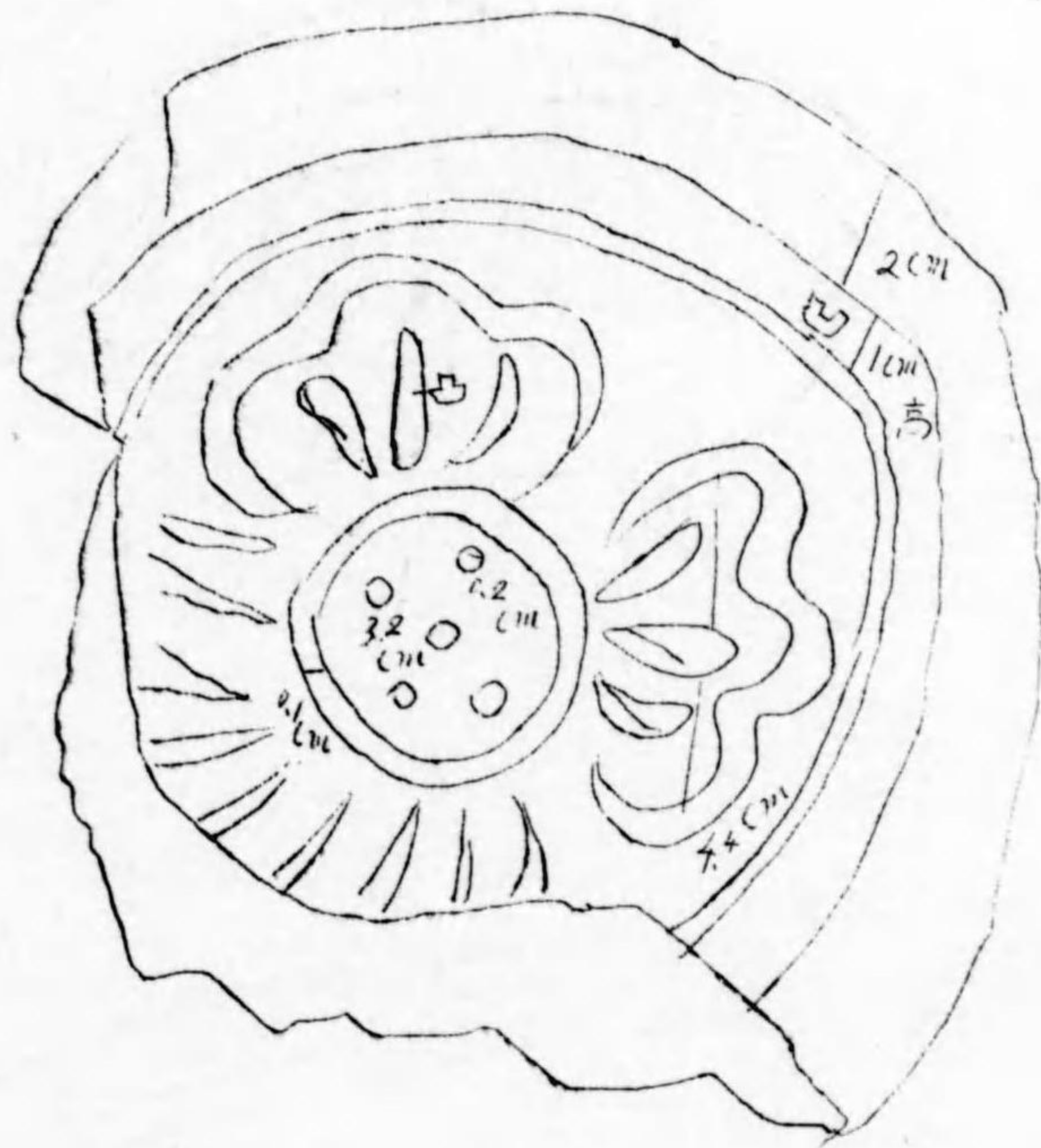
—(257)—



—(256)—



— (259) —



— (258) —

石屋の部  
 此水はつりては本村においては往昔より開化の度非常に進める地なる  
 一に此水はつりて先人の住める跡あり。甲斐國誌によると國分區に七つ木に  
 一にあり。此水が最近までありしものを調べて見るに

△豆塚  
 一宮村國分字塚米にあり。石室尚存す。周囲二十間ばかりありしが  
 今より十年ばかり前開墾したる。

△孤塚  
 同所金山にあり。大さ三間四方。石室は狐狸の巢窟たりしが開墾せら  
 水て平坦なる畑とを水り。

△四つ塚  
 同所四つ塚にあり。大さ經六間。石室も存せしが今は僅かに其の迹を  
 當るのみ。

△聖塚





同所竝木地蔵にあり。石室は入口四尺。奥は八尺。奥行四間許。明治  
二十四年三月頃より開墾して今は全く畑地と成り。附近より人骨土  
器の碎片を發見せられたり。また傍に五輪塔の不完全なるものあり

同所經塚にあり。傳へて云ふ古へ國分寺焼失の際經藏の灰燼を堆積せ  
りと。四十年前此の邊より一口の古劍を發掘せしと。

同所權兵衛塚にあり。石室は入口南向にて、明治四十年八月水害の際全  
川横溢して今其の形迹を失ひ

同村末木薬師堂にあり。南向にして奥深く内より土器を得たり。明治  
四十年竹林を開墾せし折發見したり。色褐色にして形壺に似た水どま  
破水てその形を全うせず

同村北都塚伊勢田の面積十四坪ありしが漸次開墾せられ水て平坦と  
なり。今は其の跡を存するのみ。今都塚神社と稱す。古老の訛に此の

一面を得しが伊勢の幸福太夫に贈水りと。維新前此處より古銭

同所八つ塚其の地の中に円形の岡阜をなし、その周囲五尺許の榎あり。  
其の面積凡そ十坪二十余年前より開墾せしが下には拾個ばかりの石を  
円形におきその中に文字を書せる小石を車ゆその上に砂土を覆ひてあ  
りしと云ふ。今水の字と併の字とを書ける二石二個を田村氏所藏す。  
甲斐國誌には京塚とあるに經塚と云ふとす。

同所藥師堂の竹林中にあり。此の塚の形は長方形にして入口は南西  
に向ひ幅三尺三寸少し入り。間口七尺五寸奥行一丈大尺五寸高さ四尺  
八寸あり。周辺は石を積み天井は二枚の大石を以て之を蔽ひ外は  
土を盛りて墳となし、大丈六間四方あり。之を村内現在せる石倉の模  
範である。現地は古屋端清氏の竹藪内にあり。

第二十二章 古文書類及び其の他

本村は甲斐の國の文化の發源地として同知せられるやうに其處に残さ  
 れたものも多々ある。特に先住民並に王朝時代に於ては全國中稀に  
 見る場所として西分守守の四六三寺の所在地となつてゐる  
 かやうな地であつて古文書類等も多々あるべきであつたが惜しい哉  
 興亡幾變遷の辛い運命にめぐり合はれて神にありしものは政風崇拝及び  
 になり灰燼の憂目に遭ひ旧家はたゞて稀にありしものは政風崇拝及び  
 經濟思潮とに災されて惜気もなく他地方に移され今は僅かしか其面影  
 を残してゐるものが状態であるは遺憾とするものである  
 これについて又は学校としてしまだ十分に研究もなからぬにより水工文淵苑  
 生の御研究をおかりして此處に簡単に志したわけである。詳細につ  
 ては當地に開かれる國史協議會の事業としての一宮村研究の折に譲り  
 たいと思ふ

一宮淺間神社所藏

1. 人皇百五代後奈良天皇御宸筆經卷 一軸
2. 武田大膳大夫源晴信退丹 一葉
3. 武田大膳大夫晴信寄進狀
4. 信玄公宿願成就壽附狀

六信玄公條目三ヶ條  
但箱四個入

七本殿棟札記

八來國次太刀一口

九寄進狀原奉人

二山宮神社所藏  
一山宮大御所奉納御生御棟札

三兩ノ木八幡社所藏

一宮領朱印

二塔城御所寄進狀

三社殿扁額奉納遺理木

四甲斐奈神社所藏

一社領朱印

二神祖宮境内面

三書寫心經六卷

四書寫千字觀音呪一卷

五書寫念佛千遍一卷

六書寫法華經八卷

五金剛山慈眼寺所藏

元祿四年歲武田信貞臣武州佐野澤政勝書  
元祿六年歲武田信貞臣武州佐野澤政勝書  
元祿八年乙亥曆書寫人同人  
安永五丙申歲正月二十二日書寫終

一祈禱席ノ旋書  
二信玄祈願依願狀  
三勝頼ノ遺物送狀ノ控  
四屋敷高寄進狀  
五禁制

六寺領狀

七寺領朱印

八寺領寄進狀

九病氣恢復禮狀

十米十俵送狀

六瑞光山長昌寺所藏

一大殿若經六百卷

二兩宮家國以後ノ系圖

三勅化募集ニツキ寺社奉行ノ願書

七護國山國分寺所藏

一聖武天皇御詔勅

二紺紙金泥ノ心經

三武田家御判物

四徳川家康御判物

其一  
其二  
其二  
其二

- 八 徳川家御朱印
- 六 禁制
- 八 紫金山瑞蓮寺所藏
- 1. 元祖回光大師御筆御名牒
- 2. 八ノ宮良純法親王御染筆式紙
- 3. 金字縫取御名牒
- 4. 風早三位實秋御之額
- 5. 齋園ノ詩歌
- 6. 故芝増上寺管長貫務之歌
- 7. 瑞蓮寺過去帳
- 九 醫王山淨泉寺所藏
- 1. 新編萬病回春拔書
- 2. 十二月往來管相丞御製
- 3. 眞宗意得鈔百十六ヶ條問答
- 4. 假名交字同名類字
- 5. 古狀揃
- 6. 萩原元克ノ三部經
- 十 故古屋眞世ノ氏所藏
- 1. 後水尾院宸翰 一卷

- 2. 頭鉈叙
- 十一 故古屋眞賀喜氏所藏
- 1. 古屋眞武ノ戒言ニ對スル蜂城希眞ノ書
- 2. 蜂城ヨリ中務少輔淺野長祚へ宛テタル書簡
- 3. 古屋周斎ヨリ在東京子鬼花村へ宛テタル書簡
- 4. 淺野長祚ヨリ古屋雲成へ宛テタル書簡
- 十二 志村亮平氏所藏
- 1. 信州川中島合戦ノ折ノ褒狀
- 2. 免許狀
- 3. 棟本櫻井庄之助ヨリノ書付
- 4. 加賀美光章ヨリ志村勝之進ニ贈レルモノ
- 5. 勝之進七十ノ賀ニ本居宣長ノ祝セタル歌
- 6. 同上義榮元克ノ祝セタル歌
- 7. 志村天目神道免許狀
- 8. 加賀美光章謝詩
- 9. 天目先生ノ許へ梅花ヲ手折リテサハガ
- 10. 瓊浦老人ヨリ志村天目ニ送レルモノ
- 十三 古屋端清氏所藏
- 1. 松平甲斐守揮毫孫子旗

乙 使者指替之通知書

十四 故田草川源右衛門氏所藏

一 鎮守寺備大神天満天神稻荷大明神、再興ニツキ志村天目、撰

五 田中美尚氏所藏

一 軍斐飯田ヶ原合戦褒狀

二 岩村城攻ノ褒狀

三 定

十六 岩間又市氏所藏

一 九代ノ祖岩間大藏昌頼ノ感狀

二 第十代爲昌ノ感狀

三 第十一代信昌ノ晴信公御朱印

四 今上朱印

十七 石原團平氏所藏

一 石原守明天正九年桔梗ヶ原合戦ノ折ノコト

十八 岩間栄藏氏所藏

一 神罰騷動神宣之事

二 永納金請取覺

十九 田中陣屋ノ辭令  
三 豐直平氏所藏

一 覺(天明七年)

二 覺(天明八年)

三 御沙汰書

二十 岩間源吾氏所藏

一 小鳥蕉園之詩

二 帶刀御免許狀

二十一 近藤林右衛門氏所藏

一 賭弓ニ関シ處分仰渡サレ書

二十二 近藤正一氏所藏

一 萩原元克ノ年乃始能歌

二十三 有馬金太郎氏所藏

一 下知書

二 貸金覺

二十四 古屋惣平氏所藏

一 御朱印

二 飛鳥井前大納言御染筆

三 棟別免許狀  
 三 野沢林助氏所藏  
 1. 劍道厚心流目錄  
 2. 無一劍 鎧 長刀 鎌 十文字 弓  
 三 中村藤平氏所藏  
 1. 劍道心流目錄  
 2. 新當流一卷書  
 三 兩官五郎氏所藏  
 1. 明治六年皇城尖上  
 2. 際シ献上ヨナセシヨリテ木杯下賜ウト(官内者)  
 三 水上文淵氏所藏  
 1. 小島蕉園氏筆蹟ニ関シテ文部省ヨリノモノ敷通

昭和三年十月五日印刷  
 昭和三年十月十日發行  
 山梨縣東八代郡一宮村金田  
 一宮講義小学校内  
 編輯發行兼印刷人 今村嘉重  
 山梨縣東八代郡一宮村金田  
 發行所 一宮講義小学校  
 納本済

終

